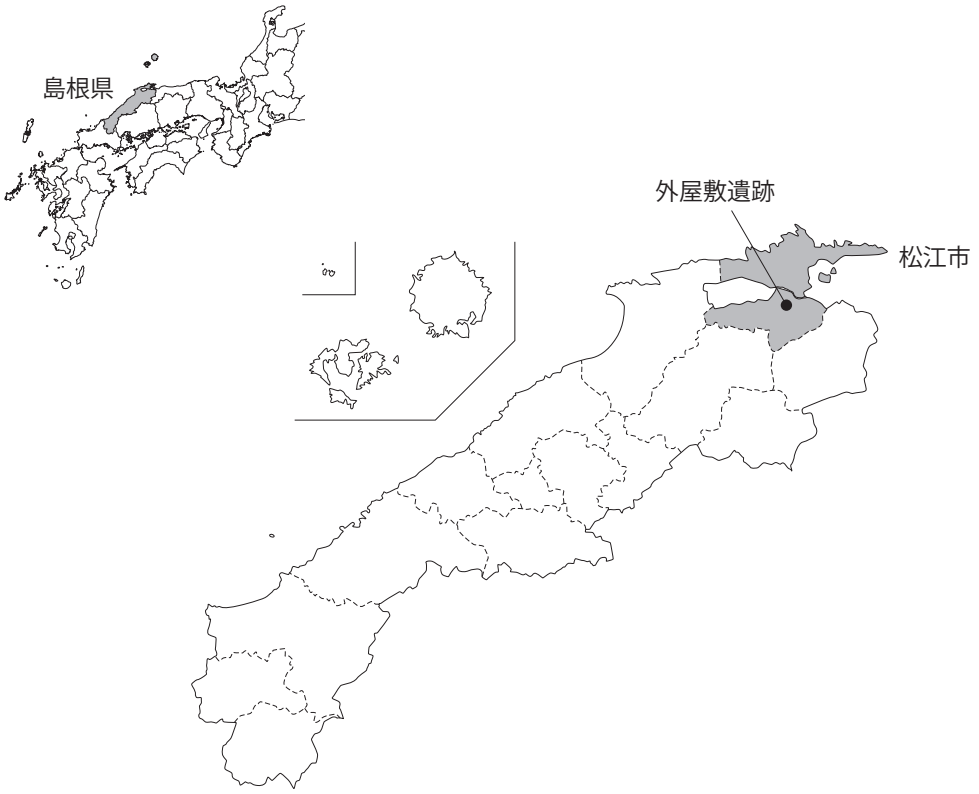
松江市文化財調査報告書　第 177 集

大庭センターハイツ宅地造成工事に伴う発掘調査報告書

外屋敷遺跡



平成 28(2016) 年 9 月

島 根 県 松 江 市 教 育 委 員 会
公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団

例　言

1. 本書は、平成 27 年度に実施した大庭センターハイツ宅地造成工事に伴う外屋敷遺跡の本発掘調査報告書である。
2. 本書で報告する本発掘調査は、有限会社キムラプランから松江市教育委員会が依頼を受け、公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団（平成 28 年 7 月改称）が実施した。
3. 本調査地の名称・所在地は以下のとおりである。

   （名　称）　外屋敷遺跡（そとやしきいせき）

   （所在地）　島根県松江市大庭町字外屋敷（しまねけんまつえしおおばちょうあざそとやしき） 800 番地外
4. 現地調査の期間 (本発掘調査)

   平成 27 年 12 月 14 日～平成 28 年 3 月 25 日
5. 開発面積及び調査面積

   開発面積　7,814.8㎡

   調査面積　1,431.0㎡
6. 調査組織

依 頼 者	有限会社　キムラプラン	代表取締役	木村　勇治
主 体 者	松江市教育委員会	教　育　長	清水　伸夫

【平成 27 年度】　現地調査

事 務 局	松江市歴史まちづくり部	部　　長	安田　憲司
	〃　まちづくり文化財課	課　　長	永島　真吾
	〃　〃　専門幹（埋蔵文化財調査室長兼務）		飯塚　康行
	〃　〃　埋蔵文化財調査室　調査係	係　　長	赤澤　秀則
	〃　〃　〃　〃	主　　任	川上　昭一
	〃　〃　〃　〃	嘱　　託	門脇　誠也
調査指導	島根県教育庁　文化財課	調 整 監	椿　　真治
	〃　〃	主　　幹	深田　　浩
実 施 者	公益財団法人松江市スポーツ振興財団	理 事 長	清水　伸夫
	埋蔵文化財課	課　　長	曽田　　健
	〃　調査係	係　　長	川西　　学
	〃　〃	調 査 員	小山　泰生（担当者）
	〃　〃	調査補助員	宇津　直樹

【平成 28 年度】　報告書作成業務

事 務 局	松江市歴史まちづくり部	部　　長	藤原　亮彦
	〃	次　　長	永島　真吾
			(まちづくり文化財課　課長兼務)
	〃　まちづくり文化財課		
	〃　〃　専門幹（埋蔵文化財調査室長兼務）		飯塚　康行
	〃　〃　埋蔵文化財調査室　調査係	係　　長	赤澤　秀則
	〃　〃　〃　〃	専門企画員	川上　昭一
	〃　〃　〃　〃	学　芸　員	三宅　和子
	〃　〃　〃　〃	嘱　　託	門脇　誠也
調査指導	島根県立松江北高等学校	教　　諭	大谷　晃二
	出雲市　市民文化部　文化財課	学芸調整官	花谷　　浩
実 施 者	公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団	理　事　長	清水　伸夫
	埋蔵文化財課	課　　長	曽田　　健
	〃　調査係	係　　長	川西　　学
	〃　〃	主　　任	小山　泰生（担当者）
	〃　〃	調査補助員	宇津　直樹

7. 調査に携わった発掘作業員

   井川　洋、小原節子、金坂　昇、向村生人、千原　昌、土江伸明、深津靖博、福田紘治、和田　章、渡部耕二

8. 本書に記載した遺物の復元・実測・浄書、遺構の浄書は以下の者が行った。

   宇津直樹、金坂　昇、木村由希江

9. 報告書作成にあたっては、以下の方々から多大なご指導、ご教授、ご協力を頂いた。記して感謝の意を表したい。（順不同、敬称略）

   島根県教育庁　埋蔵文化財調査センター　内田律雄

   島根大学　法文学部　教授　大橋泰夫

   島根県文化財保護審議会委員　勝部　昭

10. 本書の執筆は第 1 章を松江市埋蔵文化財調査室が、第 2 ～ 5 章を小山が執筆した。編集は松江市埋蔵文化財調査室の協力を得て小山が行った。

11. 本書の編集にあたっては、DTP 方式を採用し、Adobe 社の Adobe InDesign CS6 及び CC2015、Adobe Illustrator CS6 及び CC2015、Adobe Photoshop CS6 を用いて作業を行った。

12. 調査は 4 次に亘って実施している。第 1 次及び第 2 次調査はトレンチ調査、第 3 次調査は本発掘調査、第 4 次調査は学術調査である。詳細な内訳は第 1 章を参照されたい。また、各次調査成果は第 1・2・4 次調査を第 3 章第 1 節に、第 3 次調査を第 4 章に掲載した。

13. 本書における土器区分・分類・編年は以下を参照した。

［弥生土器］

松本岩雄・正岡睦夫　1992 『弥生土器の様式と編年　山陰・山陽編』 木耳社

［土師器］

島根県教育委員会　2013 『史跡出雲国府跡－ 9 総括編－』

［須恵器］

大谷晃二　1994 「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌　第 11 集』 島根考古学会

島根県古代文化センター　2010 「出雲地域における古代須恵器の編年」『出雲国の形成と国府成立の研究』

島根県教育委員会　2013 『史跡出雲国府跡－ 9 総括編－』

［中世土師器］

廣江耕史　1992 「島根県における中世土器」『松江考古　第 8 集』 松江考古学談話会

日本中世土器研究会　1998 『中近世土器の基礎研究Ⅷ』

山陰中世土器検討会　2013 「山陰における中世前期の土師器」『第 12 回　山陰中世土器検討会資料集』

［陶磁器］

中世土器研究会　1995 『概説　中世の土器・陶磁器』 真陽社

九州近世陶磁学会　2000 『九州陶磁の編年－九州近世陶磁学会 10 周年記念－』

14. 本書に掲載する土層の色調は『新版　標準土色帖』農林水産省農林水産技術会議事務局監修：財団法人日本色彩研究所色票監修に従って表記した。

15. 本書における方位は公共座標北を示し、座標値は世界測地系に準拠した公共座標第Ⅲ系の値である。また、レベル値は海抜標高を示す。

16. 本書における遺構の略号は以下のとおりである。

SA：柵　SB：掘立柱建物跡　SD：溝　SF：道路　SK：土坑・墓壙　SP：柱穴　SX：不明遺構

17. 本書の遺構番号は調査時に設定したものを報告書作成にあたり、種別の番号に振り直して記載した。なお、本文の説明上、トレンチ調査と本発掘調査の遺構番号は主要なものについて連番で記載した。

18. 掲載した遺構図の縮尺は各図に縮率とスケールを明記した。遺物実測図の縮率は原則 1/3 とし、断面は土器を白ヌキ、須恵器を黒塗り、石製品を網掛けで示した。陶磁器の断面は陶器を白ヌキ、磁器を黒塗りで示した。

19. 出土遺物、実測図及び写真等の資料は松江市教育委員会で保管している。

目　次

例言

第１章　調査に至る経緯……1

第２章　位置と環境……3
第１節　地理的環境……3
第２節　歴史的環境……3

第３章　トレンチ調査の概要……6
第１節　調査の手法……6

第４章　本調査の成果……11
第１節　本調査の範囲と手法……11
第２節　調査の概要……13
第３節　基本層序……14
第４節　遺構と遺物……18
第１項　掘立柱建物跡……19
第２項　溝……27
第３項　道路遺構……33
第４項　柵……38
第５項　土坑・墓壙……38
第６項　その他の遺構……44
第７項　その他の遺物……45

第５章　総括……47
第１節　遺構の変遷と様相……47
第２節　外屋敷遺跡における官衙遺構と古代山陰道……53
第３節　結語……58

遺物観察表
写真図版
報告書抄録

挿図目次

第 1 図　調査地位置図…… 1
第 2 図　開発範囲と調査区位置図…… 2
第 3 図　周辺の遺跡分布図…… 4
第 4 図　外屋敷遺跡トレンチ配置図…… 6
第 5 図　T2 平面図・断面図 …… 8
第 6 図　T3 平面図・断面図 …… 9
第 7 図　T10 平面図・断面図 …… 9
第 8 図　T11 平面図・断面図 …… 10
第 9 図　トレンチ調査出土遺物…… 10
第 10 図　調査区グリッド配置図…… 11
第 11 図　基本土層図…… 14
第 12 図　外屋敷遺跡遺構平面図…… 15・16
第 13 図　調査区北壁土層図…… 17
第 14 図　調査区東壁土層図…… 18
第 15 図　SB01 平面図・断面図 …… 19
第 16 図　SB01 出土遺物 …… 19
第 17 図　SB02 平面図・断面図 …… 20
第 18 図　SB03 平面図・断面図 …… 21
第 19 図　SB04 平面図・断面図 …… 22
第 20 図　SB01 ～ 04 の建物配置 …… 23
第 21 図　SB05・06 平面図・断面図…… 25
第 22 図　SB06 出土遺物 …… 26
第 23 図　SB07 平面図・断面図 …… 26
第 24 図　SB07 出土遺物 …… 26
第 25 図　SD01 の遺構配置 …… 27
第 26 図　SD01(南北溝) 平面図・断面図…… 27
第 27 図　SD01(東西溝) 平面図・断面図…… 28
第 28 図　SD01 出土遺物 …… 28
第 29 図　SD02 平面図・断面図 …… 29
第 30 図　SD02 出土遺物 …… 29
第 31 図　SD03 平面図・断面図 …… 30
第 32 図　SD03 出土遺物 …… 30
第 33 図　SD04 平面図・断面図 …… 31
第 34 図　SD04 出土遺物 …… 31
第 35 図　SD05 平面図・断面図 …… 32
第 36 図　SD05 出土遺物 …… 32
第 37 図　SD06 平面図・断面図 …… 33
第 38 図　SD06 出土遺物 …… 33
第 39 図　SF01 平面図・断面図 …… 34
第 40 図　SF01 北側側溝 (西側) 平面図・断面図 …… 34
第 41 図　SF01 北側側溝 (東側) 平面図・断面図 …… 35
第 42 図　SF01 北側側溝出土遺物 …… 35
第 43 図　SF02 平面図・断面図 …… 37
第 44 図　SF02 出土遺物 …… 37
第 45 図　SA01 平面図・断面図 …… 38
第 46 図　SK01 平面図・断面図 …… 38
第 47 図　SK01 出土遺物 …… 39
第 48 図　SK02 平面図・断面図 …… 39
第 49 図　SK03 平面図・断面図 …… 39
第 50 図　SK03 出土遺物 …… 40
第 51 図　SK04 平面図・断面図 …… 40
第 52 図　SK04 出土遺物 …… 40
第 53 図　SK05 平面図・断面図 …… 41
第 54 図　SK05 出土遺物 …… 41
第 55 図　SK06 平面図・断面図 …… 42
第 56 図　SK06 出土遺物 …… 42
第 57 図　SK07・08 平面図・断面図…… 43
第 58 図　SK08 出土遺物 …… 43
第 59 図　SX01 平面図・断面図 …… 44
第 60 図　SX01 出土遺物 …… 45
第 61 図　SX02 平面図・断面図 …… 45
第 62 図　東淵寺古墳関係遺物…… 46
第 63 図　遺構外出土遺物…… 46
第 64 図　外屋敷遺跡　弥生時代中期の様相…… 48
第 65 図　外屋敷遺跡　古代 (奈良時代～平安時代初期) の様相 …… 49
第 66 図　外屋敷遺跡　中世 (鎌倉時代～安土桃山時代) の様相 …… 51
第 67 図　外屋敷遺跡　近世 (江戸時代) の様相 …… 52
第 68 図　明治 8 年作成の旧大庭村切図 …… 53
第 69 図　区画溝 SD01 配置図…… 54
第 70 図　道路遺構 SF01 配置図・断面図…… 55
第 71 図　外屋敷遺跡 SF01 と下黒田遺跡 SD01・02 との関係…… 56
第 72 図　松江市大草町～玉湯町周辺の古代山陰道 (正西道) 推定ルート …… 57
第 73 図　松江市大庭町周辺の古代山陰道 (正西道) 推定ルート (勝部案) …… 57
第 74 図　SF01 の復元案と周辺遺跡の位置 …… 58

挿表目次

表 1　外屋敷遺跡トレンチ調査一覧…… 7
表 2　SK01 ～ 08 一覧 …… 43
表 3　外屋敷遺跡検出遺構・遺物一覧…… 47
表 4　区画溝 SD01 の規模…… 54

図版目次

本文中写真

写真 1　バックホーによる表土除去…… 12
写真 2　遺構の掘削と精査…… 12
写真 3　調査区北西角 E3 ～ E4 グリッド周辺の柱穴群 (北西から) …… 13
写真 4　外屋敷遺跡基本土層 (北壁) …… 14
写真 5　東淵寺古墳付近所在の石仏 (東から) …… 45

図版 1　調査地遠景・近景
1　茶臼山山頂から外屋敷遺跡を望む (北東から)
2　外屋敷遺跡近景 (南東から)
図版 2　トレンチ調査① (第 1 次調査)
1　T2 完掘後 (東から)
2　T2 SD01 東西溝埋土断面 (南西から)
3　T3 SD01 南北溝検出状況 (南東から)
4　T3 SD01 南北溝埋土断面 (北から)
図版 3　トレンチ調査② (第 4 次調査)
1　T10 SF01 南側側溝検出状況 (北から)
2　T10 SF01 南側側溝埋土断面 (北西から)
図版 4　トレンチ調査③ (第 4 次調査)
1　T11 完掘後 (南から)
2　T11 SD01 連結部分検出状況 (南西から)
図版 5　トレンチ調査④ (第 4 次調査)
1　T11 SD01 連結部分埋土断面 (南から)
2　T13 西側完掘後 (東から)
3　T13 東側完掘後 (東から)
図版 6　外屋敷遺跡の遺構① (第 3 次調査)
1　調査区北側西半 B3 ～ F3 グリッド完掘後全景 (東から)
図版 7　外屋敷遺跡の遺構② (第 3 次調査)
1　調査区北側東半 F3 ～ J3 グリッド完掘後全景 (東から)
2　調査区東側 J3 ～ J8 グリッド完掘後全景 (北から)
図版 8　外屋敷遺跡の遺構③ (第 3 次調査)
1　調査区南側 E8 ～ J8 グリッド完掘後全景 (東から)
2　調査区西側 E3 ～ E8 グリッド完掘後全景 (北から)
図版 9　外屋敷遺跡の遺構④ (第 3 次調査)
1　北壁 (G3 グリッド付近) 土層堆積 (南東から)
2　東壁 (J4 グリッド付近) 土層堆積 (北西から)
図版 10　外屋敷遺跡の遺構⑤ (第 3 次調査)
1　掘立柱建物跡 SB01・02 完掘後 (南東から)
2　掘立柱建物跡 SB03 完掘後 (北から)
図版 11　外屋敷遺跡の遺構⑥ (第 3 次調査)
1　掘立柱建物跡 SB04 完掘後 (東から)
2　SP05 断面 (南から)
3　SP15 断面 (南から)
4　SP18 断面 (南から)
5　SP21 断面 (南から)
図版 12　外屋敷遺跡の遺構⑦ (第 3 次調査)
1　掘立柱建物跡 SB05・06 完掘後 (南から)
2　SP24 断面 (西から)
3　SP25・28 断面 (西から)
4　SP26・29 断面 (西から)
5　SP27・30 断面 (西から)
図版 13　外屋敷遺跡の遺構⑧ (第 3 次調査)
1　SP31 断面 (西から)
2　SB05・06 と背後に東淵寺古墳 (西から)
3　SB05・06 完掘後 (南から)
4　掘立柱建物跡 SB07 完掘後 (南東から)
図版 14　外屋敷遺跡の遺構⑨ (第 3 次調査)
1　SD01 南北溝土層堆積状況 (南から)
2　SD01 南北溝北壁埋土断面 (南から)
3　SD01 南北溝 a-b 間埋土断面 (南から)
4　SD01 南北溝完掘後 (南東から)
図版 15　外屋敷遺跡の遺構⑩ (第 3 次調査)
1　SD01 東西溝完掘後 (北東から)
2　SD02 完掘後 (北東から)
3　SD03 完掘後 (南東から)
4　SD04 完掘後 (南東から)
5　SD06 と SK08(南西から)
図版 16　外屋敷遺跡の遺構⑪ (第 3 次調査)
1　SF01 北側側溝検出状況 (南東から)
2　SF01 北側側溝 (西) 完掘後 (南西から)
図版 17　外屋敷遺跡の遺構⑫ (第 3 次調査)
1　SF01 北側側溝 (東) 完掘後 (南西から)
2　SF01 北側側溝土層堆積状況 (東から)
3　SF01 北側側溝 c-d 間埋土断面 (東から)
4　SF01 北側側溝 e-f 間埋土断面 (東から)
図版 18　外屋敷遺跡の遺構⑬ (第 3 次調査)
1　SF01 北側側溝完掘後 (東から)
2　SF01 と遠方に下黒田遺跡 (西から)
3　SF01 北側側溝が途切れる間の陸橋状部分 (南西から)
図版 19　外屋敷遺跡の遺構⑭ (第 3 次調査)
1　SF02 完掘後 (北から)
2　SA01 完掘後 (北から)
3　SK01 断面 (南から)
4　SK02 断面 (南から)
5　SK03 断面 (西から)
図版 20　外屋敷遺跡の遺構⑮ (第 3 次調査)
1　SK04 断面 (西から)
2　SK05 完掘後 (南から)
3　SK05 遺物出土状況 (第 54 図 -1)
4　地山面直上出土の蛤刃石斧 (第 63 図 -1)
5　SK06 完掘後 (北西から)
6　SK06 遺物出土状況 (第 56 図 -1)
7　SK08 完掘後 (南東から)
8　SK08 遺物出土状況 (第 58 図 -1)
図版 21　外屋敷遺跡の遺構⑯ (第 3 次調査)
1　SX01 完掘後 (北西から)
2　調査区南東角周辺の柱穴群 (北東から)
3　調査区西側南半周辺の柱穴群 (北西から)
4　東淵寺古墳近景 (西から)
5　第 3 次調査参加者
図版 22　出土遺物①
図版 23　出土遺物②
図版 24　出土遺物③

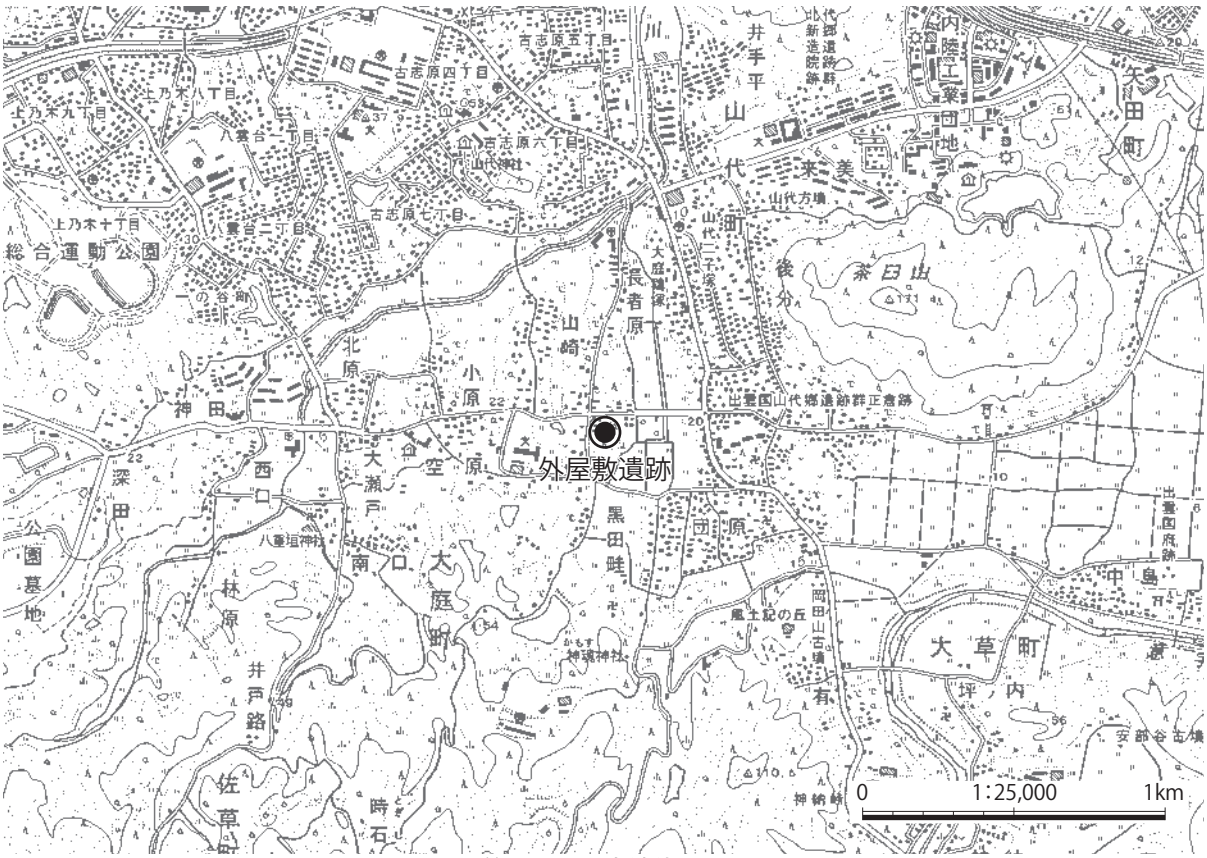
第 1 章　調査に至る経緯

平成 27 年 5 月 29 日、有限会社キムラプランから、大庭センターハイツ宅地造成工事予定地における埋蔵文化財の確認依頼書が提出された。東淵寺古墳 (古墳時代後期の古墳であり、墳形は前方後円墳の可能性が高いとされている) の西側に接した当地は、緩斜面であることから原始古代の住居跡の存在が想定された。

また、明治 8 年の旧大庭村切図 (第 68 図) によると、小字名は「外屋敷」及び「東淵寺」であり、周辺には「蔵本」「釜屋」「平吉屋敷」「蔵屋敷」「椿屋敷」「東淵寺堂敷」「東淵寺墓」といった土地が所在することから、中世～近世の寺跡や屋敷跡の存在も予想された。更に、古代山陰道 (正西道) の推定地（複数ある中のひとつ）としても知られる場所である。

依頼を受けた松江市埋蔵文化財調査室では、まず遺跡の有無確認調査 (以下、第 1 次調査) のためのトレンチ設定を平成 27 年 6 月 11 日に行った。トレンチは、開発予定地北側平坦部に 1 本 (T1)、南側平坦部に 1 本 (T5)、古代山陰道推定地の赤道に沿う格好で 2 本 (T2・3)、東淵寺古墳の周溝を確認するため、開発予定地の東端に 1 本 (T4) の合計 5 本である。

第 1 次調査は平成 27 年 6 月 24 日～ 7 月 2 日の間に実施した。必要な場合は随時調査区の拡張を行い、最終的な調査面積 99㎡である。いずれのトレンチからも遺構や遺物を検出したことから、当地の小字名をとって「外屋敷遺跡」とし、開発予定地全域に遺跡が存在するものとして文化財保護法上の手続きを行った。この第 1 次調査では、東淵寺古墳の周溝は開発予定地内には及んでいないことが



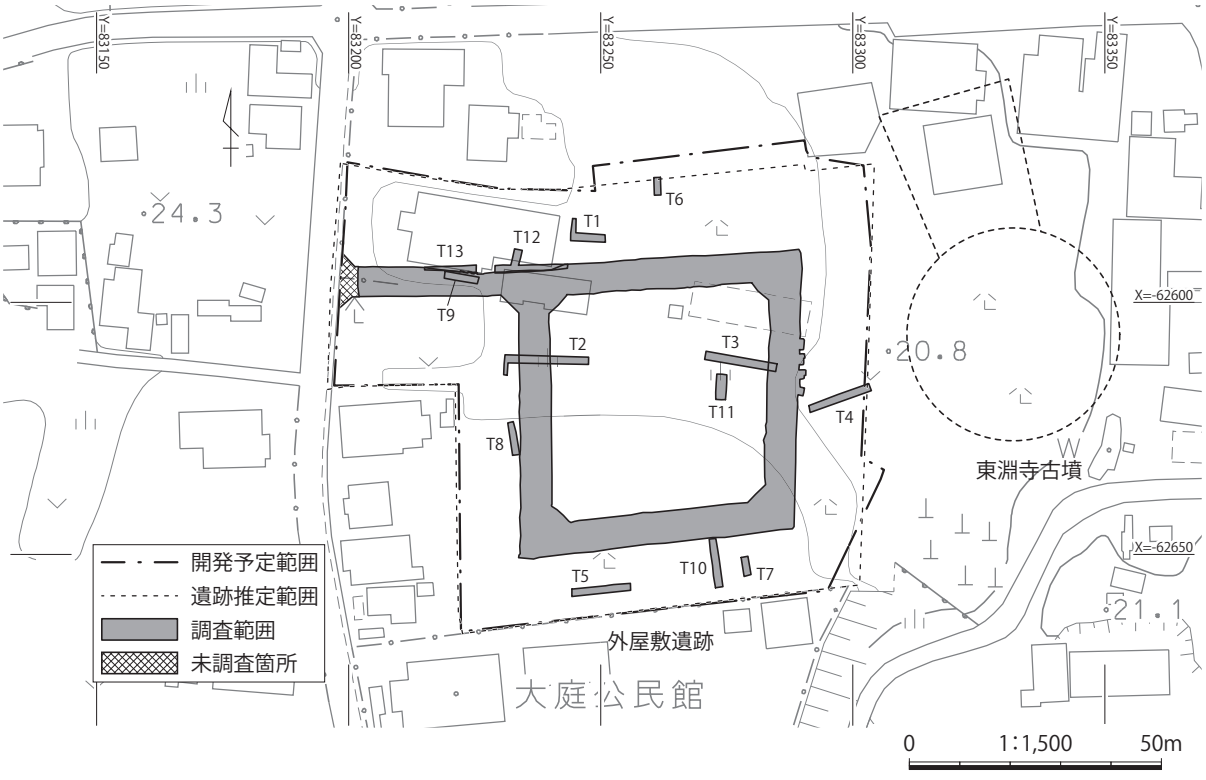
第 1 図　調査地位置図

分かったが、T2・3 では箱堀状に掘り込まれた区画溝 SD01 を検出している。今後の遺跡の取り扱いを考える上で、さらに詳細な調査が必要との結論に達し、追加で遺跡の内容確認調査 (以下、第 2 次調査) を実施することとなった。

第 2 次調査は 4 本のトレンチ (T6 ～ 9) を設定し、平成 27 年 9 月 18 日～ 9 月 24 日の間で実施した。調査面積は 30㎡である。特に、保存（計画変更）を依頼すべき遺構は検出されなかったため、当初計画通り造成が行われることとなり、開発予定地のうち公衆用道路予定地を調査範囲として本発掘調査 (以下、第 3 次調査) を実施することとした。

第 3 次調査の結果については第 4 章に譲るが、この調査では第 1 次調査で検出した区画溝 SD01 の続き、連続土坑状に掘り込まれた側溝をもつ道路遺構 SF01、方形プランのピットを確認した。第 3 次調査は道路部分のみを調査の対象としており、こうした遺構の性格を十分に確認することができず、これら 3 つの遺構の性格を検証するため 3 本のトレンチ (T10 ～ 12) を設定し、平成 28 年 5 月 16 日～ 5 月 19 日の間で国庫補助事業により遺構の性格確認のための学術調査 (以下、第 4 次調査) を実施した。この第 4 次調査で検出した遺構は完掘を行わず、主要なものについてはサブトレンチで必要最小限の掘削に留め、調査後は地下保存とした。

なお、この第 4 次調査では、第 3 次調査で実施予定だったものの、既存の民家があり調査ができなかった場所も T13 として調査を実施している。この調査区については公衆用道路が敷設されるため、遺構の完掘までを行った。T13 を合わせた第 4 次調査の調査面積は 58㎡である。



第 2 図　開発範囲と調査区位置図

第 2 章　位置と環境

第 1 節　地理的環境

外屋敷遺跡は、島根県松江市の市街地南郊の大庭町地内に所在する。本遺跡は、意宇平野の北西端にあたり、『出雲国風土記』に「神名樋野」と記載されている茶臼山 (標高 171.5m) から西方に約 1.0㎞離れた地点に位置する。遺跡の立地は、茶臼山の西に広がる標高 20 ～ 25m の乃木段丘 (島根県 1974) と呼ばれるなだらかな河成段丘地帯の一角にあたる。当地帯は細かく見ると、馬橋川やその支流の小河川によって開析された多くの小規模な開析谷とその間に残された段丘部から構成されている。外屋敷遺跡は開析谷に挟まれた南北に延びる低位段丘の東側に立地している。

なお、当地域は松江地区を代表する大型古墳が集中しており、本遺跡から北東へ約 850m の地点には出雲地域最大規模の前方後方墳である山代二子塚古墳をはじめ、山代方墳や大庭鶏塚古墳が分布する。また、本遺跡の東側には東淵寺古墳 (全長約 62 ～ 70m前後) が隣接している。

古代では、本遺跡から東へ約 400m の丘陵上に山代郷正倉跡が所在しており、その南側は下黒田遺跡、黒田畦遺跡、黒田館跡などの官衙関連遺跡が集中する場所となっている。寺院は山代郷北新造院 (来美廃寺) や山代郷南新造院 (四王寺跡) がある。本遺跡から南東へ約 1.7㎞の意宇川の下流域に発達する小規模な沖積平野である意宇平野には出雲国府、その北東に出雲国分寺などが所在し、古代出雲の一大拠点であったことがうかがえる。本遺跡の中央部分には東西方向の赤道が存在しているが、これは古代山陰道の候補のひとつに推定されている (勝部 1993)。

第 2 節　歴史的環境（第 3 図）

ここでは外屋敷遺跡を中心とした意宇平野周辺の遺跡について、時代ごとに概要を述べる。

旧石器時代　本遺跡周辺で旧石器時代の良好な遺跡は知られていないが、下黒田遺跡 (2) で玉髄製石核と剥片、市場遺跡 (3) で黒曜石製細石核、山代郷北新造院跡 (来美廃寺)(4) で玉髄製ナイフ形石器の出土が確認されている。

縄文時代　縄文時代の遺跡は少なく、土器や石器がわずかに確認されているのみである。意宇平野の才塚遺跡 (5) では、石斧や縄文時代後期の磨消縄文土器が出土している。また、本遺跡から北東へ約 2.1㎞離れた大橋川に注ぐ馬橋川中流域では、縄文時代後期～晩期の土器が比較的多く出土した石台遺跡 (6) が所在する。

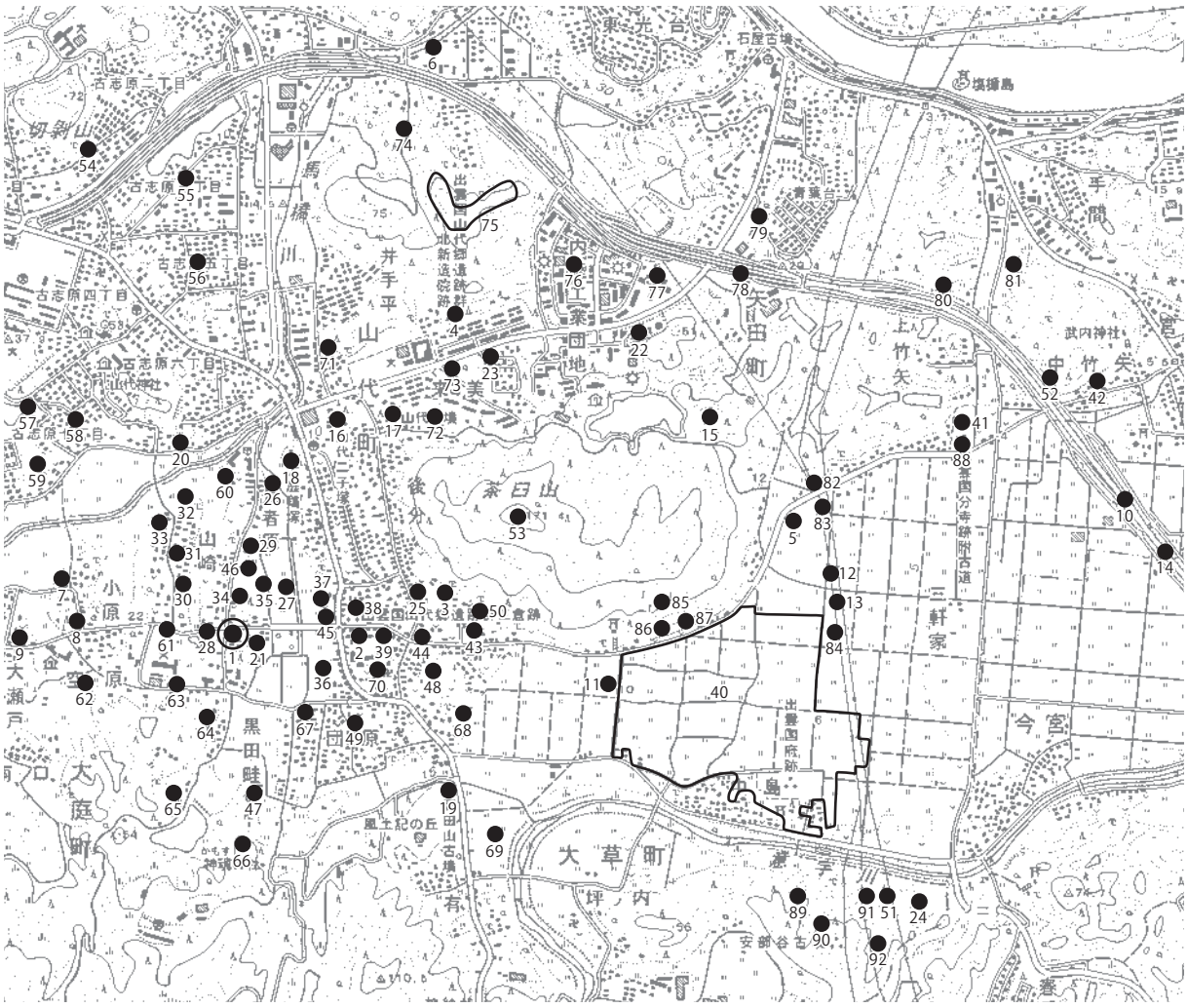
弥生時代　本遺跡周辺の弥生時代の遺跡は近年の発掘調査で数箇所見つかっており、弥生時代中期の溝状遺構や貯蔵穴を確認した大庭小原遺跡 (7)、柱穴を確認した砂口遺跡 (8)、弥生時代後期の竪穴建物を確認した大庭北原遺跡 (9) が所在する。意宇平野には、弥生時代前期～中期の溝状遺構や土坑を確認した布田遺跡 (10)、弥生時代中期末から後期初頭の竪穴建物を確認した大坪遺跡 (11)、弥生時代後期の水田を確認した上小紋遺跡 (12)、向小紋遺跡 (13)、夫敷遺跡 (14) が所在している。

古墳時代　古墳時代には、古墳時代前期の廻田古墳群 (15) をはじめ、古墳時代中期～後期には本遺跡周辺に大型古墳が築造される。古墳時代後期の首長墓と想定される山代二子塚古墳 (16) や山代方墳

(17)、造り出し付方墳である大庭鶏塚古墳 (18)、「額田部臣」の銘文が刻まれた円頭大刀が出土した岡田山１号墳 (19)、石棺式石室である向山１号墳 (20) などがあり、本遺跡の東に隣接する地点には前方後円墳の東淵寺古墳 (21) が所在する。

横穴墓では、意宇平野周辺部の丘陵斜面に十王免横穴墓群 (22)、狐谷横穴群 (23)、安部谷横穴群 (24) など石棺式石室の形態を模倣した大規模な横穴群が点在している。

集落遺跡では、土師器を伴う竪穴建物を確認した山代沖田遺跡 (25) がある。本遺跡から北東へ約500m の大庭鶏塚古墳の南に広がる谷底平野の水田地帯には溝状遺構を確認した茶臼遺跡 (26) や柳堀遺跡 (27) が所在する。水田地帯西側の丘陵には須恵器が出土する散布地の B3 遺跡 (28)、B8 遺跡 (29)、B9 遺跡 (30)、B10 遺跡 (31)、B11 遺跡 (32)、B12 遺跡 (33)、B18 遺跡 (34)、B21 遺跡 (35) が点在する。



1. 外屋敷遺跡
2. 下黒田遺跡
3. 市場遺跡
4. 山代郷北新造院跡
5. 才塚遺跡
6. 石台遺跡
7. 大庭小原遺跡
8. 砂口遺跡
9. 大庭北原遺跡
10. 布田遺跡
11. 大坪遺跡
12. 上小紋遺跡
13. 向小紋遺跡
14. 夫敷遺跡
15. 廻田古墳群
16. 山代二子塚古墳
17. 山代方墳
18. 大庭鶏塚古墳
19. 岡田山１号墳
20. 向山１号墳
21. 東淵寺古墳
22. 十王免横穴墓群
23. 狐谷横穴群
24. 安部谷横穴群
25. 山代沖田遺跡
26. 茶臼遺跡
27. 柳堀遺跡
28. Ｂ３遺跡
29. Ｂ８遺跡
30. Ｂ９遺跡
31. Ｂ１０遺跡
32. Ｂ１１遺跡
33. Ｂ１２遺跡
34. Ｂ１８遺跡
35. Ｂ２１遺跡
36. 川原宮Ⅱ遺跡
37. 大庭原ノ前遺跡
38. 山代郷正倉跡
39. 黒田館跡
40. 出雲国府跡
41. 出雲国分寺跡
42. 出雲国分尼寺跡
43. 山代郷南新造院跡
44. 小無田Ⅱ遺跡
45. 山代郷正倉跡（平成４年度調査区）
46. Ｂ２８遺跡
47. 出雲国造館跡
48. 小無田遺跡
49. 黒田畦遺跡
50. 内堀五塔群
51. 天満谷遺跡
52. 中竹矢遺跡
53. 茶臼山城跡
54. 古志原遺跡
55. 練兵場Ⅱ遺跡
56. 練兵場Ⅰ遺跡
57. 香ノ木池遺跡
58. 向山西古墳
59. 向山西遺跡
60. 下ノ原遺跡
61. 大庭小学校校庭遺跡
62. 空原遺跡
63. 大庭廻田遺跡
64. 秋上家古墓群
65. 大石横穴群
66. 大石古墳群
67. 神魂神社参道遺跡
68. 団原古墳
69. 岩屋後古墳
70. 団原遺跡
71. 井出平山古墳群
72. 永久宅後古墳
73. 狐谷遺跡
74. 上谷遺跡
75. 南外古墳群
76. 来美墳墓
77. 寺山小田遺跡
78. 平所遺跡
79. 間内越墳墓群
80. 才ノ峠遺跡
81. 長峰遺跡
82. 間内遺跡
83. 大平遺跡
84. 四配田遺跡
85. 大谷遺跡
86. 真奈内遺跡
87. 聖岩遺跡
88. 出雲国分寺跡附古道
89. 西百塚山古墳群
90. 東百塚山古墳群
91. 古天神古墳
92. 大草岩船古墳

第３図　周辺の遺跡分布図 (1:25,000)

古代（奈良・平安時代）　本遺跡周辺では、約 300 基に及ぶ粘土採掘坑を確認した川原宮Ⅱ遺跡 (36)、加工段内の平坦面で掘立柱建物を確認した大庭原ノ前遺跡 (37) が所在する。本遺跡から東へ約 400m の丘陵上には、規格的に配置された総柱建物群と多量の炭化米が見つかった山代郷正倉跡 (38) があり、その南には大溝と大型掘立柱建物を確認した下黒田遺跡、黒田館跡 (39) などの官衙関連遺跡が所在する。また、意宇平野とその周辺には出雲国府 (40) をはじめとした政治上重要な施設が配置されている。意宇平野の北には出雲国分寺 (41) や国分尼寺 (42) が建立され、この一帯は古代出雲の政治と文化の中心地として栄えていたことが分かる。その他、茶臼山を挟んだ北と南にはそれぞれ山代郷北新造院 (来美廃寺) と山代郷南新造院 (四王寺跡)(43) が所在する。なお、山代郷南新造院に瓦を供給していた瓦窯が小無田Ⅱ遺跡 (44) で 3 基確認されている。

中世以降　本遺跡周辺の中世以降の遺跡として、山代郷正倉跡 (平成 4 年度調査区)(45)、大庭原ノ前遺跡、黒田館跡、下黒田遺跡、B28 遺跡 (46)、出雲国造館 (47) が所在する。山代郷正倉跡 (平成 4 年度調査区) では 13 ～ 14 世紀の建物跡が推定されている。大庭原ノ前遺跡では 15 世紀前半～中頃、もしくは 16 世紀中頃～ 17 世紀前半の掘立柱建物が確認されている。黒田館跡では掘立柱建物や溝を確認し、白磁や青磁のほか朝鮮陶器の紛青沙器が出土している。下黒田遺跡では 15 世紀後半の備前焼の壺を半壊して、その中に籾殻・土師器皿・人毛・和鏡・銭貨を埋納した地鎮に係わる土坑が見つかっている。B28 遺跡では土塁や空堀が確認され、これらを伴う館跡と推定されている。出雲国造館では南宋から輸入された白磁や青磁片が大量に出土していることから、付近に強大な実権をもつ豪族の居館があったことが推定され、出雲国造とその館に関わるものとしている。

その他、14 ～ 15 世紀の中国青磁や 16 ～ 17 世紀の国産陶磁器が出土した小無田遺跡 (48)、中世前半以降の総柱建物を確認した山代沖田遺跡、16 世紀の木棺墓から約 100 枚の古銭が出土した黒田畦遺跡 (49)、中世後半～近世初頭の掘立柱建物を確認した市場遺跡、総数 162 点におよぶ五輪塔と宝篋印塔が集積された内堀石塔群 (50) が点在する。

意宇平野の周縁部には、意宇川南岸の谷部を埋めて造られた掘立柱建物を確認し、越州窯系・同安窯系・龍泉窯系の青磁などの貿易陶磁器や常滑系・瀬戸系の国産陶磁器、東播系・亀山系の中世須恵器が大量に出土した天満谷遺跡 (51)、白磁など中世以降の遺物が出土した中竹矢遺跡 (52) が所在している。

中世の山城として、茶臼山城跡 (53) がある。茶臼山の最高所に主郭を持ち、内部に大きく 5 つに分けられる曲輪が存在し、東西に大きな堀切を設けている。東に中海、西に宍道湖、南に意宇平野、北に大橋川が見渡せる立地から、軍事的重要性が高い山城である。

参考文献

勝部　昭　1933 年　「正西道の検討」『出雲古代史研究 3』　出雲古代史研究会
島根県　1974 年　『土地分類基本調査松江』
島根県教育委員会　1981 年　『史跡出雲国山代郷正倉跡』
島根県教育委員会　2013 年　『史跡出雲国府跡－ 9 総括編－』
島根県教育委員会　2016 年　『柳堀遺跡・茶臼遺跡・川原宮Ⅱ遺跡』
松江市教育委員会　1988 年　『下黒田遺跡発掘調査報告書』
松江市教育委員会・公益財団法人松江市スポーツ振興財団　2014 年　『柳堀遺跡・大庭原ノ前遺跡』

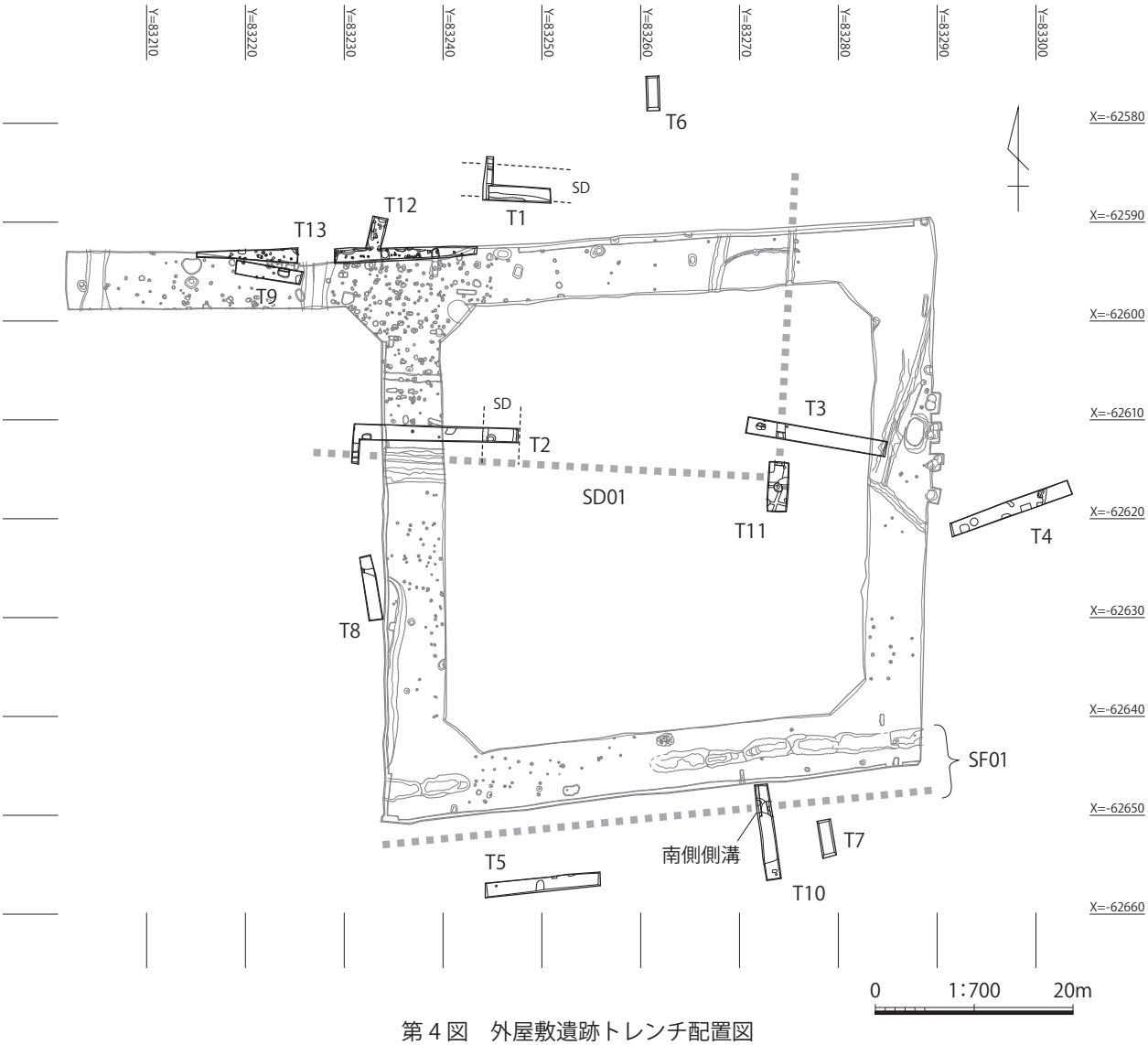
第３章　トレンチ調査の概要

第 1 節　調査の手法（第 1 次・2 次・4 次調査）

宅地造成に先立って、遺跡の有無を確認するために松江市埋蔵文化財調査室においてトレンチ調査を実施した。トレンチ調査の実施日及び経過については第 1 章を参照されたい。トレンチ調査は 3 次に亘り、平成 27 年度に第 1・2 次調査、第 3 次調査 (本発掘調査) 終了後の平成 28 年度に第 4 次調査を実施し、開発予定地内に合計 13 箇所のトレンチを設定して調査を行った (第 4 図)。

第 1 次調査 (遺跡の有無確認調査) では、開発予定地内に 5 本のトレンチ (T1 ～ T5) を設定して調査を実施した。調査の結果、事業予定地内に遺跡が存在していることを確認した。また、この調査では方形ピットが検出されており、本遺跡の立地から官衙関連の遺構が検出される可能性が想定された。

第 1 次調査終了後、遺跡の取り扱いを考える上でさらに詳細な調査が必要との結論に達し、遺跡の内容確認調査が計画された。第 2 次調査 (内容確認調査) では、開発予定地内に 4 本のトレンチ (T6 ～ T9) を設定して調査を実施した。調査の結果、この時点で保存対象となる遺構は検出されなかった。



第 4 図　外屋敷遺跡トレンチ配置図

第 3 次調査 (本発掘調査) では、宅地造成地の道路予定地を対象とした。ここから古代の区画溝 SD01 及び道路遺構 SF01 とこれに伴う北側側溝が見つかっているが、部分的な調査であったため発掘調査終了後にこれらの遺構の連続性や位置関係を明らかにするという目的で学術調査が計画された。

第 4 次調査 (学術調査) では、開発予定地内に 3 本のトレンチ (T10 ～ T12) を設定して調査を実施した。T10 は、第 3 次調査で SF01 の北側側溝を検出しており、これの対となる南側側溝の有無を確認するために設定したトレンチである。調査の結果、北側側溝から南へ 6m 離れた位置で南側側溝を検出し、SF01 に伴う一連の道路側溝と判断した。T11 は、第 1 次調査の東西溝及び第 3 次調査の南北溝が箱堀状の掘方をもち、埋土が似ているため同一の遺構である可能性もあることから、その延長線上で溝の連結部分 (角部) を確認するために設定したトレンチである。調査の結果、想定どおり直角に曲がる溝の角部を検出し、第 1 次調査の東西溝及び第 3 次調査の南北溝は同一の遺構であることが確認できた。このため、この溝を SD01 として名称を統一した。T12 は、第 3 次調査で調査区境の北壁際から方形プランの柱穴 1 基を検出しており、さらに北側の調査区外にこれと対応する方形プランの柱穴が存在するのかどうかを確認するために設定したトレンチである。トレンチ南端は畦を取り払い、T13 と連結させて調査を行ったが、方形プランの柱穴は確認できなかった。なお、小ピットは多数検出しているが半截は実施せず、そのまま埋め戻しを行って地下保存とした。

T13 は、第 3 次調査で住宅が建っていたため本調査が実施できなかった場所で、建物解体後に追加調査を行ったトレンチである。狭小な調査区であり、土坑や柱穴を検出したが、第 3 次調査で検出した掘立柱建物跡 SB03・04・07 に伴う柱穴は確認していない。

各トレンチ調査の概要は表 1 に示したが、本節では第 3 次調査の成果を検証する上で必要な T2・T3・T10・T11 について詳述する。

表 1　外屋敷遺跡トレンチ調査一覧

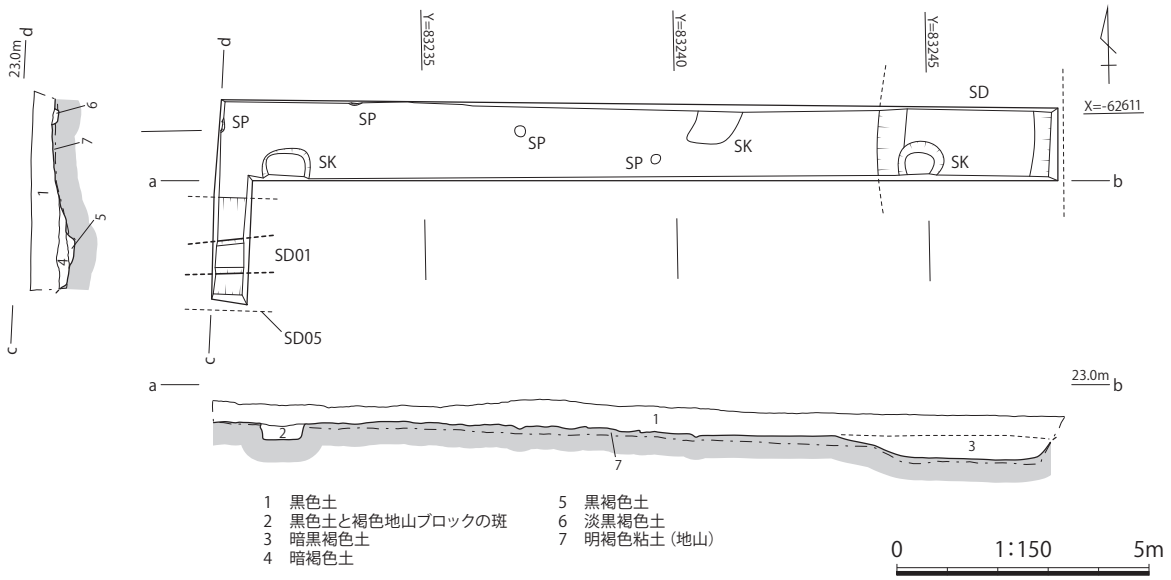
調査次数	トレンチ	設定箇所 (グリッド)	トレンチ設定方向	設定範囲 (長軸×短軸)	調査面積	掘削深度	検出遺構	出土遺物
第 1 次	T1	F2	東西	7 .0m× 1.6m	12.99㎡	82~100㎝	東西溝 1	土師器
	T2	E5~F5	東西	16.7m× 1.6m	27.12㎡	35~50㎝	東西溝 1、南北溝 1、土坑 3、柱穴 4	土師器
	T3	I5~J5	東西	14.2m× 1.6m	22.72㎡	27~37㎝	南北溝 1、土坑 2、柱穴 2	—
	T4	K5~L5	東西	13.0m× 1.4m	18.20㎡	25~35㎝	南北加工段 1、土坑 3	円筒埴輪
	T5	F9~G9	東西	11.8m× 1.4m	16.52㎡	36~50㎝	土坑 3	—
第 2 次	T6	H1	南北	3.0m× 1.5m	4.50㎡	112㎝	—	陶磁器
	T7	I9	南北	3.8m× 1.5m	5.70㎡	63㎝	—	—
	T8	E6	南北	6.6m× 1.4m	9.24㎡	73㎝	東西溝 1	—
	T9	D3	東西	6.8m× 1.4m	9.52㎡	27~30㎝	土坑 2、柱穴 6	陶磁器
第 4 次	T10	I8~I9	南北	9.8m× 1.5m	14.70㎡	40~50㎝	東西溝 1、土坑 2	—
	T11	I5	南北	5.0m× 2.0m	10.00㎡	40㎝	溝 2、土坑 2、柱穴 3	—
	T12	E3	南北	3.0m× 1.5m	4.50㎡	75~82㎝	土坑 5、柱穴 8	—
	T13	C3~F3	東西	24.8m× 1.3m	32.24㎡	20~68㎝	土坑 8、柱穴 27	土師器

(1) T2 トレンチ

トレンチの概要（第５図）　第１次調査において調査区西側、E5 ～ F5 グリッドに長さ 16.70m、幅 1.60mの規模で東西方向に設定したトレンチである。トレンチの西側に長さ 2.80m、幅 0.50mの規模で南北方向のサブトレンチを追加した。調査の結果、現地表面から約 0.35 ～ 0.50mの深さで明褐色の地山を検出した。遺構は、この地山に掘り込まれた東西溝 SD01 を 1 条、南北溝を 1 条、土坑を 3 基、柱穴を 4 基確認した。

サブトレンチで確認した SD01 は、標高 21.60mで検出した東西溝で、溝幅は 0.64m、深さ 0.18mを測る。断面形は逆台形状に掘り込まれている。SD01 の直上には浅い窪み状の溝があり、逆台形の溝からやや幅広の浅い窪み状の溝に移り変わる。浅い窪み状の溝は、SD01 よりも後世に掘削された溝と考えられ、SD05 とした。SD01 埋土は黒褐色土 (第 5 層) が堆積するが、溝の掘り込み面は後世の溝の掘削によって消失している状況である。

SD01 の検出位置は、第 3 次調査の E5 グリッドで検出した SD01 から西側へ 3m離れた地点に位置し、溝底部で確認した逆台形の溝は SD01 の西側延長線上に繋がる一連の溝となる。

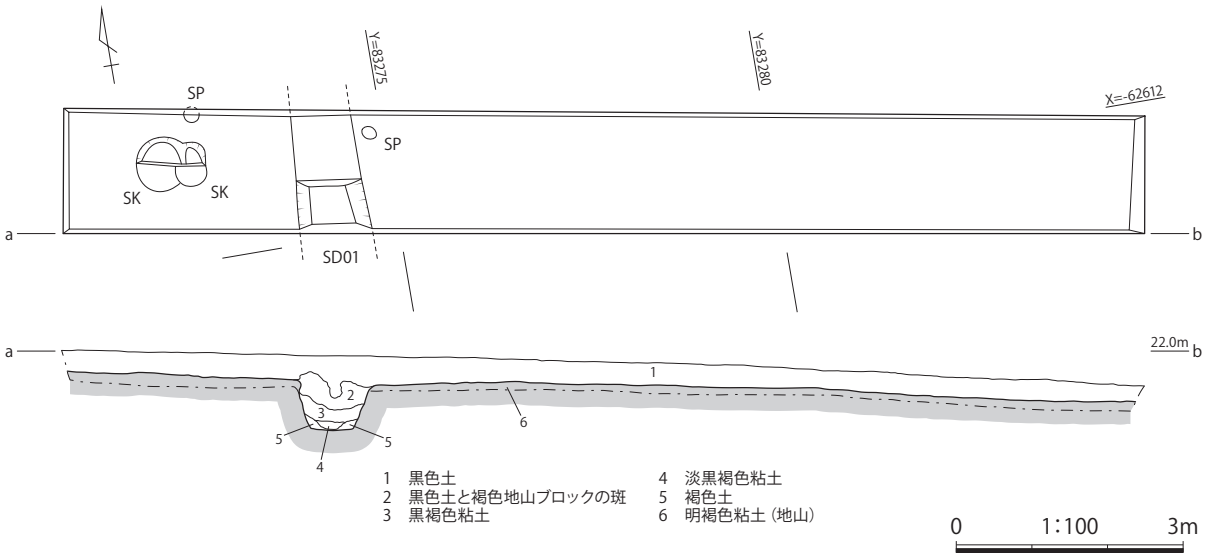


第 5 図　T2 平面図・断面図

(2) T3 トレンチ

トレンチの概要（第 6 図）　第 1 次調査において調査区東側、I5 ～ J5 グリッドに長さ 14.20m、幅 1.60mの規模で東西方向に設定したトレンチである。調査の結果、現地表面から約 0.27 ～ 0.37mの深さで明褐色の地山を検出した。遺構は、この地山に掘り込まれた南北溝 SD01 を 1 条、土坑を 2 基、柱穴を 2 基確認した。

SD01 は標高 21.80mで検出した南北溝で、溝幅は上端 0.90m、下端 0.42m、深さ 0.66mを測る。断面形は逆台形で、埋土は上層から黒褐色土と地山ブロックの斑 (第 2 層)、黒褐色粘土 (第 3･4 層)、褐色土 (第 5 層) が堆積する。SD01 の検出位置は、第 3 次調査の I3 グリッドで検出した SD01 から南側へ 15m離れた地点に位置し、SD01 の南側延長線上に繋がる一連の溝となる。

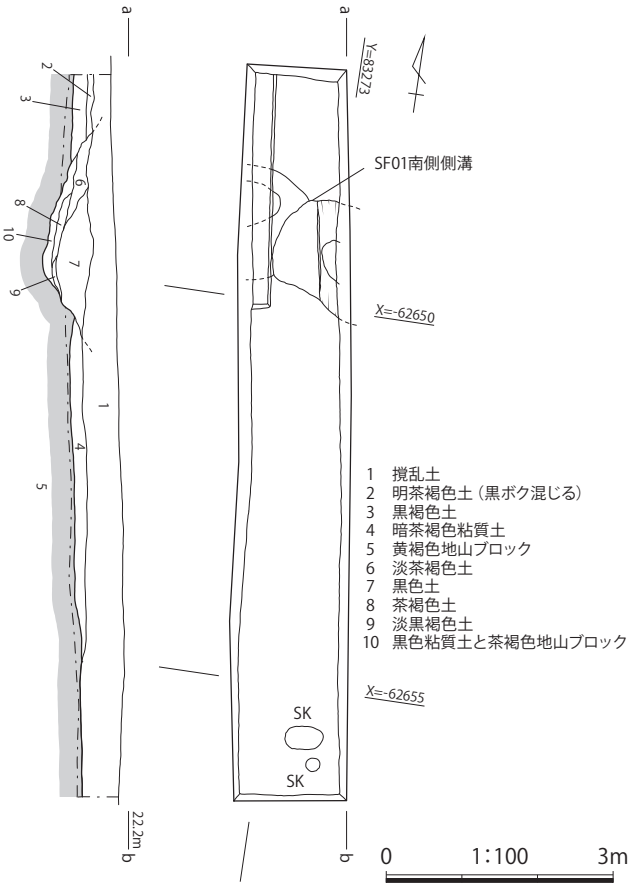


第 6 図　T3 平面図・断面図

(3) T10 トレンチ

トレンチの概要（第 7 図）　第 4 次調査において調査区南側、I8 ～ I9 グリッドに長さ 9.80 m、幅 1.50mの規模で南北方向に設定したトレンチである。調査の結果、現地表面から約 0.40 ～ 0.50mの深さで黄褐色の地山を検出した。遺構は、この地山に掘り込まれた東西溝 (SF01 南側側溝) を 1 条、土坑を 2 基確認した。

SF01 南側側溝は標高 21.70ｍで検出した連続土坑状の溝で、溝幅は上端 2.50m、下端 0.54m、深さ 0.65mを測る。断面形は U 字形で、埋土は上層から淡褐色土～黒色土 (第 6・7 層)、茶褐色土と黄色～橙色粘土ブロックの斑 (第 8 層)、淡黒褐色土 (第 9 層)、黒色粘質土と黄褐色地山ブロックの混和土 (第 10 層) が堆積する。SF01 南側側溝の検出位置は、第 3 次調査の E8 ～ J8 グリッドで検出した SF01 北側側溝から南へ 6m離れた地点で、この遺構を検出したことにより SF01 は両側に側溝を備えていることが明らかとなった。



第 7 図　T10 平面図・断面図

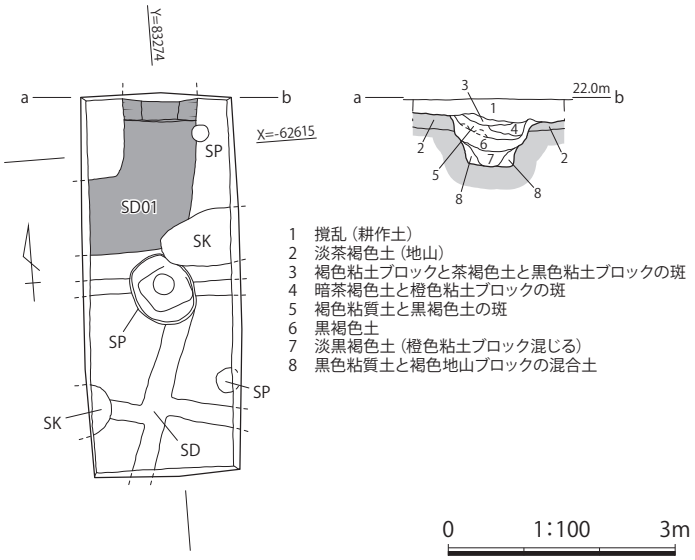
(4) T11 トレンチ

トレンチの概要（第 8 図）　第 4 次調査において調査区東側、I5 グリッドに長さ 5.00m、幅 2.00m の規模で南北方向に設定したトレンチである。調査の結果、現地表面から約 0.30mの深さで淡茶褐

色の地山を検出した。遺構は、この地山に掘り込まれた逆Ｌ字状の溝 SD01 を１条、十字状の溝を１条、土坑を２基、柱穴を３基確認した。確認調査であったためこれらの遺構は原則として完掘せず、SD01 の一部を掘り下げて断面確認を実施するに留めた。

SD01 は標高 21.72ｍで検出した逆Ｌ字状の溝で、溝幅は上端 1.00ｍ、下端 0.50ｍ、深さ 0.62ｍを測る。断面形は逆台形で、埋土は上層から茶褐色土と褐色～黒色粘土ブロックの斑 (第３層)、暗茶褐色土と橙色粘土ブロックの斑 (第４層)、褐色粘質土と黒褐色土の斑 (第５層)、黒褐色土 (第６層)、淡黒褐色土 (第７層)、黒色粘質土と褐色地山ブロックの混和土 (第８層) が堆積する。

T11 で検出した SD01 の位置は、南北溝として第３次調査で検出した SD01 及び T3 で検出した SD01 の南側延長線上、そして、東西溝として T2 で検出した SD01 及び第３次調査で検出した SD01 の東側延長線上に位置し、南北溝と東西溝が直角に連結する地点にあたる (第４図)。これらの５箇所で検出した SD01 は、いずれも掘方の形状が箱堀状を呈する同一のものであり、一連の溝となる。

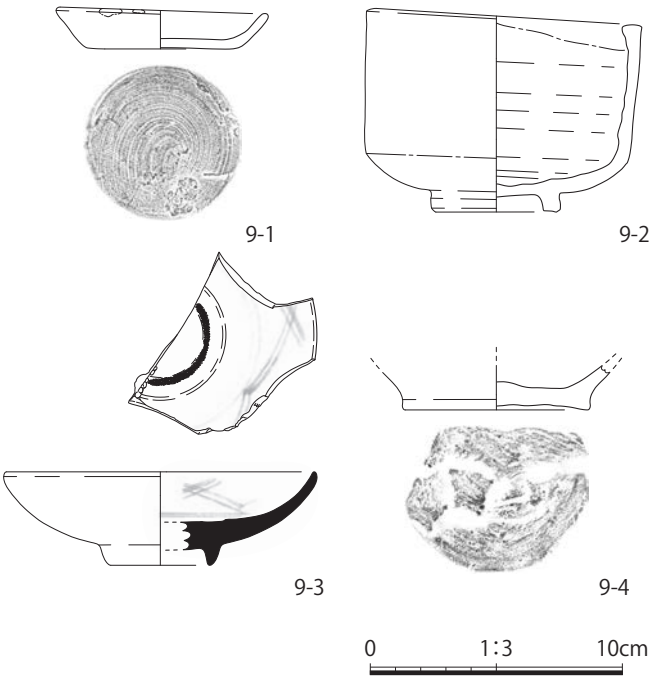


第８図　T11 平面図・断面図

トレンチ調査出土遺物（第９図）

トレンチ調査では土師器・陶磁器が出土したが、いずれも細片である。各トレンチの出土遺物は表１に示し、ここではその中で実測可能な遺物に限定して報告する。

9-1 ～ 3 は T1 トレンチ、9-4 は T2 トレンチから出土した。9-1 は近世土師器皿である。ロクロ成形の在地系土師器皿で、底部に糸切り痕をもつ。9-2 は布志名焼の火入である。9-3 は肥前磁器 (波佐見) の皿である。内面に二重斜格子文が描かれ、見込は蛇ノ目釉剥ぎである。18 世紀代前半～中頃のものである。9-4 は中世土師器皿である。底部に糸切り痕をもつ。



第９図　トレンチ調査出土遺物

第 4 章　本調査の成果

第 1 節　本調査の範囲と手法 (第 3 次調査)

調査区の設定（第 10 図）

調査範囲は、開発総面積 7,815㎡のうち道路設置部分の 1,431㎡が発掘調査対象範囲である。開発予定地内の中央に東西方向の赤道とその南側に竹林が広がっており、赤道の迂回路設置及び竹や立木等の伐採･抜根･搬出作業と同時進行で第 3 次調査を実施した。そのため、表土掘削は諸作業が終わった掘削可能な部分から行い、調査区を 5 箇所に分割して調査を進めた。

調査区には、世界測地系平面直角座標系第Ⅲ系に基づいた 10m四方のグリッドを設定し、遺構の位置関係の把握及び遺物の取り上げ等に用いた。グリッドは北西角 (Ｘ＝－ 62570 とＹ＝ 83190 の交点) を基点とし、横軸はＸ座標軸、縦軸はＹ座標軸に平行とした。列番号は基点から東に向けてアルファベット順、行番号は南に向けてアラビア数字順に付し、各区画は列・行の順にそれぞれの番号を繋ぎ呼称した。

第 10 図　調査区グリッド配置図 (1:800)

表土掘削と遺構検出

開発予定地の現況は、宅地、竹林、畑であり、表土の除去はバケットに平爪を装着したバックホーを用いて実施した。掘削は、事前のトレンチ調査 (第 1・2 次調査) の成果を基に黒色土層 (いわゆる大庭の黒ボク層) を重機で除去し、以下は手掘りに切り替えて黄褐色～明褐色の地山面上面まで掘り下げた。この地山面上面を遺構面とし、その検出標高は調査区西端で標高 23.24m、中央部で標高 22.03m、東端で標高 21.33mを測る。表土から地山までの層厚の平均値は西側で 0.30m、中央部で 0.60m、東側で 0.80mとなっており、掘削深度は西側が浅く、東側が深い。

遺構の検出は、鋤簾により精査した後、さらに草削りを用いて遺構検出に努めた。遺構の掘り下げは主に移植ゴテにより実施した。遺構内の調査は、大型土坑や溝等はベルトを設置し、柱穴は平面的に全体を検出し終えた後に段下げを行い、柱痕跡の有無や切り合うものについては先後関係を確認し、その後の段階で半截して土層断面図を作成した。

写真 1　バックホーによる表土除去

写真 2　遺構の掘削と精査

記録の作成

調査区及び遺構の平面測量はトータルステーションを用い、その測量図と遺構を照合しながら平面図をおこし、レベルを記入した。方位については、世界測地系に準拠した座標北を基準としている。また、遺物の取り上げについてもトータルステーションとレベルを併用している。土層図はレベルを用いて手測りにより縮尺 1/20・1/10 で作成し、土色の注記は新版標準土色帖を使用した。

遺構の写真は、デジタル一眼レフカメラ (Nikon D3300) を主に使用し、フィルムカメラによる 35㎜モノクロ、35㎜リバーサルを授用して撮影した。なお、原則として報告書に掲載が見込まれるものについては 6 × 7 判フィルムによる撮影を行った。また、全体写真については調査工程の都合上撮影不可能であったため、5 箇所に分割した各調査区における遺構面調査の終了ごとに写真撮影用足場を用いて、高所から全体写真撮影を実施した。

報告書作成作業

平成 28 年度に整理作業を行い、まず遺構の検討と遺物の復元及び実測作業を実施した。その後、遺構･遺物のトレース、遺物写真撮影を行った。なお、本書の編集にあたっては、DTP 方式を採用し、遺構・遺物のトレースは Adobe Illustrator CS6 及び CC2015 を使用して図版を作成した後、Adobe InDesign CC2015 を用いて割付作業と原稿執筆を行った。

第 2 節　調査の概要

外屋敷遺跡は松江市大庭町字外屋敷 800 番地外に所在する。ここでは、第 3 次調査とした本発掘調査の成果を報告する。

この調査では弥生時代中期から近世に至る遺構や遺物を確認した。検出した主な遺構は、弥生時代中期に属する土坑 SK01 ～ 05、古代 (8 世紀代) に属する溝 SD01・道路遺構 SF01・土坑 SK06、中世 (12 ～ 16 世紀代) に属する掘立柱建物跡 SB01 ～ 06・溝 SD02 ～ 05、近世 (17 ～ 19 世紀代) に属する掘立柱建物跡 SB07・溝 SD06・土坑 SK07 ～ 08・柵 SA01・里道 SF02 などである (第 12 図)。

なお、第 2 章で述べたように本遺跡は東淵寺古墳の隣接地であり、8 世紀頃に造られた古代山陰道 (以下、正西道) の推定地としても知られている。また、明治 8 年の切図の記載から東淵寺跡の存在が想定された。

調査の結果、東淵寺古墳に関わる遺構は検出されず、遺物は調査区東側の SF02 埋土から子持壺の小片 1 点が近世陶磁器と混在して出土するに留まった。正西道と考えられる遺構は今回の調査では確認していないが、調査区南側で検出した SF01 を正西道と東西方向に並走する道路遺構 (古代出雲の主要道路のひとつ) と評価している。

東淵寺跡については、具体的な建物配置は明らかとなっていないが、調査区東側で検出した SB05・06 を東淵寺に関わる施設と捉えている。以下、本章第 3 節で基本層序、第 4 節で遺構と遺物について詳細を報告する。

写真 3　調査区北西角 E3 ～ E4 グリッド周辺の柱穴群 (北西から)

第 3 節　基本層序

外屋敷遺跡は、標高 21.00 ～ 23.00m のなだらかな段丘上に立地する。現地表面は標高 22.10 ～ 23.60mで、西から東に向かって緩やかに傾斜している。地山面は、調査区西端で標高 23.24m、中央部で標高 22.03m、東端で標高 21.33mを測る。調査区の西側は地表下 0.30mの比較的浅い位置で地山に達し、現地表面と同様に東へ向けて徐々に深くなっている。

第 11 図に外屋敷遺跡の基本層序を掲載した。調査区中央部北壁の土層断面を標準とした基本的な地層の堆積は、上層から①灰色～黒色土 (表土)、②黒色～暗茶色土、③黄褐色シルト質粘土 (地山の漸移層)[(1)]、④褐色～黄褐色粘土 (地山) の 4 層からなる。

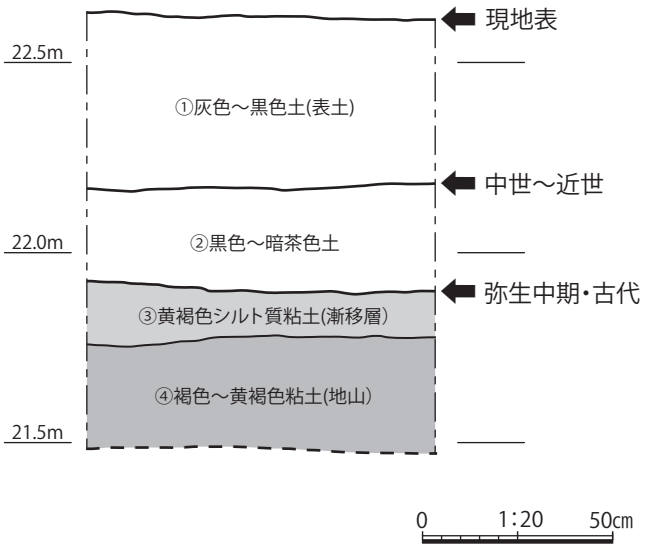
①層は近現代の盛土及び耕作土である。表土の重機掘削中に明治以降の陶磁器が出土している。

②層は中世～近世に属する土層で、調査区南側では黒ボク層の堆積を確認した。この黒ボク層は、調査区北側や東側では確認できず、土層堆積状況から調査区中央にあたる東西方向の赤道が黒ボク層の検出境界となる。なお、②層の上面から掘り込まれている遺構を検出しているが遺跡全体を通して削平されている状況であり、本来の遺構面は②層よりも上層から掘り込まれている可能性がある。

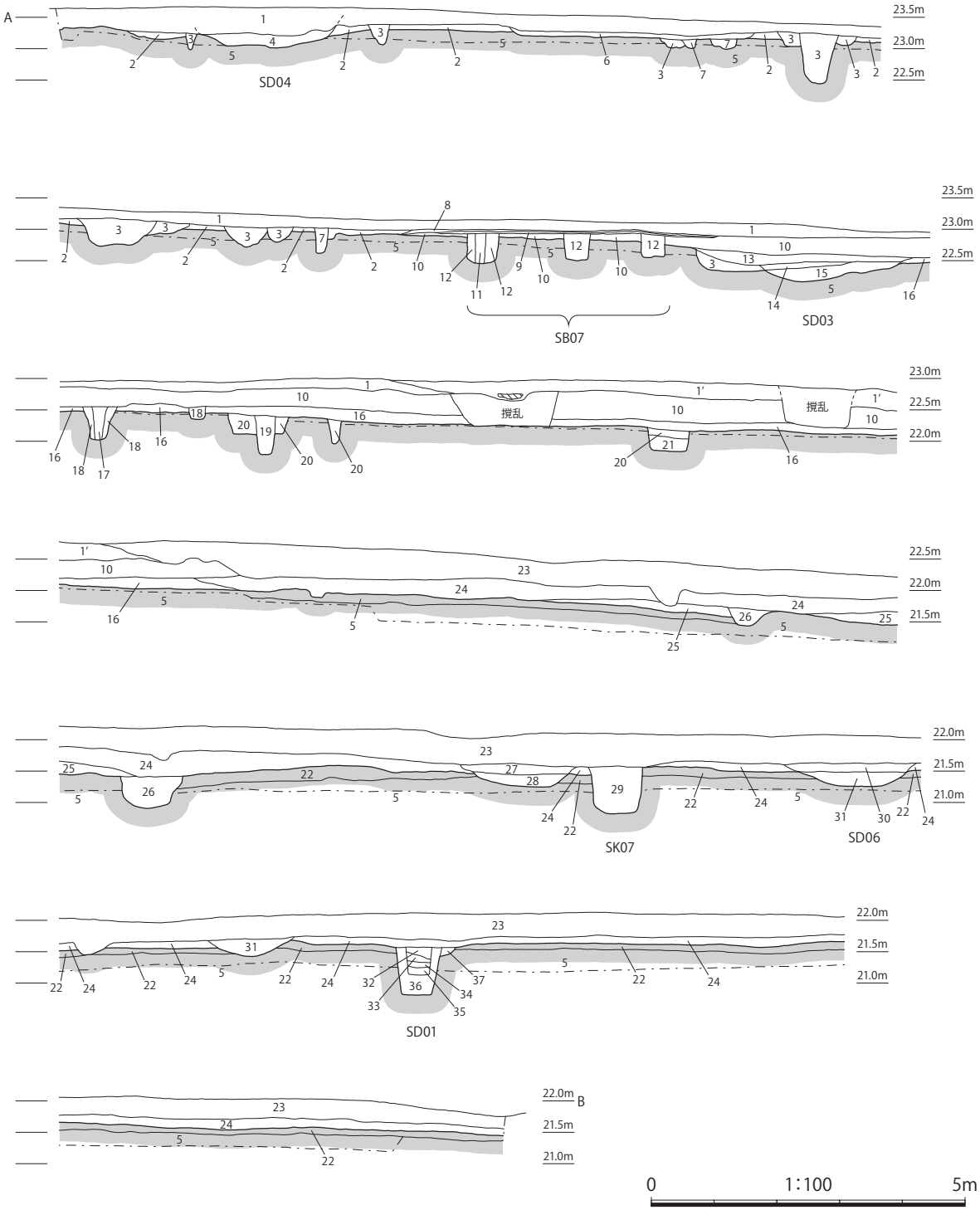
③層は地山の漸移層で、比較的よく締まった土層である。この土層の上面から後述する SK01 ～ 05 の弥生時代中期に属する遺構や SD01・SF01・SK06 などの古代 (8 世紀代) に属する遺構やが掘り込まれている。地山の漸移層は、調査区西側の B3 ～ D3 グリッド以外の遺跡全域で確認しているが、その土質が場所によって異なっている。調査区南東～南側では、暗茶色～淡褐色粘土や淡赤褐色粘質土の漸移層の堆積が見られる。

④層は地山で、固く締まった土層である。弥生時代中期の遺構はこの層の上面で検出したものもあるが、本来の遺構面は④層よりも上層に位置することが考えられ、上層から掘り込まれた遺構の底部を図示している可能性もある。以下、第 13 図に東西 87 m間 (第 12 図Ａ－Ｂ間) の北壁土層を、第 14 図に南北 55 m間 (第 12 図Ｂ－Ｃ間) の東壁土層を掲載した。

写真 4　外屋敷遺跡基本土層 (北壁)

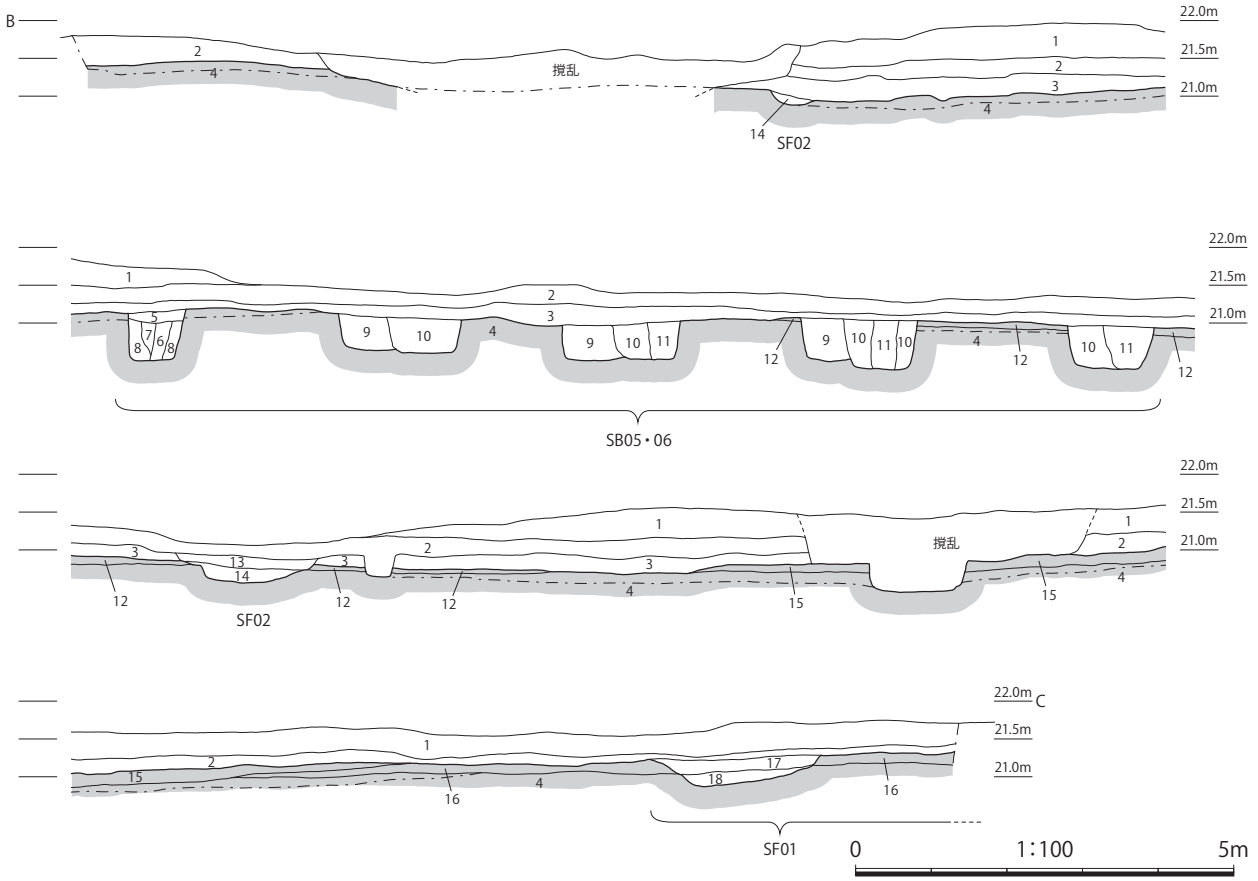


第 11 図　基本土層図



1　暗褐色土、砂利、礫（表土）
1'　暗褐色土、礫、コンクリート（表土）
2　褐色土と暗茶褐色土の混合土
3　淡茶褐色粘質土と橙褐色粘土ブロックの斑
4　明茶褐色粘質土
5　褐色～黄褐色粘土（地山）
6　暗茶褐色土（褐色粘土ブロック混じり）
7　黒色粘質土
8　明黄褐色土
9　暗茶色粘質土
10　暗茶褐色土
11　黒褐色粘質土
12　淡黒色粘質土と褐色粘土ブロックの斑
13　淡黒色粘質土（炭化物含む）
14　褐色土と褐色粘土ブロックの斑
15　茶褐色土と褐色粘土ブロックの斑
16　淡茶褐色粘土
17　茶褐色粘土と橙褐色粘土ブロックの斑
18　淡褐色粘質土
19　暗茶褐色粘質土と橙褐色粘土ブロックの斑
20　黒色粘質土と褐色粘土ブロックの斑
21　茶色粘質土と暗灰色粘土ブロックの斑
22　黄褐色シルト質粘土（地山の漸移層）
23　灰色～黒色土（耕作土）
24　黒色～暗茶色土
25　茶褐色土（黄褐色シルト混じり）
26　暗茶褐色土と褐色粘土ブロックの斑
27　明茶色土
28　淡茶色土（褐色粘土ブロック混じり）
29　暗茶褐色土と褐色粘土ブロックの斑
30　暗茶褐色土と橙褐色粘土ブロックの斑
31　淡黒褐色土
32　暗茶色土
33　淡茶褐色土（炭化物含む）
34　暗茶褐色土と橙褐色粘土ブロックの斑
35　黒色粘質土と褐色粘土ブロックの斑
36　黒褐色土
37　茶褐色土と褐色粘土ブロックの混合土

第 13 図　調査区北壁土層図



1　茶褐色土（近現代の盛土）
2　灰色～黒色土（耕作土）
3　淡茶褐色土
4　褐色～黄褐色粘土
5　淡茶褐色土と褐色粘土ブロックの斑
6　暗茶褐色土と橙褐色粘土ブロックの斑
7　淡茶褐色土と橙褐色粘土ブロックの斑
8　黒褐色土（黒ボクに似るがやや粘質）
9　暗茶褐色土と黒色土と褐色粘土ブロックの混合土
10　黒色土と褐色粘土ブロックの斑
11　黒色土
12　黄褐色シルト質粘土（地山の漸移層）
13　茶褐色土（炭化物含む）
14　茶褐色土と黄褐色粘土ブロックの混合土
15　暗茶色～淡褐色粘土（地山の漸移層）
16　淡赤褐色粘質土（地山の漸移層）
17　淡茶褐色土
18　黒色土と黄褐色粘土ブロックの斑

第 14 図　調査区東壁土層図

第 4 節　遺構と遺物

第 3 次調査では、弥生時代中期から近世に至る遺構・遺物を確認した。遺構は掘立柱建物跡 7 棟、溝 6 条、道路遺構 1 本、里道 2 本、柵 1 条、土坑 112 基、柱穴 398 基 (掘立柱建物の柱穴を含む)、不明遺構 2 基を検出した。

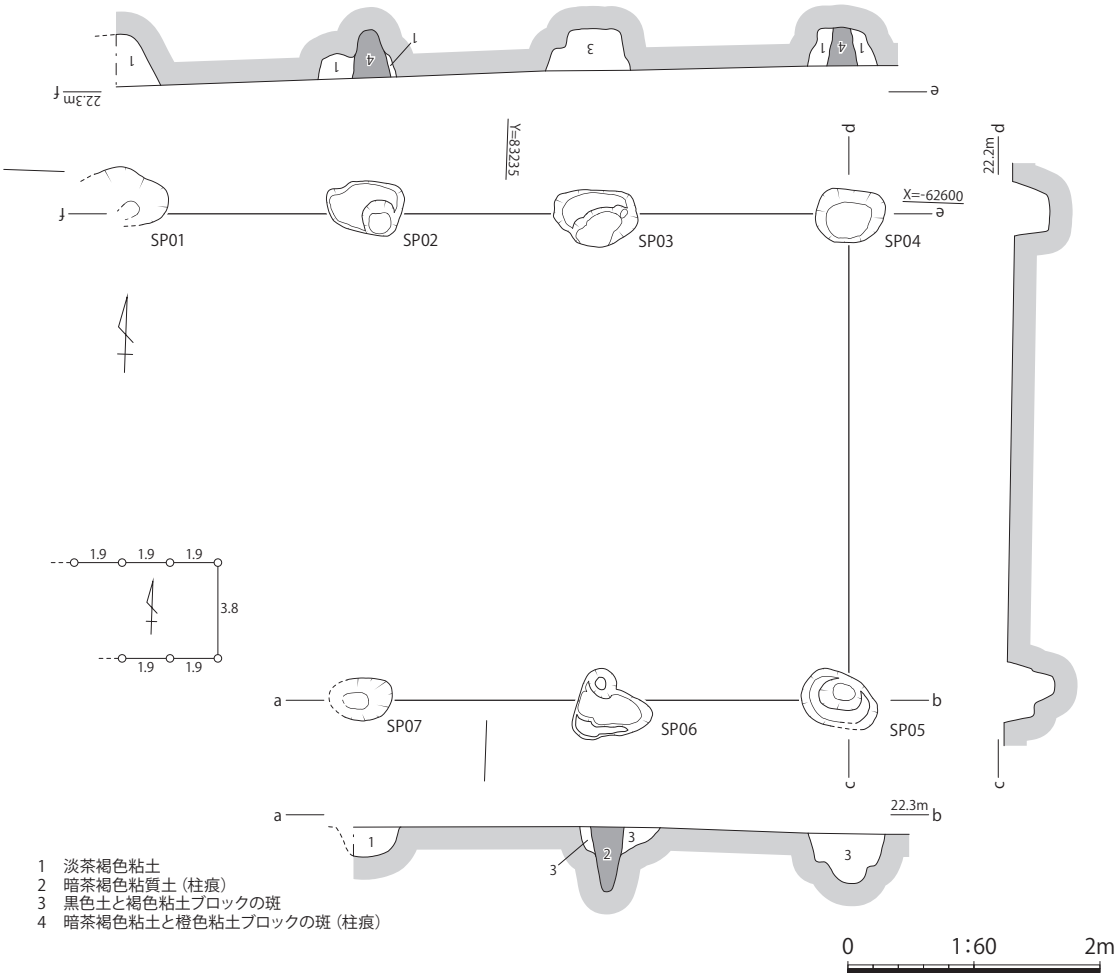
遺構内から出土した遺物には、弥生土器・須恵器・土師器 (中世～近世)・陶磁器などがあるが、その大半が破片で時期が分かるもの及び図化できたものは少ない。柱穴については遺跡内において密集する地点や散在する地点があるが、ここでは主に掘立柱建物跡や柵に伴うものを取り扱う。土坑については図化できた遺物を伴うものを掲載した。

本節では、これらの検出した遺構を種別順にその概要を述べ、各遺構から出土した遺物と併せて遺構・遺物の順で、順次報告することとしたい。なお、ここでは遺構の種別の中で古い時期のものから順に掲載するが、遺構の変遷については第 5 章第 1 節で報告する。

第 1 項　掘立柱建物跡

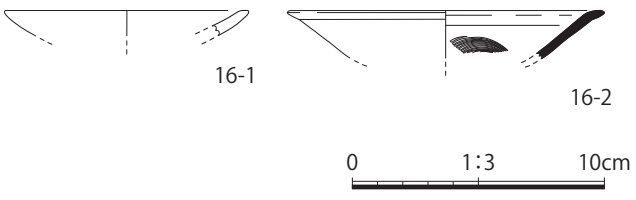
SB01（第 15 図）

規模と形態　SB01 は、調査区北西側の E4 グリッドに位置する標高 22.18m で検出した掘立柱建物跡である。西側は調査区外となるため桁行は不明だが、梁行は確定している。検出した範囲での規模は、桁行 3 間、梁行 1 間の構造で、桁行 5.70m、梁行 3.80m を測る。柱間の心々距離は桁行 1.90m の等距離、梁行 3.80m を測る。建物の主軸方位は東西で、N － 88° － E である。柱穴は楕円形を呈し、径 0.50 ～ 0.65m と大きさにやや幅が認められる。柱穴の深さは 0.35 ～ 0.40m 前後を測り、埋土は淡茶褐色粘土や黒色土と褐色粘土ブロックの斑層が堆積し、SP02・04・06 では柱痕跡を確認した。



第 15 図　SB01 平面図・断面図

SB01 出土遺物（第 16 図）　遺物は SB01 を構成する柱穴 SP05 から 2 点出土した。16-1 は中世土師器皿である。口縁部のみ残存する。16-2 は中国白磁の皿である。口縁～体部上方のみ残存し、端反の口縁部をもつ。体部内面に櫛描文を施す。白磁皿Ⅸ類、12 世紀代後半～ 13 世紀代に相当する。

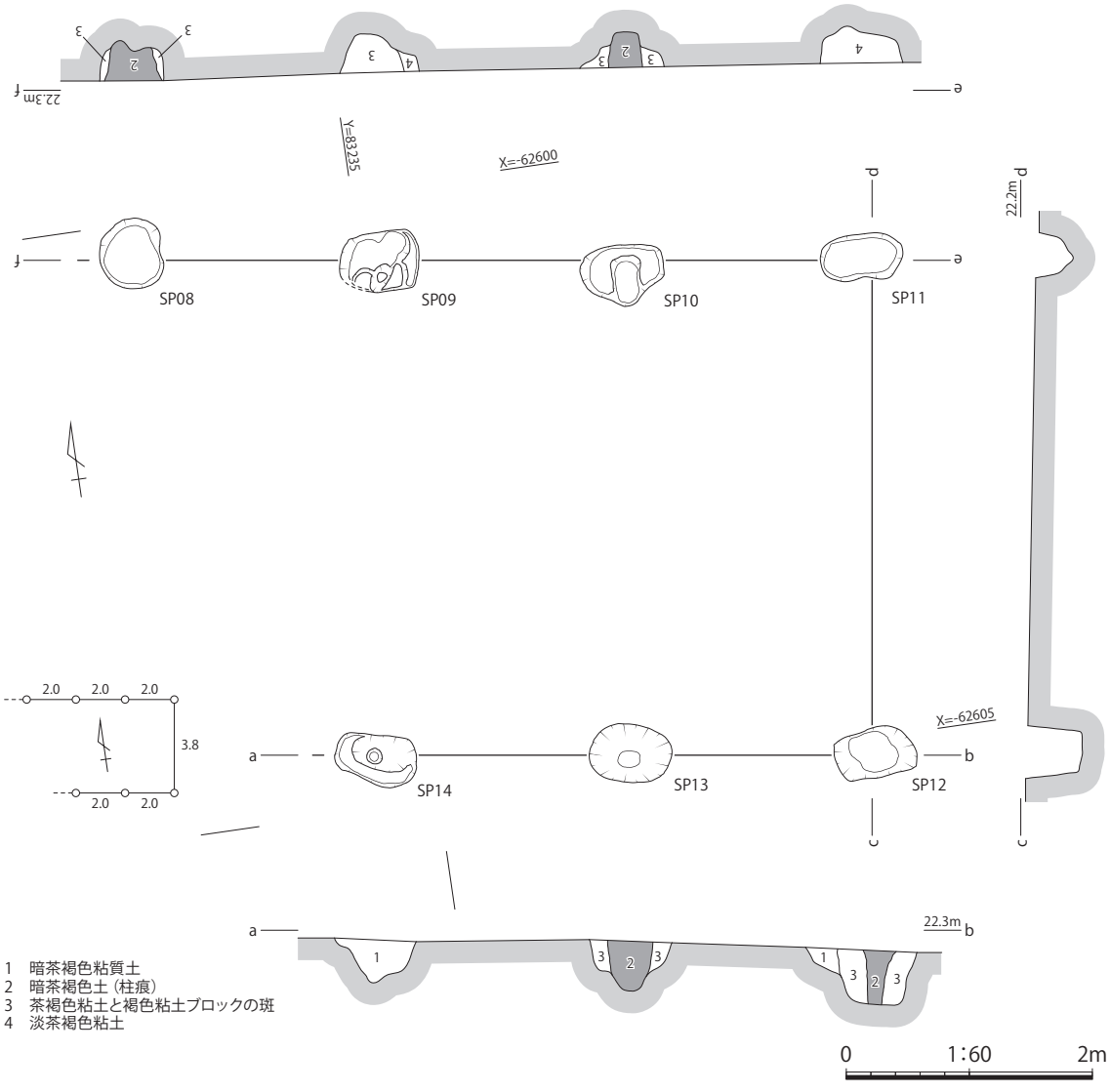


第 16 図　SB01 出土遺物

遺構の性格と時期　遺構の時期については、出土した中国白磁から 12 世紀代後半～ 13 世紀代が想定される。SB01 は側柱建物で、平面位置は後述する SB02 と部分的に重なり、出土遺物の年代から SB02 よりも古い建物と考えられる。柱穴埋土の土層観察から、SB01 は柱痕埋土に橙色粘土ブロックが斑状に入るのに対し、SB02 の柱痕埋土は暗茶褐色粘質土の単層となっている点が異なる。

SB02（第 17 図）

規模と形態　SB02 は、調査区北西側の E4 グリッドに位置する標高 22.15m で検出した掘立柱建物跡である。西側は調査区外となるため桁行は不明だが、梁行は確定している。検出した範囲での規模は、桁行 3 間、梁行 1 間の構造で、桁行 6.00m、梁行 3.80m を測る。柱間の心々距離は桁行 2.00m の等距離、梁行 3.80m を測る。建物の主軸方位は東西で、N － 98° － E である。柱穴は楕円形を呈し、径 0.50 ～ 0.65m を測る。柱穴の深さは 0.30 ～ 0.40m 前後を測り、埋土は暗茶褐色粘質土や茶褐色粘土と褐色粘土ブロックの斑層が堆積し、SP08・10・12・13 では柱痕跡を確認した。



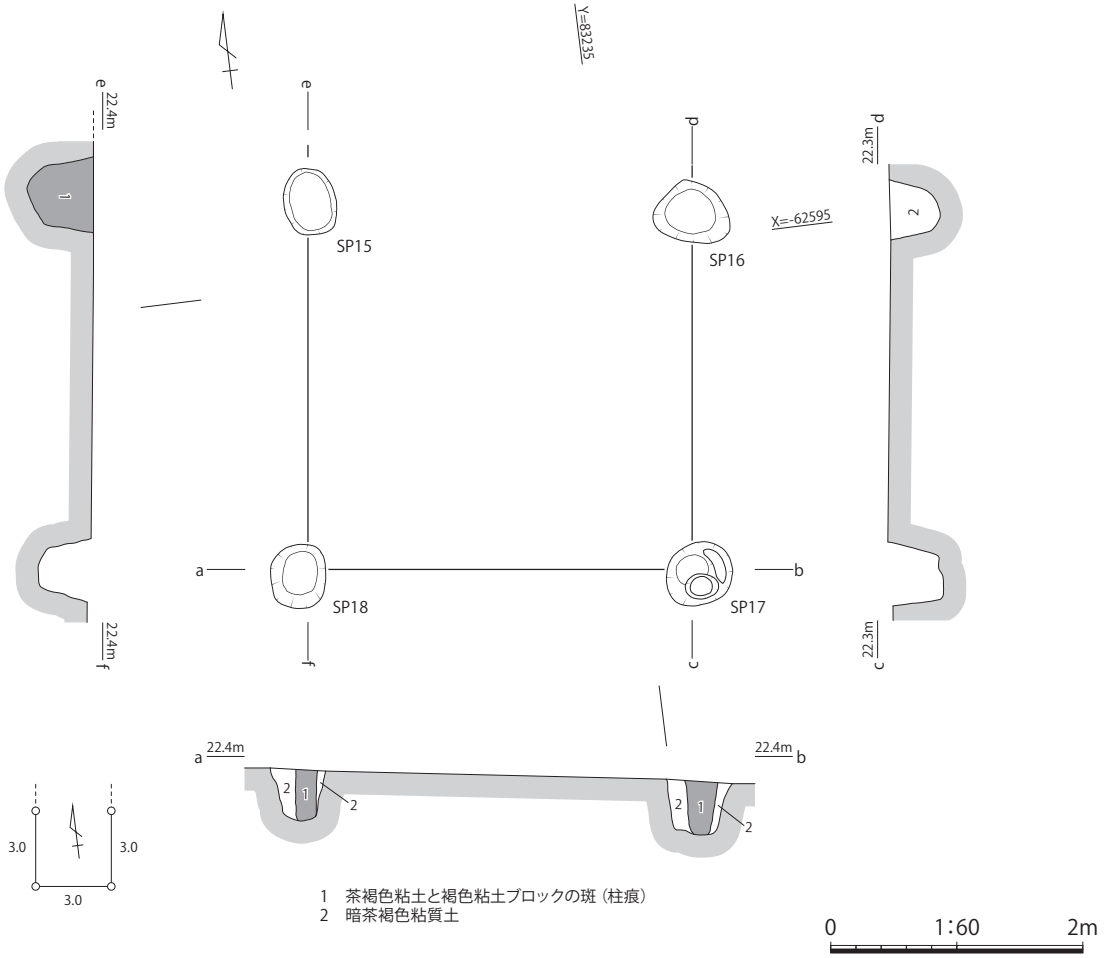
第 17 図　SB02 平面図・断面図

SB02 出土遺物　遺物は SB02 を構成する柱穴 SP09 から中世土師器皿が 1 点出土した。小片のため図化していないが、口縁部が低く直立に立ち上がるという特徴から 13 ～ 14 世紀代と考えられる [(2)]。

遺構の性格と時期　遺構の時期については、出土した中世土師器から 13 ～ 14 世紀代が想定される。SB02 の平面位置は SB01 と部分的に重なるが、建物の主軸が異なっている。また、出土遺物に若干の時期差が見られることから時期の違う建物と捉えている。

SB03（第 18 図）

規模と形態　SB03 は、調査区北西側の E3 グリッドに位置する標高 22.20m で検出した掘立柱建物跡である。北側は調査区外となるため桁行は 1 間以上の規模をもち、梁行は確定している。検出した範囲での規模は、桁行 1 間、梁行 1 間の構造で、桁行 3.00m、梁行 3.00m を測る。柱間の心々距離は桁行 3.00m、梁行 3.00m を測る。建物の主軸方位は南北で、W － 8° － N である。柱穴は円形を呈し、径 0.45 ～ 0.50m を測る。柱穴の深さは 0.40m 前後を測り、埋土は暗茶褐色粘質土や茶褐色粘土と褐色粘土ブロックの斑層が堆積し、SP17・18 では柱痕跡を確認した。SP15 は方形プランの土坑と切り合っていたため、SP15 を柱痕とした規模の大きな柱穴の可能性も考えた。このため、第 4 次調査で設定した T12 において柱穴の確認調査を実施したが、これと対応する柱穴は検出されず、土層断面から SP15 は方形プランの土坑と切り合う形で掘り込まれた楕円形の柱穴と判断した。



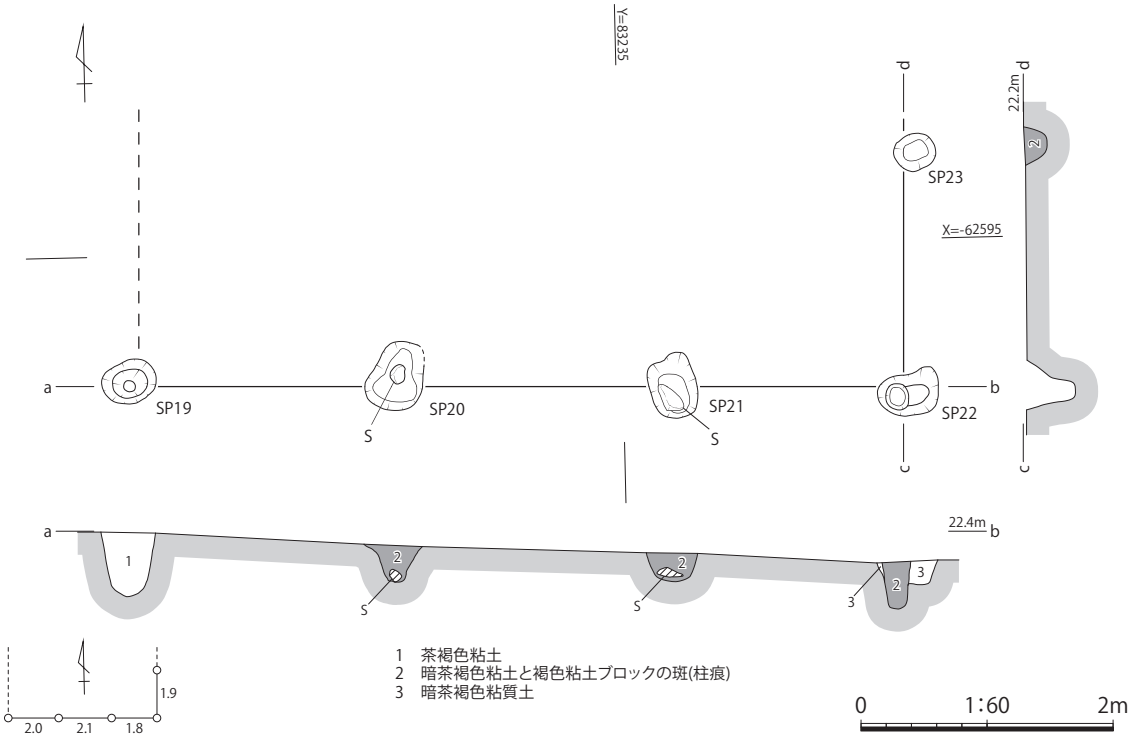
第 18 図　SB03 平面図・断面図

SB03 出土遺物　遺物は SB03 を構成する柱穴 SP15 から中世土師器皿が 2 点出土した。小片のため図化していないが、口縁部が低く直立に立ち上がるという特徴から 13 ～ 14 世紀代と考えられる。

遺構の性格と時期　遺構の時期については、出土した中世土師器から 13 ～ 14 世紀代が想定される。主軸は異なるが、SB02 とほぼ直交するような建物の傾きを指向している点から、SB02 と SB03 は規格的に配置された同時期の建物の可能性が高い。

SB04（第 19 図）

規模と形態　SB04 は、調査区北西側の E3 グリッドに位置する標高 22.22m で検出した掘立柱建物跡である。桁行は確定しているが、北側は調査区外となるため梁行は 1 間以上の規模をもつ。検出した範囲での規模は、桁行 3 間、梁行 1 間の構造で、桁行 5.90m、梁行 1.90m を測る。柱間の心々距離は桁行 1.80 ～ 2.10m、梁間 1.90m を測る。建物の主軸方位は東西で、N － 92° － E である。柱穴は円形または楕円形を呈し、径 0.35 ～ 0.50m と大きさにやや幅が認められる。柱穴の深さは 0.25 ～ 0.50m 前後を測り、埋土は茶褐色粘土や暗茶褐色粘土と褐色粘土ブロックの斑層が堆積し、SP22 では柱痕跡を確認した。SP20・21 は底部に直径 15 ～ 25㎝の扁平な根石をもつ柱穴である。



第 19 図　SB04 平面図・断面図

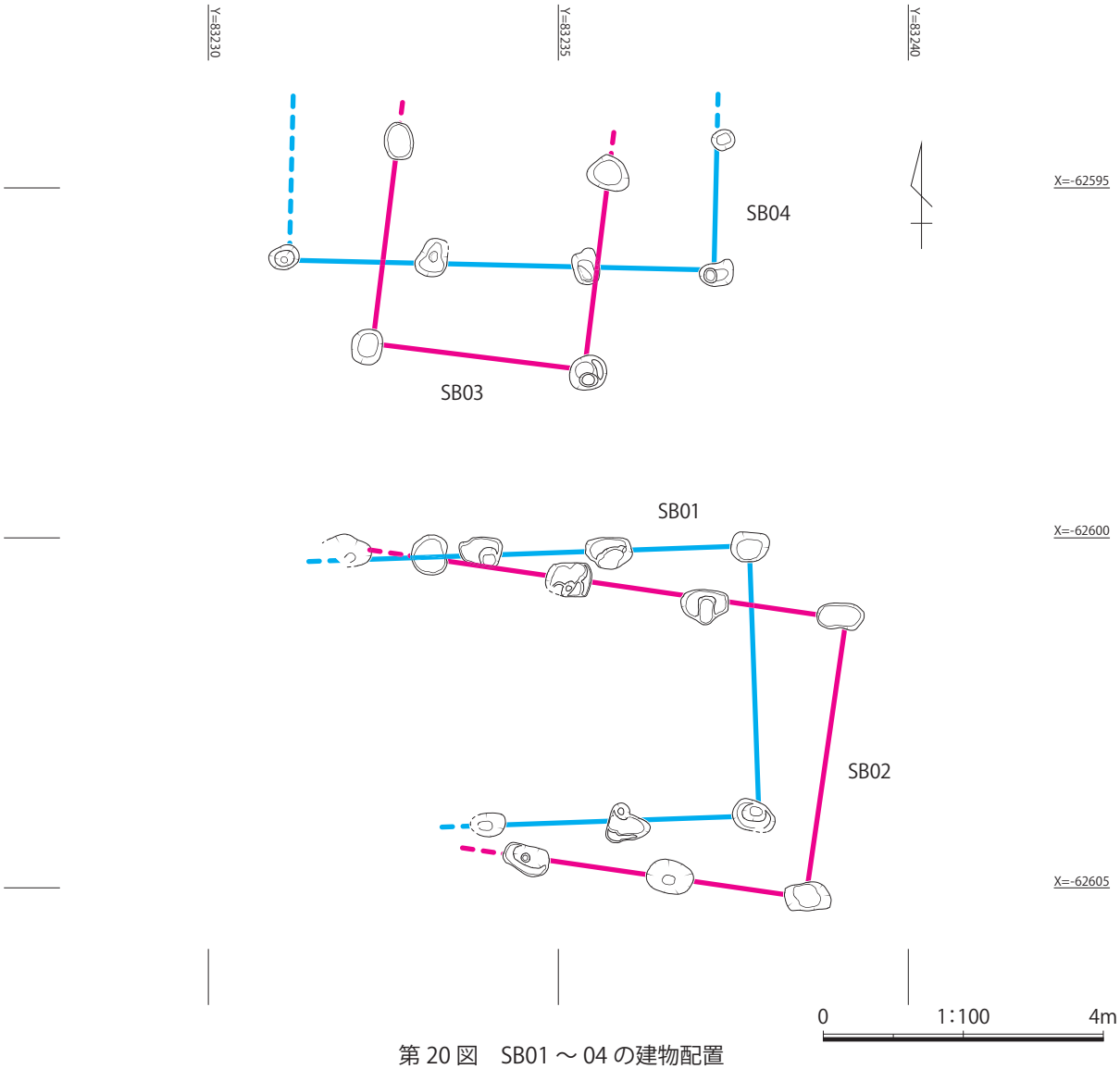
SB04 出土遺物　遺物は SB04 を構成する柱穴 SP21･22 から中世土師器皿が 2 点出土した。小片のため図化していないが、口縁部が低く直立に立ち上がるという特徴から 13 ～ 14 世紀代と考えられる。

遺構の性格と時期　遺構の時期については、出土した中世土師器から 13 ～ 14 世紀代が想定される。SB01 と比べて出土遺物の年代がやや新しくなるが、ほぼ同一な建物の傾きを指向している点から、SB01 と SB04 は規格的に配置された建物の可能性が高い。

SB01 ～ 04 の建物配置について（第 20 図）

調査区北西側の E3・E4 グリッドに位置する SB01 ～ 04 は、主軸方位から 2 つのまとまりに分けて把握できる。方位座標軸南北に対して斜交し 2°の角度をもつ SB01･04 と、方位座標軸南北に対して斜交し 8°の角度をもつ SB02・03 のグループである。

この 2 つのグループの平面位置は、SB01 と SB02 が部分的に重なり、SB03 と SB04 が部分的に重なっている。これらは建て替えによる重なりと考えられ、先後関係は出土遺物から SB01・04 が古い時期、SB02・03 が新しい時期の遺構と判断される。



第 20 図　SB01 ～ 04 の建物配置

SB05・06（第 21 図）

規模と形態　SB05･06 は、調査区東側の J4 ～ J5 グリッドに位置する標高 21.00m で検出した掘立柱建物跡である。桁行は確定しているが、東側は調査区外となるため梁行は不明である。SB05 と SB06 の柱穴は切り合い関係にあるため、ここでは一括して取り扱う。

SB05 の検出した範囲での規模は、桁行 3 間、梁行未検出で、桁行 9.00m を測る。柱間の心々距離

は桁行 2.90 ～ 3.20mを測る。建物の主軸方位は南北で、N － 6° － W である。柱穴は円形を呈し、径 0.80 ～ 1.00mを測る大きな柱穴である。柱穴の深さは 0.50 ～ 0.60mを測るが、柱穴底部の標高は 20.50 ～ 20.64mでほぼ揃っており、同一の建物柱穴と考えている。埋土は茶褐色土と褐色～橙褐色粘土ブロックの斑層や黒褐色土が堆積し、SP24 では柱痕跡を確認した。

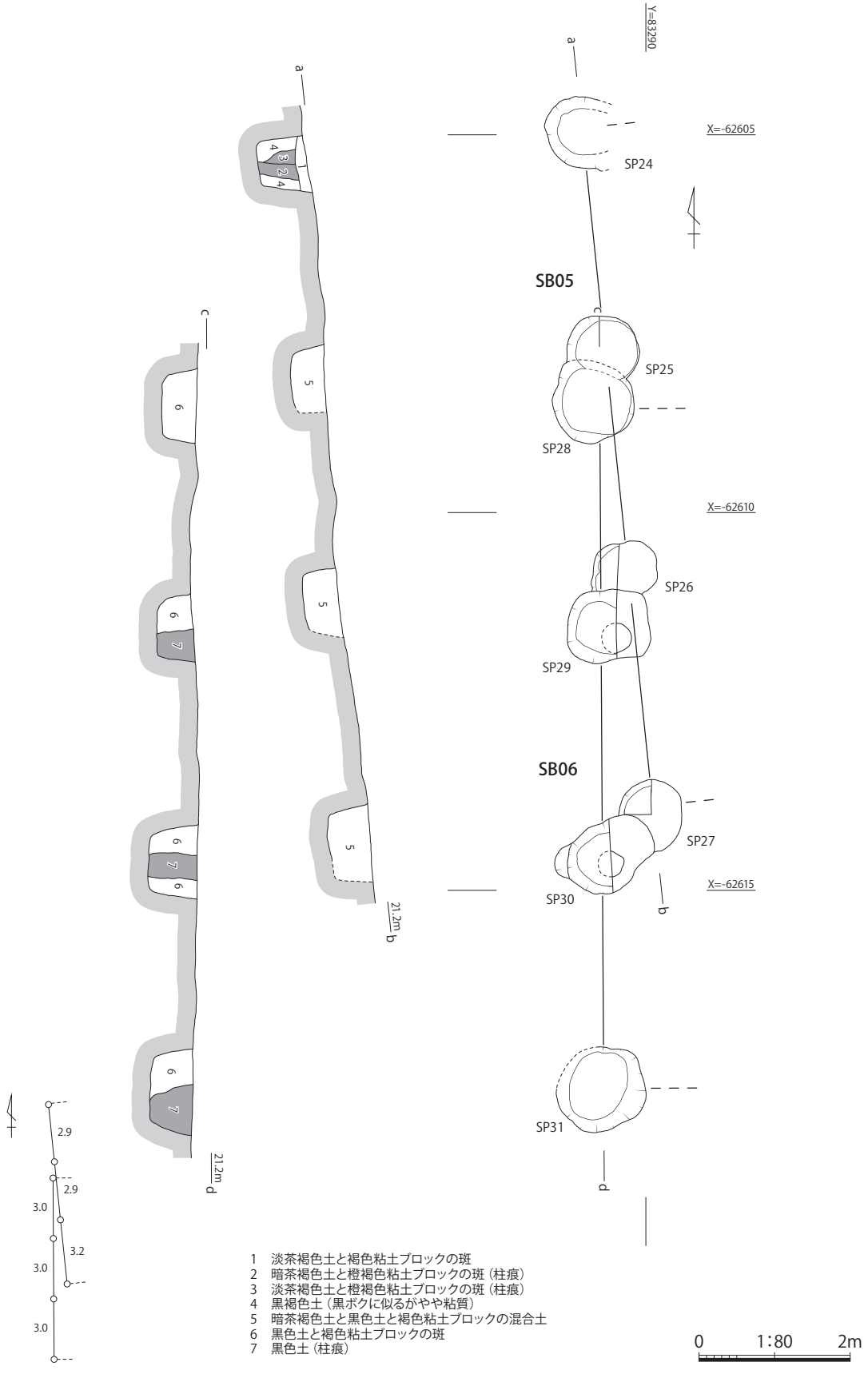
SB06 の検出した範囲での規模は、桁行 3 間、梁行未検出で、桁行 9.00mを測る。柱間の心々距離は桁行 3.00mの等距離を測る。建物の主軸方位は南北で、N － 0° － W の方位座標軸南北と一致している。柱穴は円形または楕円形を呈し、径 0.90 ～ 1.20mを測る規模の大きな柱穴である。柱穴の深さは 0.50 ～ 0.60mを測るが、柱穴底部の標高は 20.40mでほぼ揃っており、同一の建物柱穴と考えている。埋土は黒色土と褐色粘土ブロックの斑層や黒色土が堆積し、SP29・30・31 では柱痕跡を確認した。柱痕跡はいずれも柱穴の心々からやや南側に寄っている状況が観察された。

SB06 出土遺物（第 22 図）　遺物は SB05 を構成する柱穴からは出土せず、SB06 を構成する柱穴 SP30 から中世土師器皿が 2 点、SP31 から中世土師器皿が 2 点出土した。いずれも柱穴の掘方埋土から出土した 13 ～ 14 世紀代のものである。22-1 は土師器皿で外面に煤が付着していることから灯明皿として使用されていた可能性がある。22-2 は土師器皿で口径に対し底径の比が大きく、口縁部の立ち上がりは低くやや外反して立ち上がる。22-3 は土師器皿で口径に対し底径の比が大きく、口縁部は低くほぼ直立に立ち上がる。22-4 は土師器坏で体部下方～底部のみ残存する。

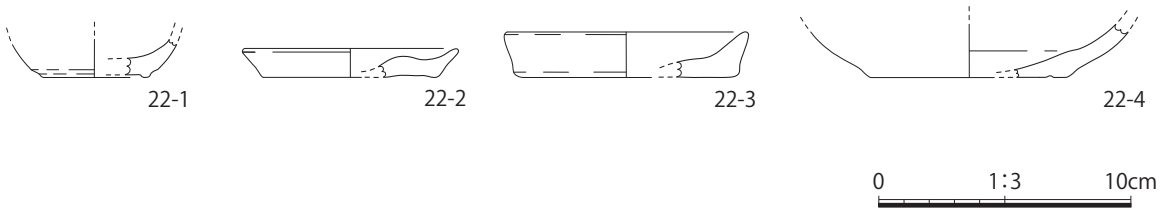
遺構の性格と時期　今回検出した SB01 ～ 04 の柱穴の大部分は直径が 0.35 ～ 0.50mのものであったのに対し、SB05・06 については直径が 0.80 ～ 1.00mと大型である。また、柱間寸法についても SB01 ～ 04 が 2.00m前後であるのに対し、当該建物については 3.00mであり、大型の建物だった可能性が考えられる。こうしたことから一般的な建物跡というよりは、字名にある「東淵寺堂敷」の由来となる建物を検出した可能性が高い。ただし、今回は建物の西辺を検出しただけであり、その全容については今後の課題である。遺構の時期については、SB06 の柱穴から出土した中世土師器から 13 ～ 14 世紀代が想定される。SB05 から遺物は出土していないため建物の年代は不明となるが、先後関係は柱穴の切り合いから SB05 が古い時期、SB06 が新しい時期の遺構と考えられる。

SB05・06 を構成する柱穴は、いずれも径 1.00m前後を測る同一規模のもので埋土も似ていることから、あまり時期を隔てない時間幅での建て替えであったと推察される。また、柱穴埋土は黒色土が主体となっており、地山由来の土がほとんど入らないという特徴がある。地山の褐色粘土は柱穴には埋め戻さずに、建物付近のどこか別の場所で利用していたものと考えられる。

建物の性格は、SB05・06 の検出位置が明治 8 年の切図の記載にある「東淵寺堂敷」の範囲にあたることから、庫裏（くり）などの東淵寺に関わる施設と捉えている[(3)]。東淵寺の本堂は切図の記載から SB05・06 の北側に位置するものと考えられる[(4)]。なお、東淵寺については現段階で創建および廃絶年代が分かっていない。文献では江戸時代の享保 2(1717) 年に成立した「雲陽誌」や安永 3(1774) 年に成立した「意宇郡寺社差図」[(5)] に東淵寺の記載が見られ、江戸時代中期には存在していたものと考えられている。今回検出した SB05・06 の年代観から、東淵寺及び東淵寺堂敷に関わる建物の創建年代は 13 ～ 14 世紀代の中世まで遡る可能性が指摘できる。



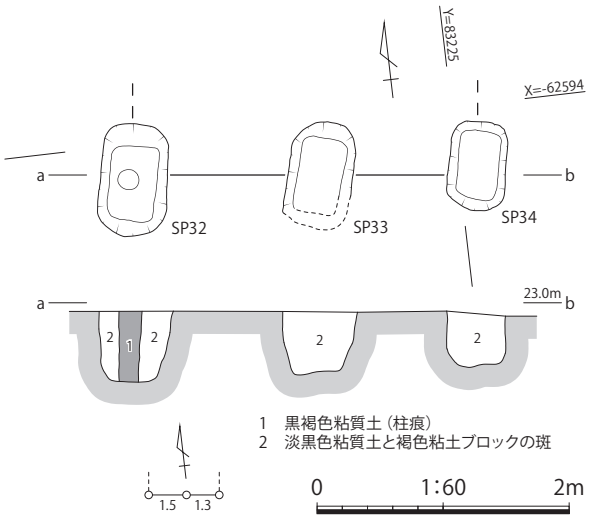
第 21 図　SB05・06 平面図・断面図



第 22 図　SB06 出土遺物

SB07（第 23 図）

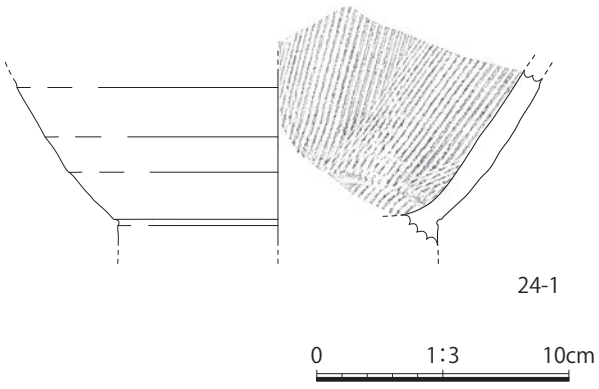
規模と形態　SB07 は、調査区北西側の D3 グリッドに位置する標高 22.80m で検出した掘立柱建物跡である。北側は調査区外となるため桁行は不明だが、梁行は確定している。検出した範囲での規模は、桁行未検出、梁行 2 間の構造で、梁行 2.80m を測る。柱間の心々距離は梁行 1.30 ～ 1.50m を測る。建物の主軸は南北と考えられるが、桁行未検出のため詳細は不明である。柱穴は小判形を呈し、径 0.80m を測る。柱穴の深さは 0.45 ～ 0.55m を測るが、柱穴底部の標高は 22.30m でほぼ揃っていることから、同一の建物柱穴と考えている。埋土は淡黒色粘質土と褐色粘土ブロックの斑層が堆積し、SP32 では柱痕跡を確認した。



第 23 図　SB07 平面図・断面図

SB07 出土遺物（第 24 図）　遺物は SB07 を構成する柱穴 SP33 から出土した。24-1 は在地系陶器の擂鉢である。内外面に赤茶色の釉薬を施し、摺目単位は 22 本と密である。19 世紀代に相当するものと考えられる。

遺構の性格と時期　遺構の時期については、出土した在地系陶器から 19 世紀代が想定される。建物の全容は明らかではないが、住居としては規模が小さいと思われるため、建物の性格は倉庫などの住居に付随する施設を想定している。

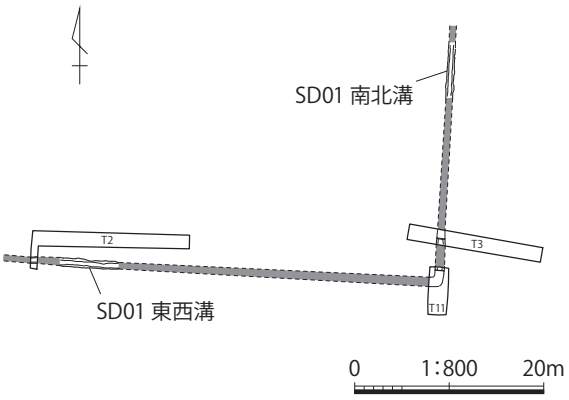


第 24 図　SB07 出土遺物

第 2 項　溝

SD01（第 25 図）

SD01 は、第 1 次調査の T2・3 及び第 4 次調査の T11 で検出している。T2・3・11 の SD01 については第 3 章で詳述しているため、ここでは第 3 次調査で検出した部分について取り扱う。

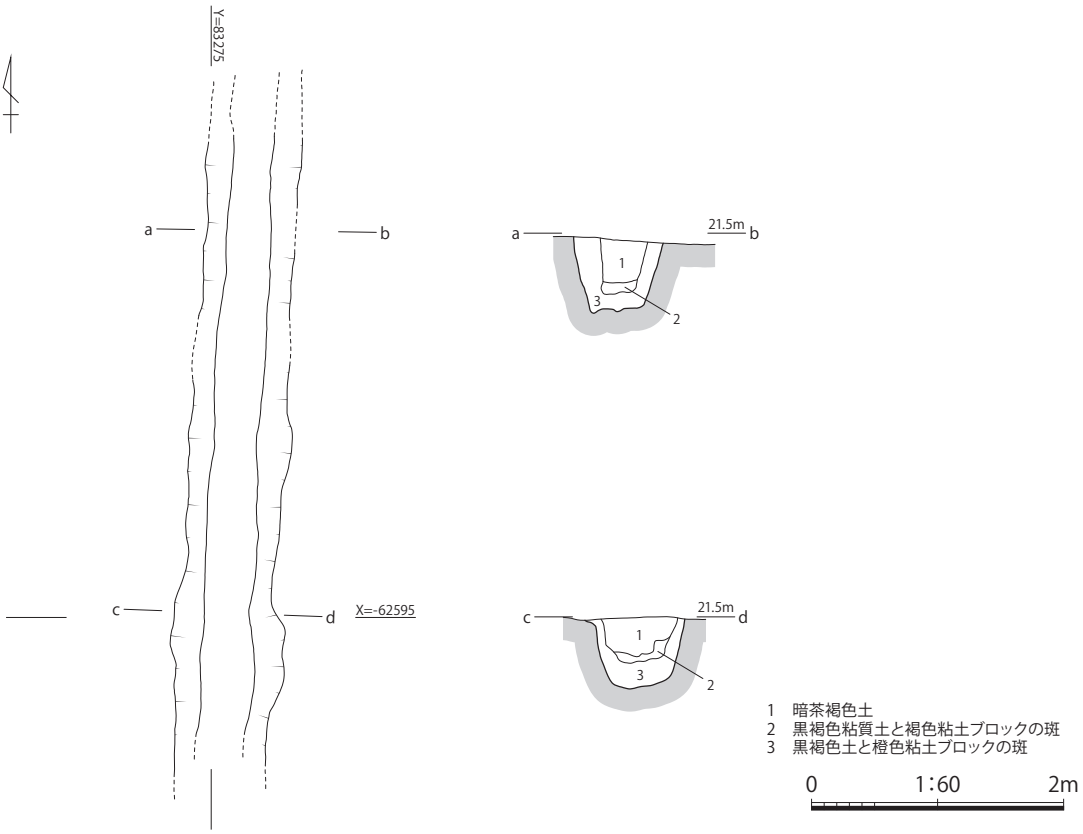


第 25 図　SD01 の遺構配置

SD01 南北溝（第 26 図）

規模と形態　SD01 南北溝は、調査区北東側の I3 グリッドに位置する標高 21.42ｍで検出した溝で、北側及び南側は調査区外へと続いている。検出した範囲での規模は長さ 5.50m、幅 0.80 ～ 1.00 m、深さ 0.60mを測る。素掘の溝で、主軸方位は N － 3° － E である。断面形は逆台形で、箱堀状の掘方を呈する。溝底部は標高 20.82 ～ 20.97ｍで、排水方向は南側から北側へ向かって降る。

埋土は上層から暗茶褐色土 (第 1 層)、黒褐色粘質土と褐色粘土ブロックの斑層 (第 2 層)、黒褐色土と橙色粘土ブロックの斑層 (第 3 層) が堆積する。このうち第 1・2 層は U 字形に掘り込まれ、幅 0.40 ～ 0.60m、深さ 0.35 ～ 0.40mの規模で溝が掘り直されている状況を確認した。規模は縮小するものの、溝の位置を変えずに使用していたことを示すものと考えられる。この溝から遺物は出土していない。

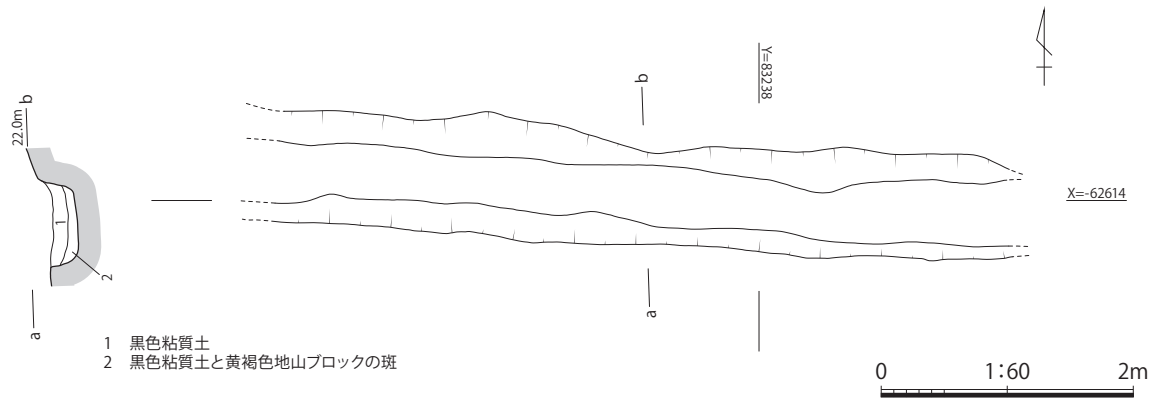


第 26 図　SD01(南北溝) 平面図・断面図

SD01 東西溝（第 27 図）

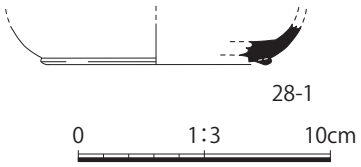
規模と形態　SD01 東西溝は、調査区西側の E5 グリッドに位置する標高 21.85m で検出した溝で、西側及び東側は調査区外へと続いている。この溝は、後述する SD05 と重複する位置関係にあり、溝上部は SD05 の掘り込みによって消失している。検出した範囲での規模は長さ 5.70m、幅 0.70 ～ 0.80 m、深さ 0.20m を測る。素掘の溝で、主軸方位は N － 93° － E である。断面形は逆台形で、箱堀状の掘方を呈する。溝底部は標高 21.54 ～ 21.75m で、排水方向は西側から東側へ向かって降る。

埋土は上層から黒色粘質土 (第 1 層)、黒色粘質土と黄褐色地山ブロックの斑層 (第 2 層) が堆積する。第 2 層には黒色粘質土に黄褐色地山ブロックが斑状に含まれており、水流の作用による粒度淘汰を受けた堆積の可能性もあるが、地山ブロックの塊が多く混入していることから人為的に埋められたものと考えられる。この溝の第 2 層から遺物が 1 点出土している。



第 27 図　SD01(東西溝) 平面図・断面図

SD01 出土遺物（第 28 図）　遺物は SD01 東西溝埋土の下層から須恵器が 1 点出土した。28-1 は須恵器の高台付坏で、高台部分のみ残存する。高台は 3㎜と低く、やや丸みを帯びている。出雲国府第 4 型式、8 世紀第 3 ～ 4 四半期に相当する。



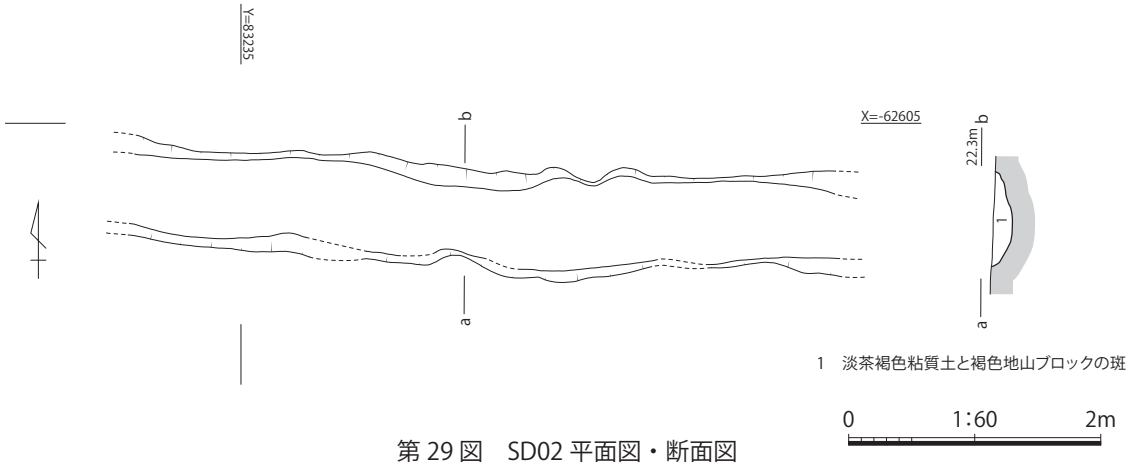
第 28 図　SD01 出土遺物

遺構の性格と時期　SD01 は、第 1 次調査で T2 と T3 の 2 箇所、第 3 次調査で 2 箇所、第 4 次調査で T11 の 1 箇所の合計 5 箇所で確認することができた。検出した SD01 は、いずれも箱堀状の掘方をもつ同一の溝であり、南北 (東辺)25m 以上、東西 (南辺)45m 以上の規模を測る官衙施設あるいは集落を取り囲む区画溝と考えられる[(6)]。

遺構の時期は、SD01(東西溝) から出土した須恵器 1 点のみで年代根拠とするには乏しいが、8 世紀代中頃～後半を想定している。ただし、年代根拠とした須恵器は SD01 の埋土中から出土しているため溝の廃絶時期を示しているものと思われ、溝が機能していた時期は 8 世紀代中頃を遡る可能性が考えられる。

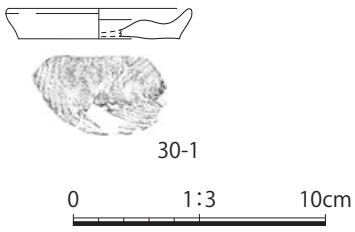
SD02（第 29 図）

規模と形態　SD02 は、調査区西側の E4 グリッドに位置する標高 22.22m で検出した東西溝で、西側及び東側は調査区外へと続いている。検出した範囲での規模は長さ 5.70m、幅 0.90m、深さ 0.12m を測る。素掘の溝で、主軸方位は N － 92° － E である。断面形は浅い窪み状を呈する。溝底部は標高 22.10m でほぼ揃っており、高低差は認められない。埋土は淡茶褐色粘質土と橙色地山ブロックの斑層 (第 1 層) の単層が堆積する。



第 29 図　SD02 平面図・断面図

SD02 出土遺物（第 30 図）　遺物は SD02 埋土から 1 点出土した。30-1 は 13 ～ 14 世紀代の中世土師器皿で、口径に対し底径の比が大きく、口縁部は低くほぼ直立に立ち上がる。底部外面に糸切り痕をもつ。内外面に煤が付着していることから灯明皿として使用されていた可能性がある。



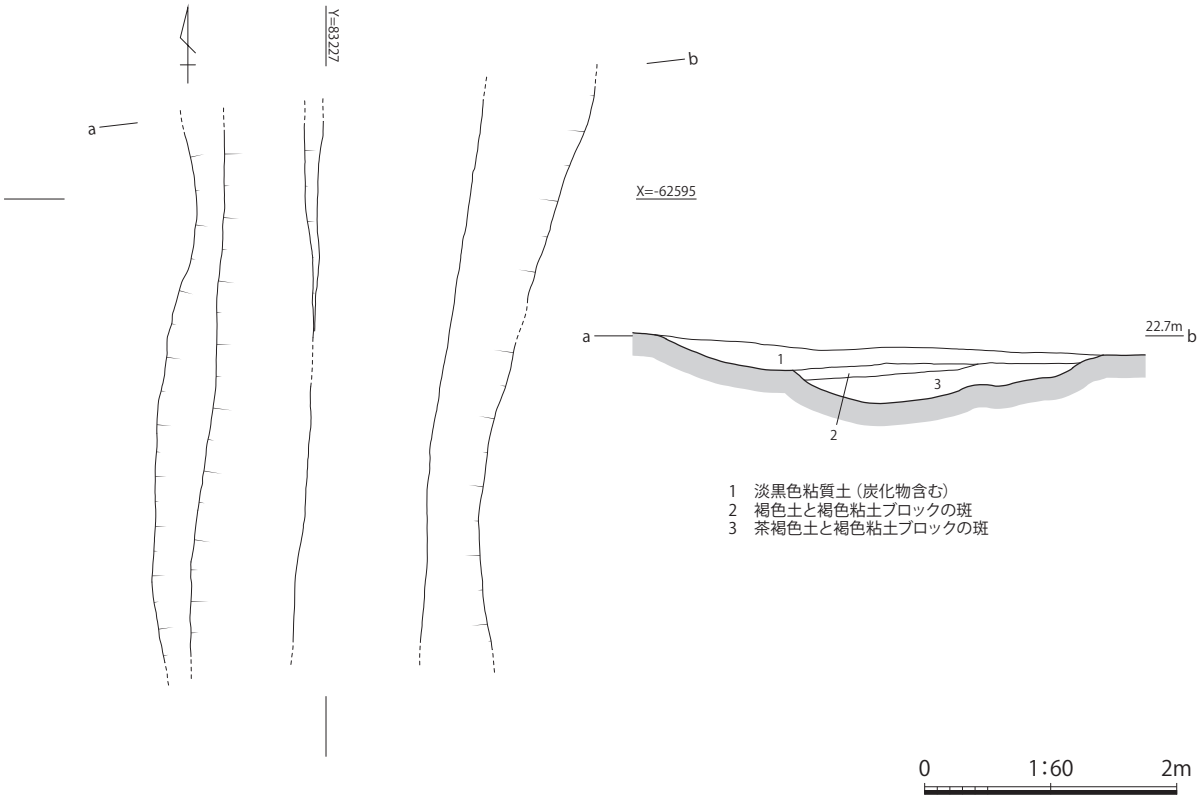
第 30 図　SD02 出土遺物

遺構の性格と時期　SD02 の北側には柱穴群が密集する地点、南側には散在する地点があり、検出位置はこれらの境界にあたることから、区画溝の可能性が考えられる。また、SD02 は SB02 の南側に隣接する位置関係にあることから建物に付属する雨落溝の可能性も考えられるが、明確な性格は不明である。SD02 の時期は、出土した中世土師器から 13 ～ 14 世紀代を想定している。

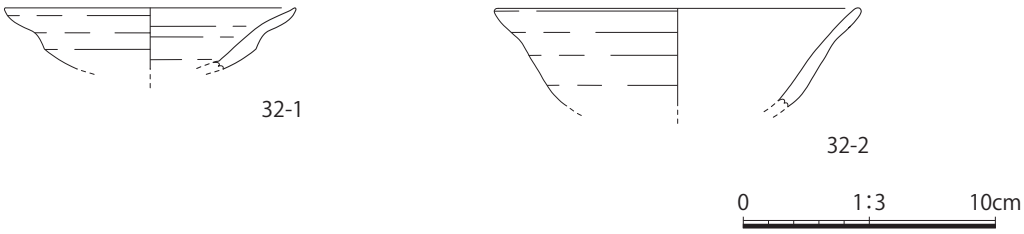
SD03（第 31 図）

規模と形態　SD03 は、調査区北西側の D3 グリッドに位置する標高 22.56m で検出した南北溝で、北側及び南側は調査区外へと続いている。検出した範囲での規模は長さ 4.30m、幅 2.60m、深さ 0.36 m を測る。素掘の溝で、主軸方位は N － 4° － E である。断面形は浅い窪み状を呈する。溝底部は標高 22.20m でほぼ揃っており、高低差は認められない。埋土は上層から淡黒色粘質土 (第 1 層)、褐色土と褐色粘土ブロックの斑層 (第 2 層)、茶褐色土と褐色粘土ブロックの斑層 (第 3 層) が堆積する。

SD03 出土遺物（第 32 図）　遺物は SD03 埋土から 2 点出土した。32-1 は土師器皿である。体部中央付近に段をもち、口縁部をやや外反させる。32-2 は土師器坏である。底部は残存していないが、体部が直線的に立ち上がる。いずれも 13 ～ 14 世紀代に相当する中世土師器と考えられる。



第 31 図　SD03 平面図・断面図

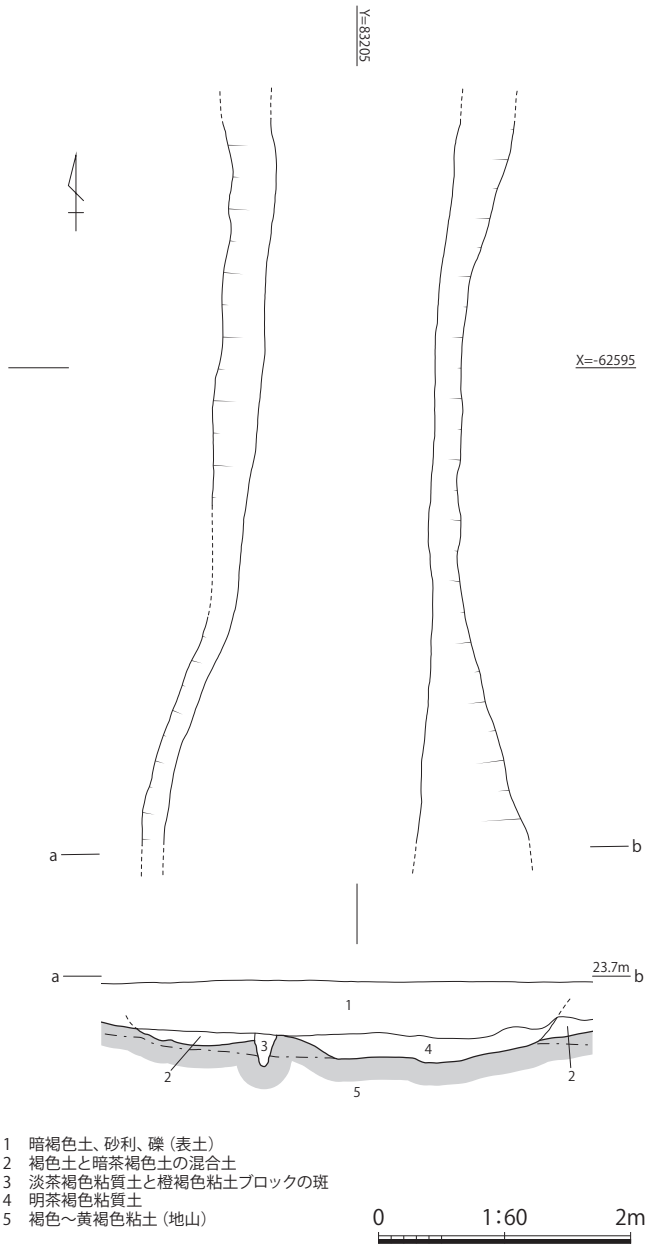


第 32 図　SD03 出土遺物

遺構の性格と時期　SD03 は柱穴群が密集する地点の西側にあたることから、区画溝の可能性が考えられる。また、SD03 は SB03 や SB04 の西側に隣接する位置関係にあることから建物に付属する溝の可能性も考えられる。SD03 の時期は、出土した中世土師器から 13 ～ 14 世紀代を想定している。

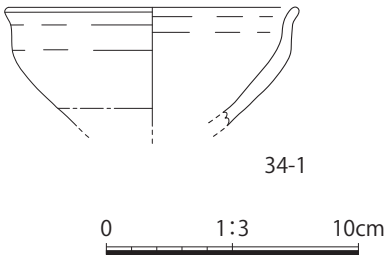
SD04（第 33 図）

規模と形態　SD04 は、調査区北西端の B3 グリッドに位置する標高 23.23m で検出した南北溝で、北側及び南側は調査区外へと続いている。検出した範囲での規模は長さ 5.50m、幅 2.00m、深さ 0.20 mを測る。素掘の溝で、主軸方位は N － 4° － E である。断面形は浅い窪み状を呈する。溝底部は標高 23.03m でほぼ揃っており、高低差は認められない。埋土は褐色土と暗茶褐色土の混合土 (第 2 層)、明茶褐色粘質土 (第 4 層) が堆積する。



第 33 図　SD04 平面図・断面図

SD04 出土遺物（第 34 図）　遺物は SD04 埋土から 1 点出土した。34-1 は瀬戸・美濃陶器の天目碗である。高台は欠損しているが、胴部が斜め上方に向けて延び、口縁部の下方でくの字形に屈曲する。内外面に鉄釉が施釉され、外面胴部下方は露胎である。16 世紀代後半に相当する。



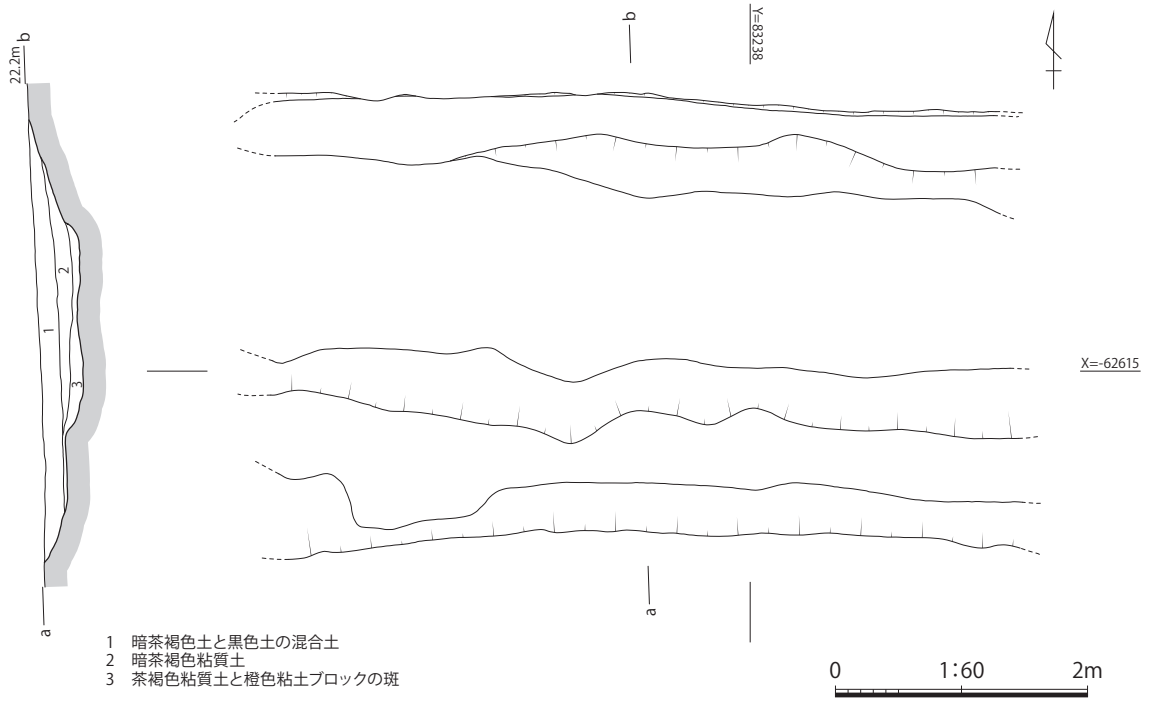
第 34 図　SD04 出土遺物

遺構の性格と時期　SD04 は調査区北西端に位置し、SD04 より東側では多数の柱穴や土坑が検出されている。これらの遺構から出土した遺物には小片のため図化していないが 16 世紀代後半のものが含まれ、また、建物の復元まで至っていないものの集落内の遺構と考えられることから、SD04 は区画溝の可能性がある。

SD04 の時期は、出土した陶器から 16 世紀代後半を想定している。

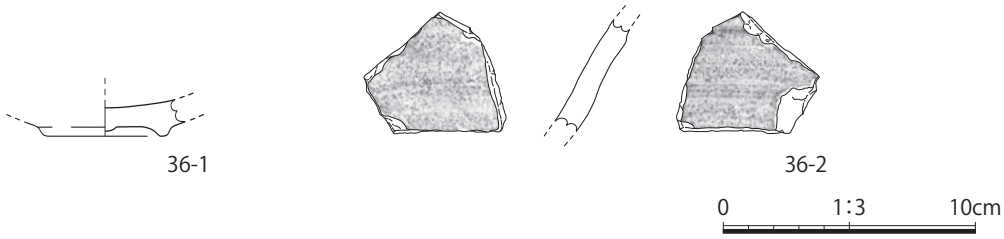
SD05（第 35 図）

規模と形態　SD05 は、調査区西側の E5 グリッドに位置する標高 22.20m で検出した東西溝で、西側及び東側は調査区外へと続いている。この溝は、先述した SD01 東西溝と重複する位置関係にあり、SD01 のほぼ直上に SD05 が位置している。検出した範囲での規模は長さ 5.70m、幅 3.00m、深さ 0.34m を測る。素掘の溝で、主軸方位は N － 93° － E である。断面形は浅い窪み状を呈し、階段状に 2 段に掘り込まれている。溝底部は標高 21.70 ～ 22.00m で、排水方向は西側から東側へ向かって降る。埋土は上層から暗茶褐色土と黒色土の混合土 (第 1 層)、暗茶褐色粘質土 (第 2 層)、茶褐色粘質土と橙色粘土ブロックの斑層 (第 3 層) が堆積する。



第 35 図　SD05 平面図・断面図

SD05 出土遺物（第 36 図）　遺物は SD05 埋土から 2 点出土した。36-1 は肥前陶器の皿である。底部～高台付近のみ残存し、高台は露胎の兜巾高台である。1580 ～ 1594 年代に相当する。36-2 は瓷器系陶器の壺・甕類で、外面に横方向のナデ痕跡をもつ。16 世紀代後半を示す。

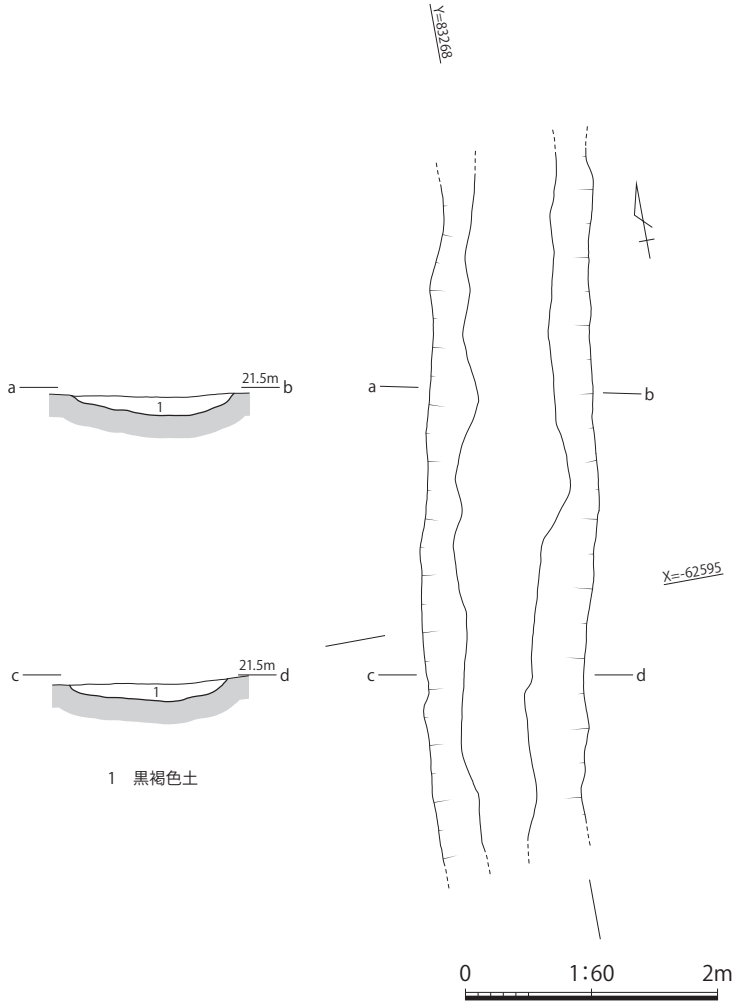


第 36 図　SD05 出土遺物

遺構の性格と時期　SD05 は、調査区中央に存在する東西方向の赤道に隣接する地点にあたることから里道の可能性も考えられたが、土層断面観察から道路遺構の痕跡は認められなかった。出土遺物から、16 世紀代後半に SD01 東西溝のほぼ直上に位置する区画溝と想定している。

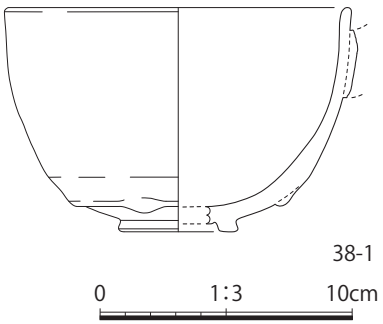
SD06（第 37 図）

規模と形態　SD06 は、調査区北東側の H3 グリッドに位置する標高 21.43m で検出した南北溝で、北側及び南側は調査区外へと続いている。検出した範囲での規模は長さ 5.50m、幅 1.40m、深さ 0.15 mを測る。素掘の溝で、主軸方位は N － 11°－ E である。断面形は浅い U 字状を呈する。溝底部は標高 21.28m でほぼ揃っており、高低差は認められない。埋土は黒褐色土 (第 1 層) の単層が堆積する。SD06 の上層には耕作土が厚く堆積し、溝の掘り込み面は削平されている。



第 37 図　SD06 平面図・断面図

SD06 出土遺物（第 38 図）　遺物は SD06 埋土から 1 点出土した。38-1 は在地陶器の布志名焼の片口である。欠損しているが、外面に把手が付いていたものか。内面および外面胴部下方にかけて緑釉が施釉される。19 世紀代に相当する。



第 38 図　SD06 出土遺物

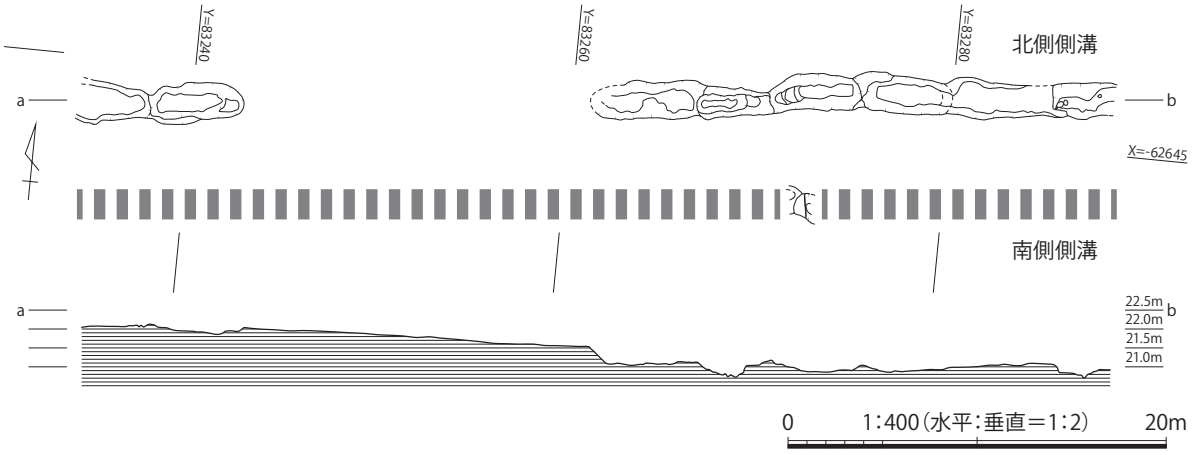
遺構の性格と時期　SD06 より東側では近世に属する建物や土坑は検出していないが、西側では後述する柵 SA01 を検出している。遺構の位置関係から、SD06 は近世屋敷地の境界となる区画溝と考えられる。SD06 の時期は、出土した陶器から 19 世紀代を想定している。

第 3 項　道路遺構

SF01（第 39 図）

SF01 は、調査区南側の E8 ～ J8 グリッドに位置する標高 21.10 ～ 22.30m で検出した東西道路で、西側及び東側は調査区外へと続いている。検出した範囲での規模は長さ 54.80m、幅 4.00m (側溝の心々距離は 6.60m) を測り、主軸方位は N － 85° － E である。SF01 の路面は、盛土によって平坦に造成されていたものと考えられるが、後世の削平を受けているため硬化面は確認できず、路面上で波板状凹凸面 (7) も検出していない。道路の南北には、東西方向に土坑がほぼ直線上に連続して掘られたような形状 (以下、連続土坑状の溝) で遺構を確認したことから、道路側溝と認定した。第 3 次調査では北側側溝を検出し、第 4 次調査では北側側溝から南へ 6m 離れた位置で南側側溝を検出した。

以下では、第 3 次調査で検出した SF01 北側側溝の詳細を述べる。

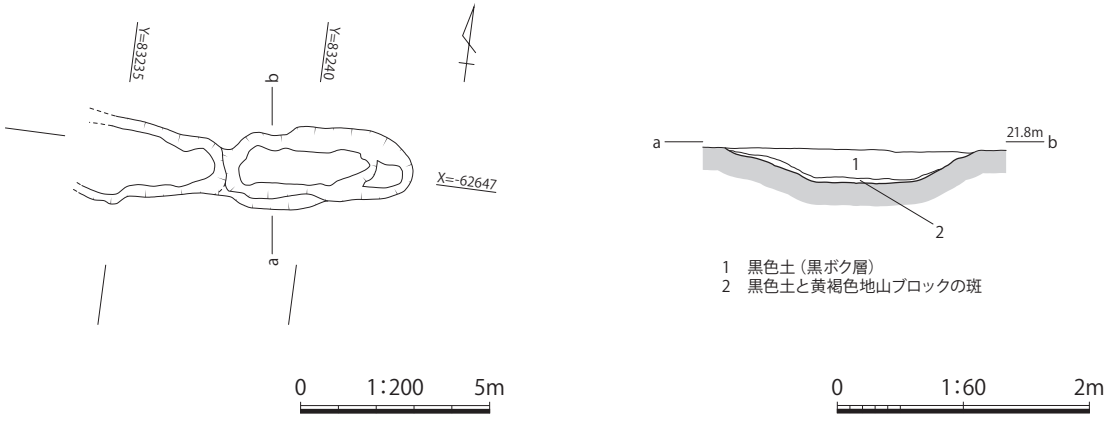


第 39 図　SF01 平面図・断面図

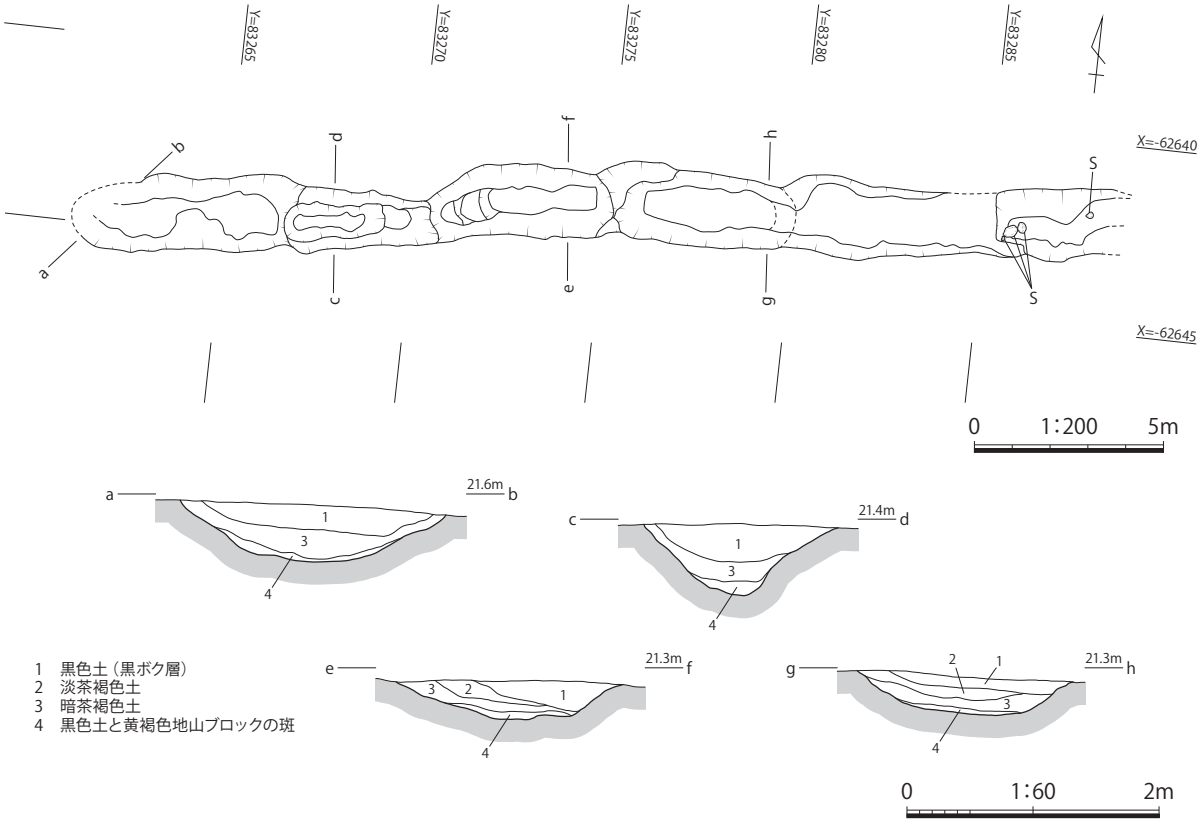
SF01 北側側溝（第 40・41 図）

規模と形態　SF01 北側側溝は、道路の北側に並走する東西溝で、西側及び東側は調査区外へと続いている。検出した範囲での規模は長さ 54.80m、幅 1.50 ～ 2.30m、深さ 0.30 ～ 0.56mを測る。検出プランは帯状をなすが、完掘後の平面形は土坑がほぼ直線上に並んで掘削された連続土坑状の溝であることが確認された。北側側溝には 18.30m に亘って陸橋状に途切れている部分があり、この途切れ部分を挟んで西側に 2 基の土坑が、東側に 6 基の土坑が連続して掘られている状況を確認した。土坑 1 単位の規模は、長さ約 3.5 ～ 6.0m、幅約 1.5 ～ 2.3m、深さ約 0.3 ～ 0.5mを測り、平面形は小判形で断面形は U 字状を呈する。土坑底部は標高 20.88 ～ 22.08mで、断面 a-b 間 (第 39 図) で西側から東側へ向かって降る。

埋土は北側側溝 (西側) では上層から黒色土 (第 1 層)、黒色土と黄褐色地山ブロックの斑層が堆積し、北側側溝 (東側) では上層から黒色土 (第 1 層)、淡茶褐色土 (第 2 層)、暗茶褐色土 (第 3 層)、黒色土と黄褐色地山ブロックの斑層 (第 4 層) が堆積する。土質は硬く締まっており、土層断面では南側から北側に向かって埋まっていった状況が観察された。なお、側溝の掘り込み面は SF01 の路面と同様に後世の削平を受けており、上層から掘り込まれた遺構の底部を図示している可能性がある。

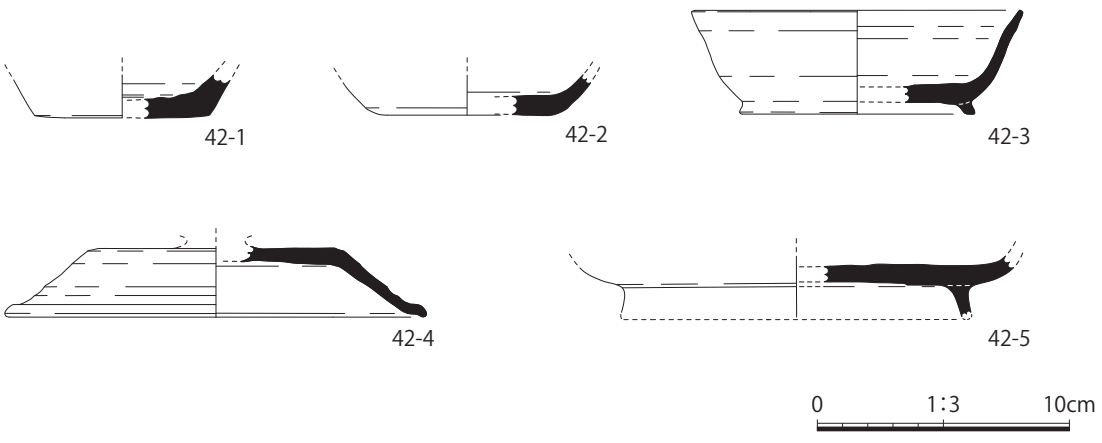


第 40 図　SF01 北側側溝 (西側) 平面図・断面図



第 41 図　SF01 北側側溝 (東側) 平面図・断面図

SF01 北側側溝出土遺物（第 42 図）　遺物は SF01 北側側溝埋土の上層である第 1 層の黒色土から須恵器が出土した。42-1 は壺の底部、42-2 は無高台坏の底部である。42-2 は口縁部までの立ち上がりが分からないが、体部の丸い無高台坏 A と考えられる。42-3 は高台付坏である。高台が付き、底部から体部が直線的に立ち上がる坏Ⅱ B 類 B2 型式に属する。42-4 は蓋坏の蓋である。つまみ部分は欠損しているが、宝珠状のつまみが付くものと思われる。口縁部は下方に外傾して屈折する。42-5 は高台付皿で、底部～高台部分のみ残存する。高台は高く、ハの字状を呈する。いずれも出雲国府第 4 型式、8 世紀第 3 ～ 4 四半期に相当する。



第 42 図　SF01 北側側溝出土遺物

遺構の性格と時期　SF01 北側側溝は陸橋状部分で途切れるが、東西の各溝はいずれも連続土坑状の溝であり、埋土もおおよそ同一であることから一連のものと考えられる。また、第 3 章で先述した T10 トレンチの SF01 南側側溝も、一部ではあるが掘り込みが重なる部分が検出されており、連続土坑状の溝と考えられる。

素掘溝は、平面形が帯状をなし、一定の深さに掘削され縦断面の底面ラインがほぼ直線状をなすのが一般的であるが、導水を目的としない官衙施設の区画溝や官道側溝などには、土坑がほぼ直線状に連続して掘られたような形状を呈し、縦断面の底面ラインに凸凹のある例が少なくない[(8)]。今回検出した連続土坑状の溝は、土坑 1 単位の規模が長さ約 3.5 ～ 6.0m、幅約 1.5 ～ 2.3m、深さ約 0.3 ～ 0.5mを測り、この単位は掘削の作業単位を示すものと捉えられる。形状から排水機能を目的とせず、土取りなどを兼ねながら道幅を画定するために掘削された道路側溝と考えられる。

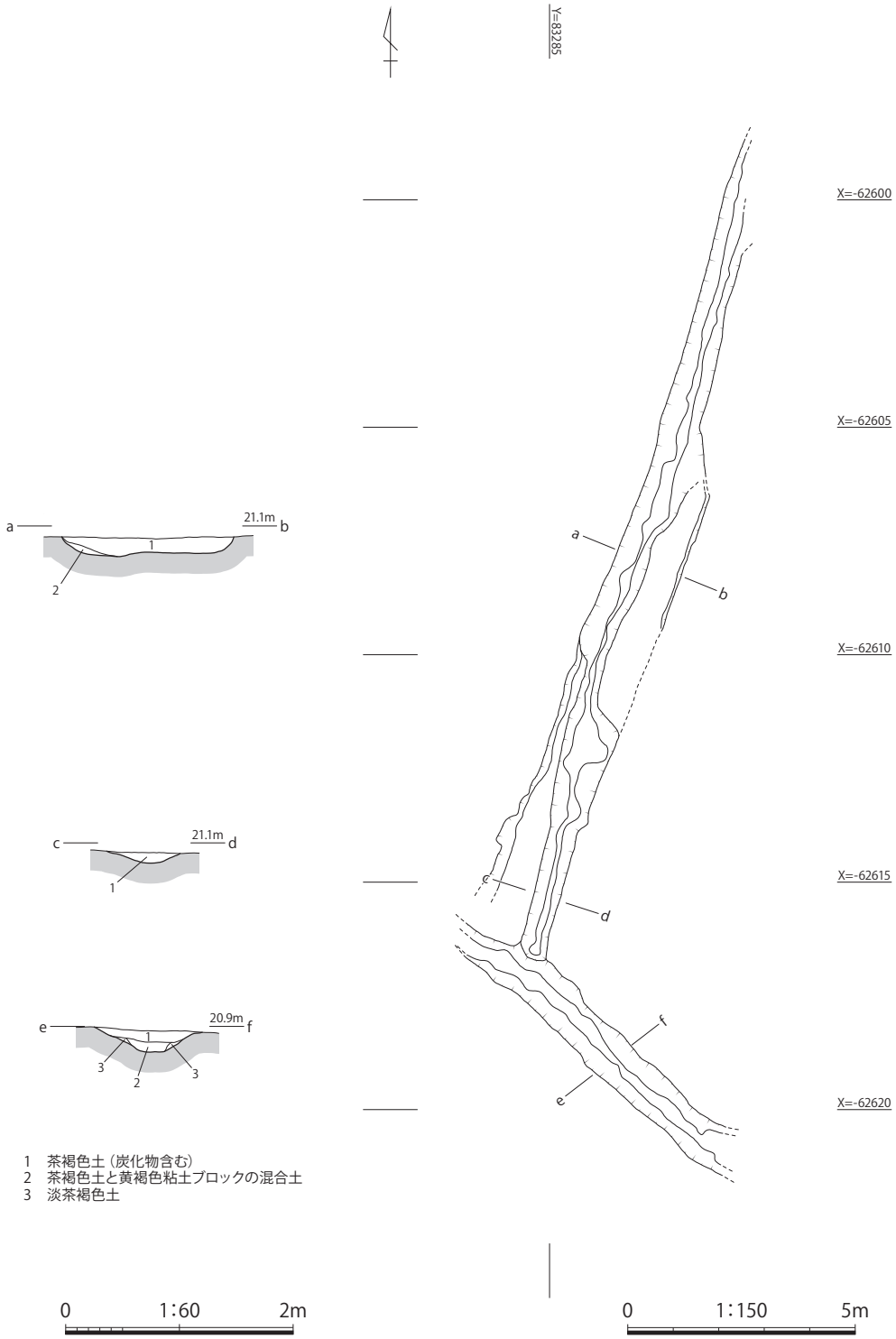
遺構の性格は、SF01 をまとめると道路幅員が 4.00mで、道路の両側に連続土坑状の側溝を備えた東西道路と考えられる。SF01 は、正西道推定地から検出されたものではあるが、古代道の道路幅員は概ね 6.00 ～ 12.00mとなることから[(9)]、SF01 を正西道とするには規模が小さく、これが正西道だった可能性は低いものと考えている。なお、調査指導では、正西道と並走する道路のひとつであろうとの評価を得ている[(10)]。SF01 の時期は、出土した須恵器から 8 世紀代中頃～後半を想定しているが、側溝の埋土上層から出土しているため下限を示すものと考えられる。

SF02（第 43 図）

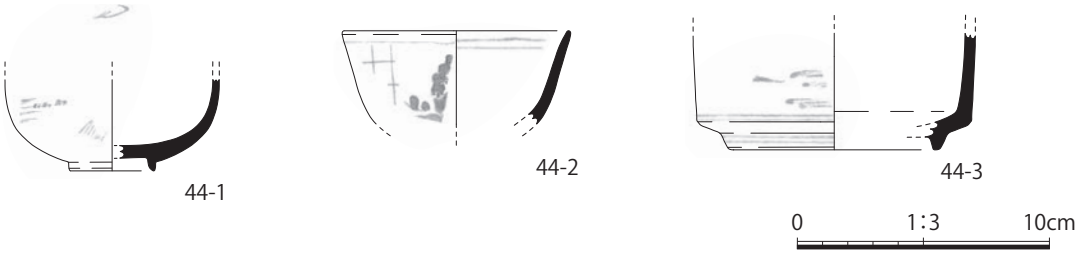
規模と形態　SF02 は、調査区東側の J4 ～ J6 グリッドに位置する標高 20.78 ～ 21.05mで検出した道跡で、北東側及び北西・南東側は調査区外へと続いている。北東－南西方向へ向かって直線的に延びる道と、北西－南東方向へ向かって直線的に延びる道を検出し、J5 グリッド内に 2 つの道の分岐点が位置する。検出した範囲での規模は北東－南西方向の道は長さ 18.25m、幅 0.70 ～ 1.50m、深さ 0.25 ～ 0.30mを測り、主軸方位は N － 18° － E である。北西－南東方向の道は長さ 7.80m、幅 0.95 m、深さ 0.20mを測り、主軸方位は E － 38° － S である。断面形は浅い窪み状を呈しており、埋土は茶褐色土 (第 1 層) を主体とし、下層に茶褐色土と黄褐色粘土ブロックの混合土 (第 2 層) や淡茶褐色土 (第 3 層) が堆積する部分も認められる。

SF02 出土遺物（第 44 図）　遺物は SF02 埋土の上層から陶磁器・土師器・瓦が出土したが細片のものが多く、その中から実測可能なものを抽出して掲載した。44-1 ～ 3 は肥前磁器の碗である。44-1 は丸形碗で、外面に草花文を施す。44-2 は無稜杉形碗で、口縁部内面に二重圏線、外面に山水文を施す。44-3 は半筒碗で、外面に流水文を施す。いずれも九陶編年Ⅴ期 (1780 ～ 1860 年代) に相当する。

遺構の性格と時期　SF02 の北東－南西方向の道は、明治 8 年の切図の記載にある「東淵寺堂敷」の字境にあたることから、東淵寺堂敷西側の字境から北側の東淵寺へと続く里道の可能性が考えられる。北西－南東方向の道は、若干の時期差はあるものの切図に記載されている赤道とほぼ重複する位置にあたることから、切図よりも古い時期の里道と捉えられる (第 68 図)。SF02 の時期は、出土した陶磁器から概ね 19 世紀代を想定している。



第 43 図　SF02 平面図・断面図



第 44 図　SF02 出土遺物

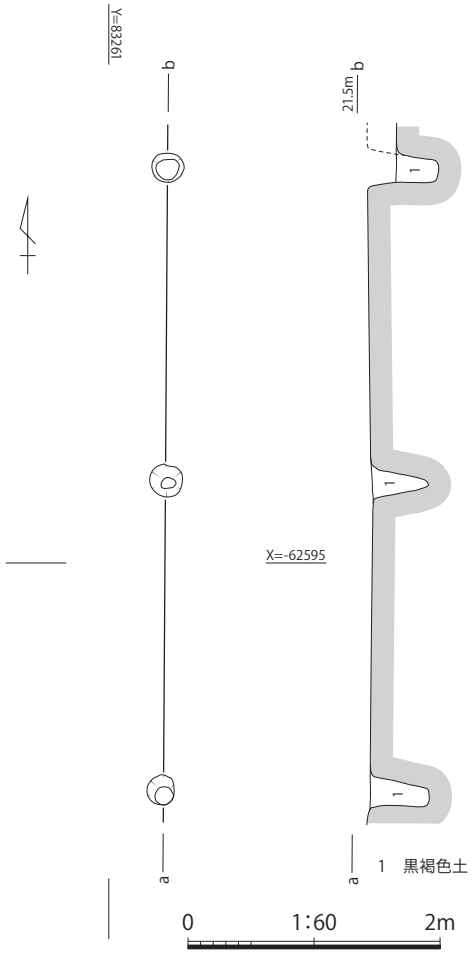
第 4 項　柵

SA01（第 45 図）

規模と形態　SA01 は、調査区北側の H3 グリッドに位置し、標高 21.35m で南北方向に一直線に配置された柱穴列を検出したことから柵とした。北側及び南側は調査区外へと続く様相を示す。検出した範囲での規模は 5.20 m、主軸は南北方向でＮ－ 0°－ E を示す。

検出した柱穴は 3 基あり、平面形は円形を呈し、規模は径 0.20 ～ 0.25m、深さ 0.40 ～ 0.50m を測る。柱間距離は 2.50m の等距離を測る。埋土は黒褐色土 (第 1 層) の単層が堆積する。いずれも柱穴断面では柱痕が確認できず、遺物は出土していない。

遺構の性格と時期　柱穴から遺物は出土していないが、SA01 の東側に位置する SD06 と近接し、かつどちらも南北軸を指向している点から見て、SD06 と密接な関係を持ちつつ機能していた遺構である可能性が高いと思われる。SD06 を屋敷地の区画溝と捉えた場合、SA01 はその区画溝から 5.5m 西側に位置する遮蔽施設と考えられる。SA01 の時期は、近世に属する遺構と考えるが明確な時期は定かではない。



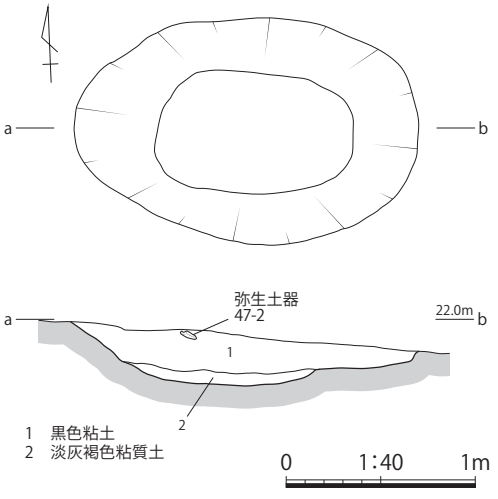
第 45 図　SA01 平面図・断面図

第 5 項　土坑・墓壙

SK01（第 46 図）

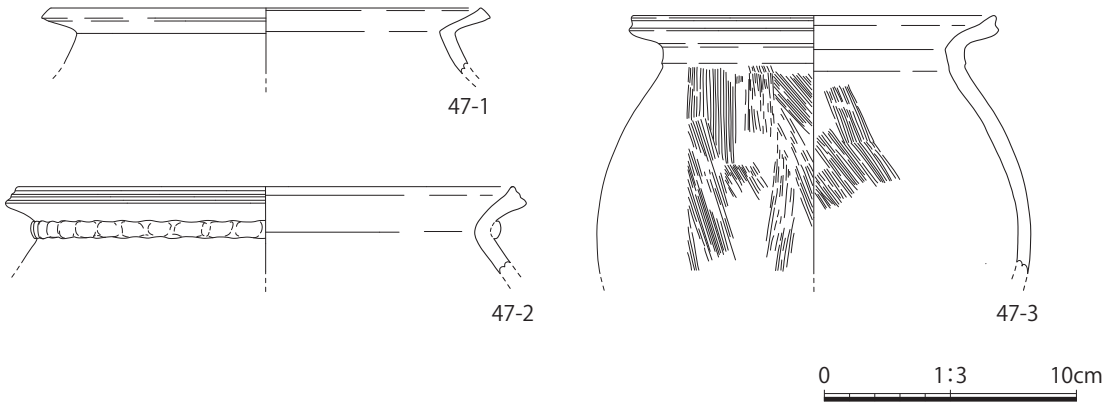
規模と形態　SK01 は、調査区北側の F3 グリッドに位置する標高 21.87m で検出した土坑で、平面形は楕円形を呈する。規模は長径 1.84m、短径 1.20 m を測る。断面形は浅い皿状を呈し、深さ 0.36m を測る。埋土は上層から黒色粘土 (第 1 層)、淡灰褐色粘質土 (第 2 層) が堆積する。上層の黒色粘土から遺物が出土している。

SK01 出土遺物（第 47 図）　遺物は SK01 埋土の黒色粘土から弥生土器が出土した。47-1 は口縁部がくの字に屈曲する甕の口縁部～頸部である。内外面の調整は風化のため定かではない。47-2 は甕の口縁部～頸部である。口縁端部に 2 条の凹線文、頸部に指



第 46 図　SK01 平面図・断面図

頭圧痕文帯を施す。47-3 は甕の口縁部～胴部である。口縁端部に 1 条の凹線文を施し、肩部から胴部にかけて内外面に縦方向のハケメを施す。いずれも弥生時代中期、松本Ⅲ -2 様式に相当する。



第 47 図　SK01 出土遺物

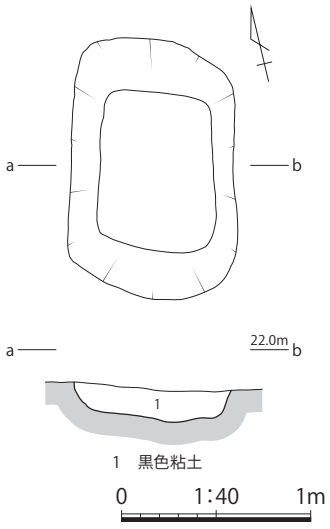
遺構の性格と時期　埋土から多数の弥生土器片が散在して出土していることから、廃棄土坑の可能性が考えられる。SK01 の時期は、出土した弥生土器から弥生時代中期を想定している。

SK02（第 48 図）

規模と形態　SK02 は、調査区北側の F3 グリッドに位置する標高 21.82m で検出した土坑で、平面形は隅丸方形を呈する。規模は長径 1.38m、短径 0.75m を測る。断面形は逆台形を呈し、深さ 0.21 m を測る。埋土は黒色粘土 (第 1 層) の単層が堆積する。黒色粘土から遺物が出土している。

SK02 出土遺物　遺物は SK02 埋土の黒色粘土から弥生土器が 5 点出土した。いずれも細片のため図化していないが、弥生時代中期、松本Ⅲ -2 様式に相当する。

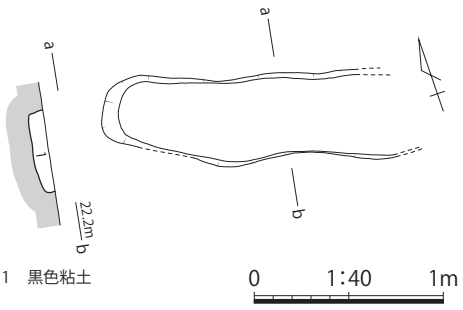
遺構の性格と時期　埋土から弥生土器が出土したが、遺構の性格は不明である。SK02 の時期は、出土した弥生土器から弥生時代中期を想定している。



第 48 図　SK02 平面図・断面図

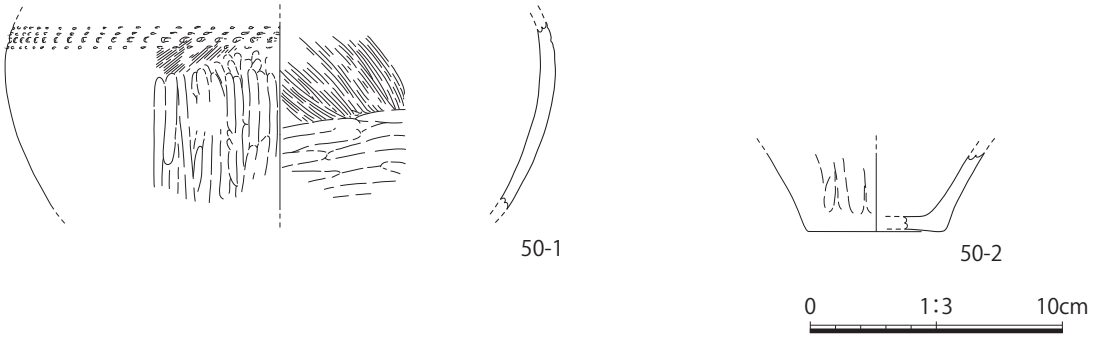
SK03（第 49 図）

規模と形態　SK03 は、調査区西側の E5 グリッドに位置する標高 22.10m で検出した土坑で、平面形は長楕円形を呈する。検出は 2/3 程度で、東側は調査区外へと続いている。検出した範囲での規模は長径 1.50m、短径 0.43m を測る。断面形は浅い皿状を呈し、深さ 0.15m を測る。埋土は黒色粘土 (第 1 層) の単層が堆積する。土坑底面から遺物が出土した。



第 49 図　SK03 平面図・断面図

SK03 出土遺物（第 50 図）　遺物は SK03 埋土の黒色粘土から弥生土器が出土した。50-1 は甕の胴部である。外面の胴部最大径付近に 1 列の列点文をめぐらし、その下方に縦方向のミガキを施す。内面はハケメ調整後に丁寧な横方向のミガキを施す。50-2 は甕の底部である。外面に縦方向のミガキを施す。いずれも弥生時代中期、松本Ⅲ -2 ～Ⅳ -1 様式に相当する。



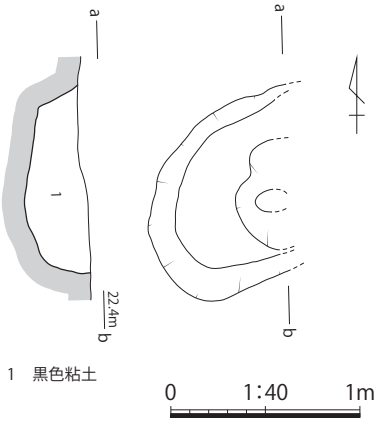
第 50 図　SK03 出土遺物

遺構の性格と時期　埋土から弥生土器が出土したが、遺構の性格は不明である。SK03 の時期は、出土した弥生土器から弥生時代中期を想定している。

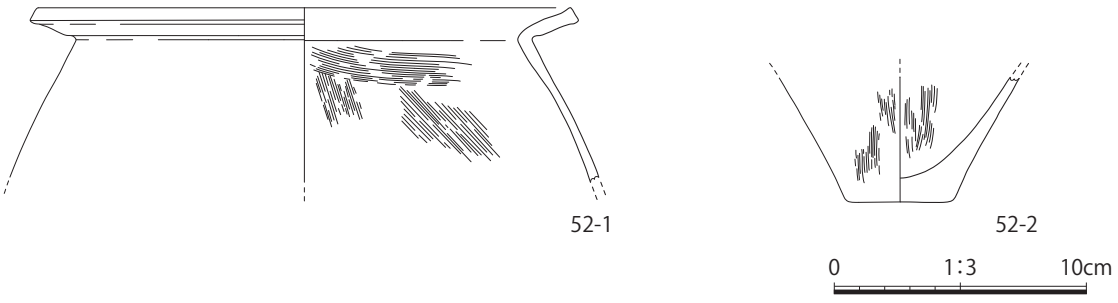
SK04（第 51 図）

規模と形態　SK04 は、調査区南西側の E7 グリッドに位置する標高 22.23mで検出した土坑で、平面形は楕円形を呈する。検出は 2/3 程度で、東側は調査区外へと続いている。検出した範囲での規模は長径 0.80m、短径 0.95mを測る。断面形は逆台形を呈し、深さ 0.24mを測る。埋土は黒色土 (第 1 層) の単層が堆積する。黒色粘土から遺物が出土している。

SK04 出土遺物（第 52 図）　遺物は SK04 埋土の黒色土から弥生土器が出土した。52-1 は口縁部がくの字に屈曲する甕の口縁部～胴部である。肩部から胴部にかけて内面にハケメを施す。52-2 は甕の底部である。内外面に縦方向のハケメを施す。いずれも弥生時代中期、松本Ⅲ -2 ～Ⅳ -1 様式に相当する。



第 51 図　SK04 平面図・断面図

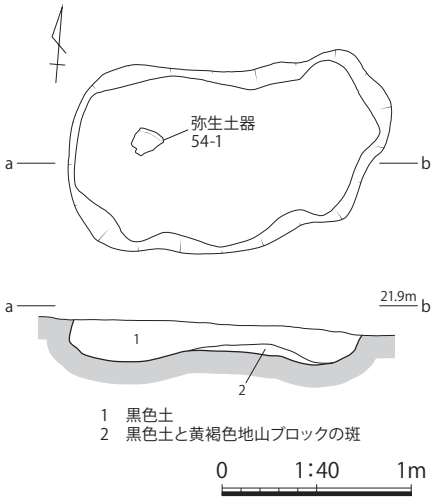


第 52 図　SK04 出土遺物

遺構の性格と時期　埋土から弥生土器が出土したが、遺構の性格は不明である。SK04 の時期は、出土した弥生土器から弥生時代中期を想定している。

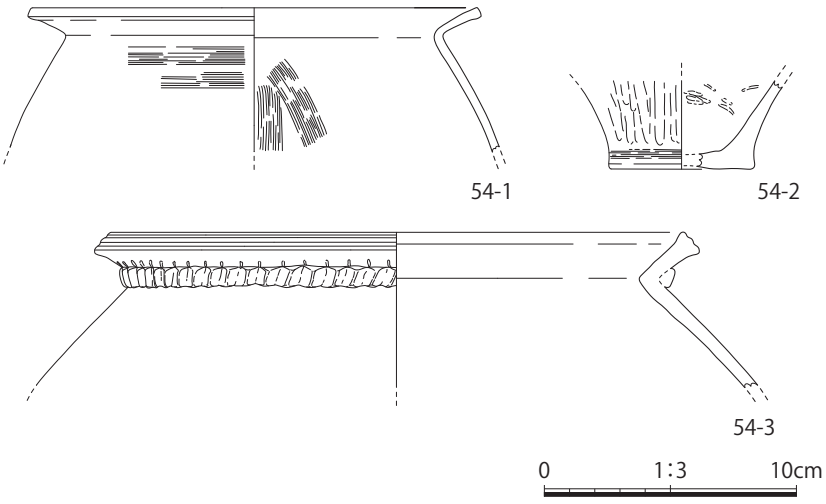
SK05（第 53 図）

規模と形態　SK05 は、調査区南側の G8 グリッドに位置する標高 21.75mで検出した土坑で、平面形は楕円形を呈する。規模は長径 1.65m、短径 0.95mを測る。断面形は盃状を呈し、深さ 0.17mを測る。埋土は黒色土 (第 1 層)、黒色土と黄褐色地山ブロックの斑層 (第 2 層) が堆積する。黒色土から遺物が出土している。



第 53 図　SK05 平面図・断面図

SK05 出土遺物（第 54 図）　遺物は SK05 埋土の黒色土から弥生土器が出土した。54-1 は口縁部がくの字に屈曲する甕の口縁部～胴部である。外面肩部付近に横方向のハケメ、内面肩部から胴部にかけて縦方向のハケメを施す。54-2 は甕の底部である。外面に縦方向のミガキを施す。54-3 は甕の口縁部～頸部である。口縁端部に 2 条の凹線文、頸部に指頭圧痕文帯を施す。指頭圧痕文帯の上方に刻目をもつ。いずれも弥生時代中期、松本Ⅲ -2 ～Ⅳ -1 様式に相当する。



第 54 図　SK05 出土遺物

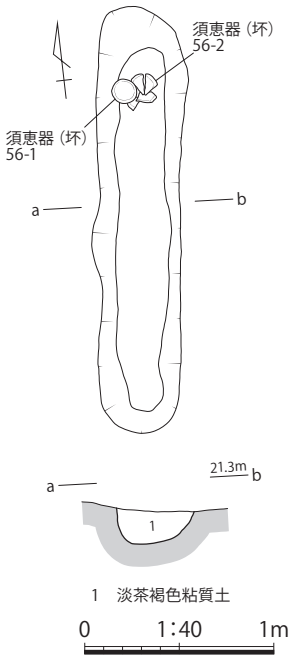
遺構の性格と時期　埋土から弥生土器が出土したが、遺構の性格は不明である。SK05 の時期は、出土した弥生土器から弥生時代中期を想定している。

SK06（第 55 図）

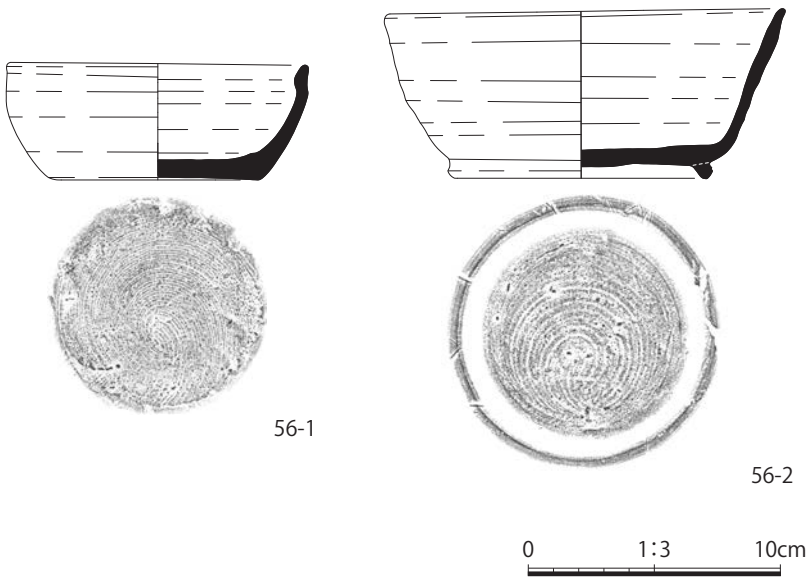
規模と形態　SK06 は、調査区北東側の J3 グリッドに位置する標高 21.15mで検出した土壙で、平面形は長楕円形を呈する。規模は長径 2.25m、短径 0.46mを測る。断面形は U 字形を呈し、深さ 0.23mを測る。深さが浅いため、土壙上部は削平されている可能性がある。埋土は淡茶褐色粘質土 (第 1 層) の単層が堆積する。

SK06 出土遺物（第 56 図）　遺物は SK06 埋土の淡茶褐色粘質土から須恵器の坏が 2 点出土し、土壙北側で正位に重なった状態で検出した。56-1 は無高台坏である。底部から体部が緩やかに内湾気味に

ち上がり、口縁部をやや肥厚させ、底部外面に回転糸切り痕をもつ。坏Ⅰ類 A5 型式に属する。56-2 は坏である。高台が付き、底部から体部が直線的に立ち上がる坏Ⅱ B 類 B2 型式に属する。いずれも出雲国府第 3 型式、8 世紀第 2 四半期に相当する。



第 55 図　SK06 平面図・断面図



第 56 図　SK06 出土遺物

遺構の性格と時期　埋土から出土した 2 点の須恵器がほぼ完形で土壙北側で上下に重なり合う状態で検出している。須恵器以外に人骨等は確認していないが、土壙の形状や遺物の出土状況から土壙墓の可能性が考えられる。SK06 の時期は、出土した須恵器から 8 世紀代前半～中頃を想定している。

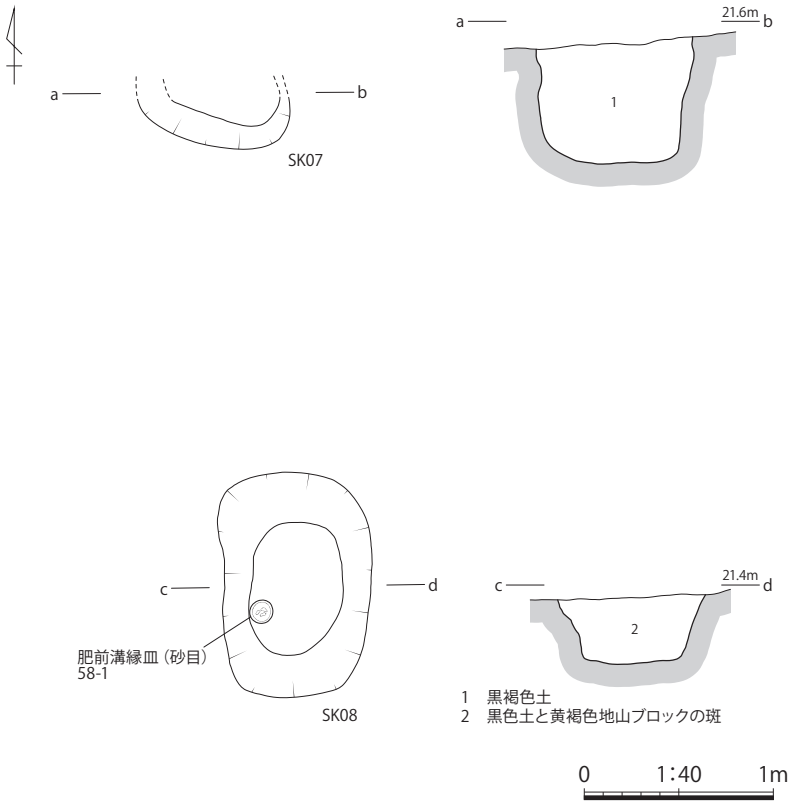
SK07・08（第 57 図）

規模と形態　SK07・08 は、調査区北側の H3 グリッドに位置する土壙である。この 2 つの土壙は遺構配置が近接していることから一連の遺構と考えられるため、ここでは一括して取り扱う。

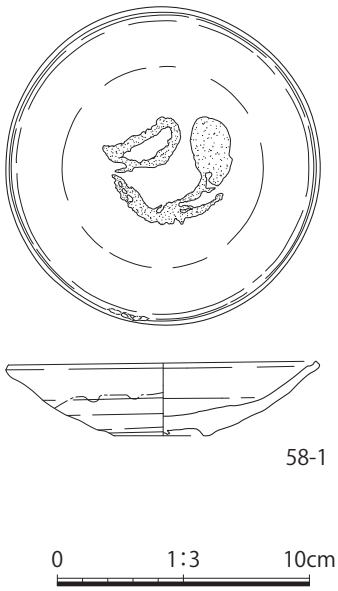
SK07 は標高 21.56m で検出し、平面検出は 2/3 程度で、北側は調査区外へと続いている。検出した範囲での規模は長径未検出、短径 0.80m を測る。断面形は逆台形を呈し、深さ 0.60m を測る。埋土は黒褐色土 (第 1 層) の単層が堆積する。

SK08 は標高 21.34m で検出し、平面形は隅丸方形を呈する。規模は長径 1.20m、短径 0.78m を測る。断面形は逆台形を呈し、深さ 0.38m を測る。SK07 と比べて深さが浅いため、土壙上部は削平されているものと考えられる。埋土は黒色土と黄褐色地山ブロックの斑 (第 2 層) の単層が堆積する。

SK08 出土遺物（第 58 図）　遺物は SK07 からは出土せず、SK08 の底面から陶器が 1 点出土した。58-1 は肥前陶器の溝縁皿である。高台から斜め上方に向けて体部が延び、そのまま口縁部に至り、口唇部に溝を廻らす。高台脇と高台のケズリはシャープさに欠け、明瞭ではない。見込に 3 箇所の砂目痕をもち、内外面に灰釉を施す。九陶編年Ⅱ期 (1610 ～ 50 年代) に相当する。



第 57 図　SK07・08 平面図・断面図



第 58 図　SK08 出土遺物

遺構の性格と時期　遺構の性格は出土した陶器以外に人骨や銭貨等は確認していないが、土坑の形状や遺物の出土状況から土壙墓の可能性が考えられる。SK08 の時期は、出土した陶器から 17 世紀代前半を想定している。なお、SK08 の北側で検出した SK07 についても出土遺物はないが、断面形が逆台形で埋土の土質が似ているという理由から同時期の土壙墓と考えている。

表 2　SK01 ～ 08 一覧

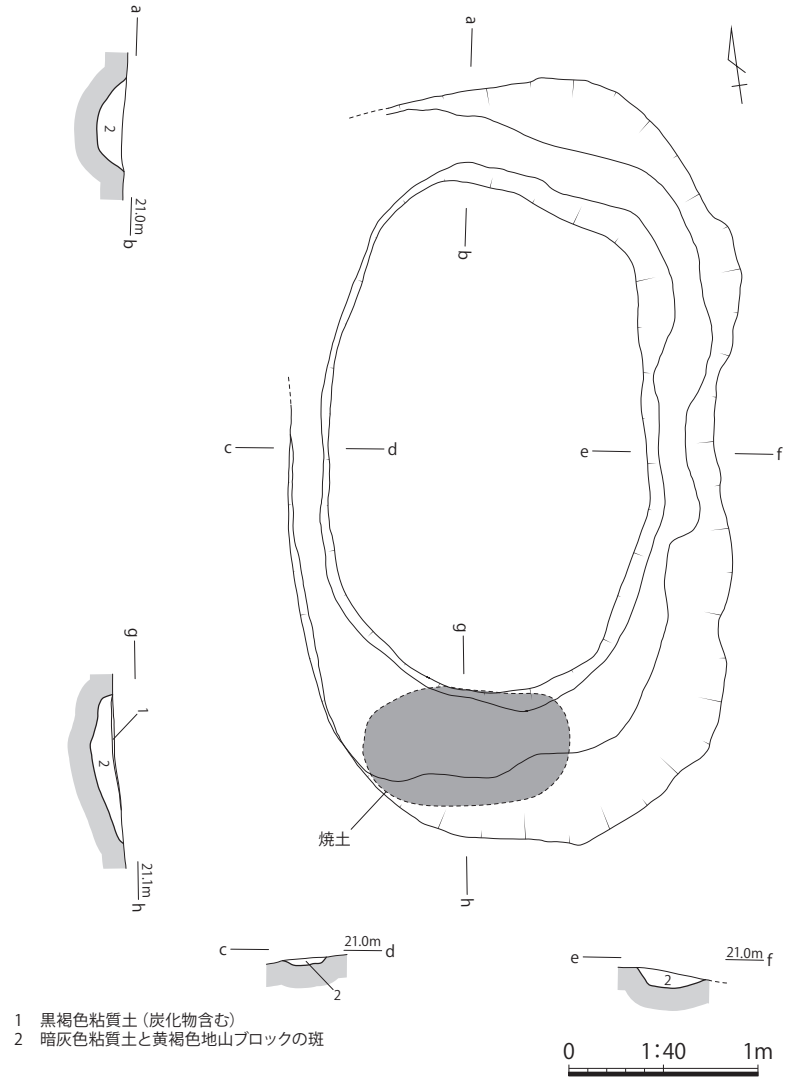
遺構名	検出規模			主軸の配置	平面形態	構造	床面形態	時期	出土遺物
	長径（m）	短径（m）	深さ（m）						
SK01	1.84	1.20	0.36	東西	楕円形	1 段掘	平坦	弥生時代中期	弥生土器
SK02	1.38	0.75	0.21	南北	隅丸方形	1 段掘	平坦	弥生時代中期	弥生土器
SK03	1.50	0.43	0.15	東西	長楕円形	1 段掘	平坦	弥生時代中期	弥生土器
SK04	0.80	0.95	0.24	東西	楕円形	2 段掘	凹凸面	弥生時代中期	弥生土器
SK05	1.65	0.95	0.17	東西	楕円形	1 段掘	平坦	弥生時代中期	弥生土器
SK06	2.25	0.46	0.23	南北	長楕円形	1 段掘	平坦	古代	須恵器
SK07	—	0.80	0.62	南北	隅丸方形	—	—	近世	—
SK08	1.20	0.78	0.38	南北	隅丸方形	1 段掘	平坦	近世	肥前陶器

第 6 項　その他の遺構

SX01（第 59 図）

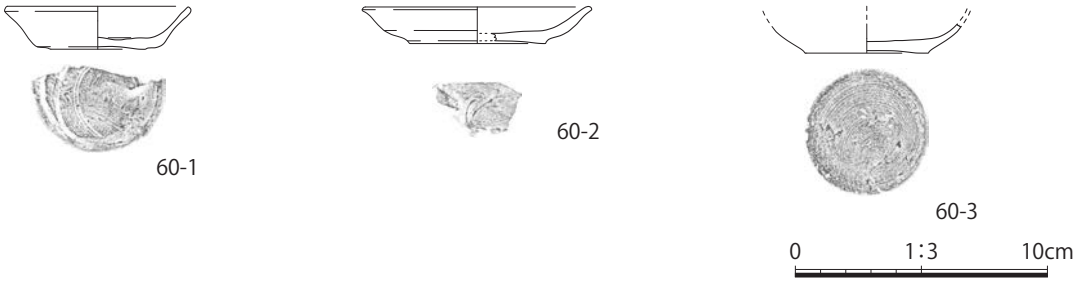
規模と形態　SX01 は、調査区東側の J5 グリッドに位置する標高 21.00m で検出した遺構で、平面形は楕円形を呈す。中央にマウンド状の高まりをもち、その外周に溝を廻らしている。

マウンドの規模は長径 2.80m、短径 1.70m を測る。溝は幅 0.20 ～ 0.75m で断面形は U 字状を呈し、深さ 0.10 ～ 0.15m を測る。SX01 の南側では東西 1.10m、南北 0.62m の範囲で焼土プランを検出している。焼土は黒褐色粘質土 (第 1 層) で炭化物を多く含むが、焼土の範囲内で遺物は出土していない。溝の埋土は暗灰色粘質土と黄褐色地山ブロックの斑層 (第 2 層) が堆積する。



第 59 図　SX01 平面図・断面図

SX01 出土遺物（第 60 図）　遺物は SX01 の溝埋土から陶磁器片と近世土師器が 3 点出土したが、陶磁器片は小片のため図化していない。60-1 ～ 3 は土師器皿で、底部外面に糸切り痕をもつ。底部から口縁部にかけて器壁が薄く、精緻なつくりである。土師器皿は 19 世紀代の陶磁器片と共伴して出土していることから、いずれも 19 世紀代に相当するものと考えられる。



第 60 図　SX01 出土遺物

遺構の性格と時期　SX01 の直上には、首のない石仏が 2 体所在していた。石仏は凝灰岩製で、東向き (東淵寺古墳の方向) に置かれていた。明治時代初期の廃仏毀釈によって首を破壊されたもので、東淵寺に関わる石仏と考えられる[(11)]。SX01 はこの石仏に伴う遺構と考えられ、出土した土師器皿等は石仏に供えられていたものと捉えている。SX01 の時期は、出土遺物から 19 世紀代を想定している。

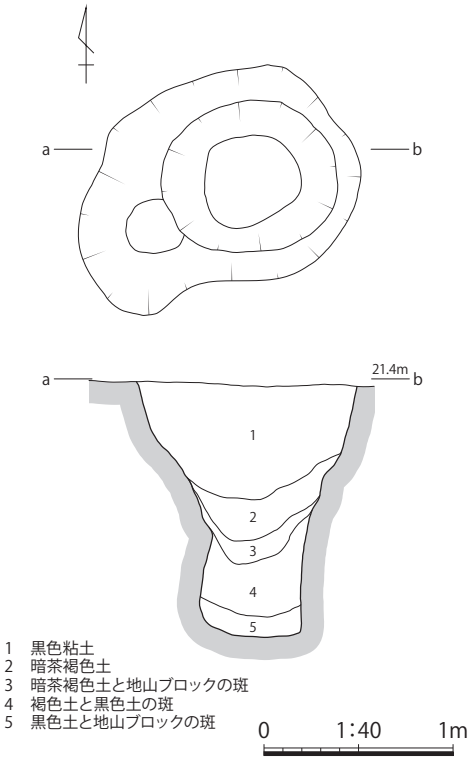
写真 5　東淵寺古墳付近所在の石仏 (東から)

SX02（第 61 図）

規模と形態　SX02 は、調査区北側の G3 グリッドに位置する標高 21.37m で検出した遺構で、平面形は歪んだ円形を呈する。規模は長径 1.42m、短径 1.10m を測る。断面形は逆台形を呈し、深さ 1.35m を測る。埋土は上層から黒色粘土 (第 1 層)、暗茶褐色土 (第 2 層)、暗茶褐色土と地山ブロックの斑 (第 3 層)、褐色土と黒色土の斑 (第 4 層)、黒色土と地山ブロックの斑 (第 5 層) が堆積する。遺物は出土していない。

遺構の性格と時期　遺構の形状から井戸の可能性が考えられる。

埋土の状況から人為的に埋め戻されているものと捉えられるが、出土遺物もなく、明確な遺構の性格と時期は不明である。



第 61 図　SX02 平面図・断面図

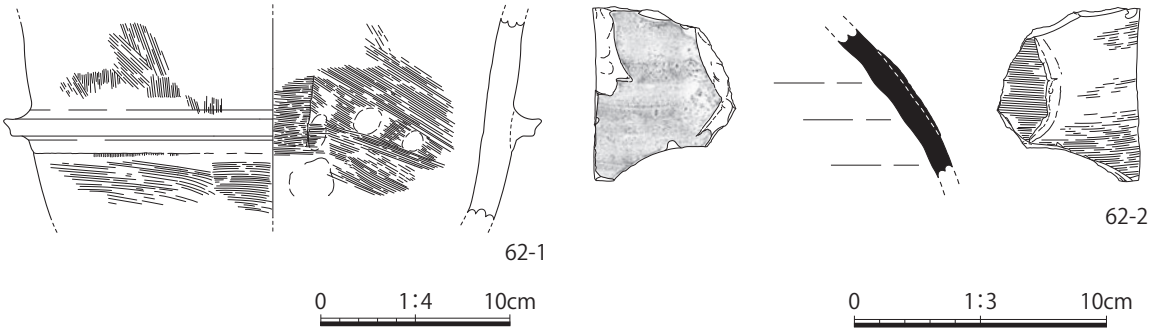
第 7 項　その他の遺物

東淵寺古墳関係遺物（第 62 図）

今回の調査では古墳時代に関わる遺構は検出していないが、東淵寺古墳に伴うものと考えられる遺物が 2 点出土しているため、ここでは東淵寺古墳関係遺物として報告する。

62-1 は東淵寺古墳の西側に近接する K5 ～ L5 グリッド、第 1 次調査 T4 トレンチの土坑内から出土した円筒埴輪の破片である。突帯上方の外面にはタテハケ調整、下方にはヨコハケ調整を施す。内面はヨコハケ、ナナメハケ調整で仕上げている。突帯は断面 M 字状で、やや上向きである。

62-2 は東淵寺古墳の西側に位置する SF02 埋土から出土した須恵器子持壺の親壺肩部の小片である。陶磁器類と混在して出土したため、混入品と考えられる。焼成は良好で、胎土は白色粒子を微量に含む。外面は平行タタキを施し、肩部に別作りの子壺を貼り付けるものだが、子壺は欠損している。



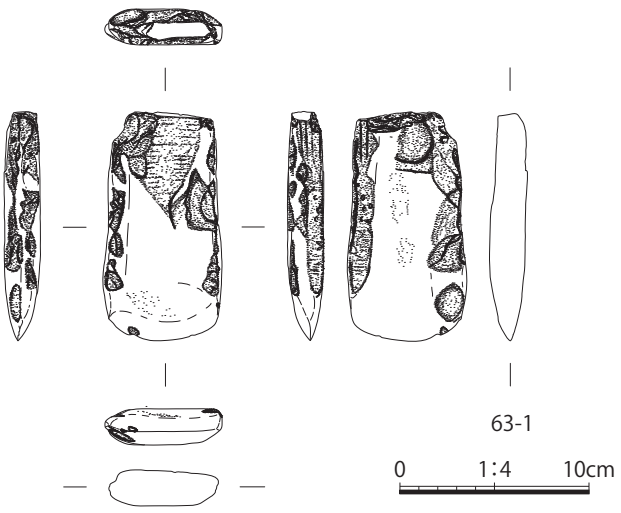
第 62 図　東淵寺古墳関係遺物

遺構外出土遺物（第 63 図）

63-1 は調査区南側、G8 グリッドに位置する SK05 付近の地山面直上から出土した蛤刃石斧である。

出土地点は標高 21.79ｍで、石斧は長さ 12.1㎝、幅 6.3㎝、厚さ 1.9㎝を測り、刃部～着柄部は丁寧な研磨によって作り出されている。

遺物の時期は、弥生時代中期に相当するものと考えられる。



第 63 図　遺構外出土遺物

註

(1)　漸移層は上下でグラデーション状に土色が変化している。地質的には連続するため、ここでは地山の一部と捉えている。
(2)　当地域における土師器皿の編年は確立していないが、出土した土師器皿については、口径に対し底径の比が大きく、口縁部の立ち上がりが短い特徴やその胎土や色調が、当地から南東へ 500m地点に位置する黒田畦遺跡から出土した土師器の特徴と一致する。この遺跡から出土した土師器については、他の遺物との共伴関係等から 13 ～ 14 世紀代の年代が与えられており (廣江 1998)、ここでもこの年代をあてた。
(3)　字名「東淵寺堂敷」は東淵寺に関わる施設の敷地と捉えている。また、雲陽誌には「寺内小堂あり」と記載されている。
(4)　切図に描かれている字名「東淵寺堂敷」の北側に位置する字名「東淵寺」を本堂と捉えている。
(5)　松江市まちづくり部史料編纂課　内田文恵氏のご教示による。「意宇郡寺社差図」とは、1774 年に描かれた意宇郡に所在する寺社の建物絵図である。これには東淵寺と東淵寺薬師堂の桁行や梁行が記載されており、東淵寺の主軸は南北で東向き、東淵寺薬師堂の主軸は南北で西向きであったことが分かる。
(6)　箱堀状の溝は、類例として下黒田遺跡で検出された SD04･07 がある。区画用の小溝で、時期は 8 世紀後半とされている。
(7)　波板状凹凸面とは、軟弱な路面を硬化させるための路面工事の痕跡で、道路遺構に直交する方向に円形や楕円形の窪みを掘り、きめの細かい砂質土などで填圧する工法である。形態が波板状に見えるため、このように呼称される。遺構の性格については、枕木やコロの痕跡、路床の改良、牛馬の歩行痕跡などいくつかの説が提示されている。
(8)　奈良文化財研究所　2003 年 『古代の官衙遺跡　Ⅰ遺構編　Ⅴ遮蔽・区画施設』による。これには、連続土坑状の溝の類例として、鳥取県伯耆国庁跡や鳥取県不入岡遺跡で検出された大溝の事例が挙げられている。
(9)　古代道 (駅路) は、幅が概ね 6 ～ 12mの直線道路であり、条里の基準線となっている例もある。また、全国的な事例では、郡衙と郡衙、郡衙と国府を繋ぐ官道も設置され、それにあたる直線的な道路も見つかっている。
(10) 島根大学法文学部教授　大橋泰夫氏のご教示による。
(11) 島根県教育委員会　2016 年 『魚見塚古墳･東淵寺古墳発掘調査報告書－松江市東部における古墳の調査 (2) －』による。

第 5 章　総括

大庭センターハイツ宅地造成工事に先立ち、トレンチ調査 (第 1・2・4 次調査) 及び本発掘調査 (第 3 次調査) を実施した。調査の結果、弥生時代中期から近世に至る遺構・遺物を確認した。

本章ではこれらの調査成果に基づき、第 1 節で現段階において判明した遺跡の変遷と様相を整理するとともに、第 2 節で古代の官衙遺構と古代山陰道 (正西道) を中心に若干の考察を行い、第 3 節で今後の課題を提起して総括としたい。

第 1 節　遺構の変遷と様相

(1) 検出遺構の概要

今回の調査で検出した遺構と出土遺物を時期別・種類別に表 3 にまとめた。網掛けは、濃い部分は遺構と遺物が認められるもの、薄い部分は遺構の種別は明確ではないが遺物が認められるものを示している。一見して、弥生時代中期、古代 (奈良時代～平安時代初期)、中世 (鎌倉時代～安土桃山時代)、近世 (江戸時代) の 4 時期にその中心があることが分かる。この 4 時期については、遺構の疎密があるが比較的まとまった遺構配置が確認できる。

しかし、遺跡を通じて弥生時代後期、古墳時代、飛鳥時代、平安時代前期～後期の遺構は明らかに欠落しており、この 4 時期には本遺跡は居住地として利用されず、集落は調査範囲外で営まれていた可能性が高いものと推察する。

表 3　外屋敷遺跡検出遺構・遺物一覧

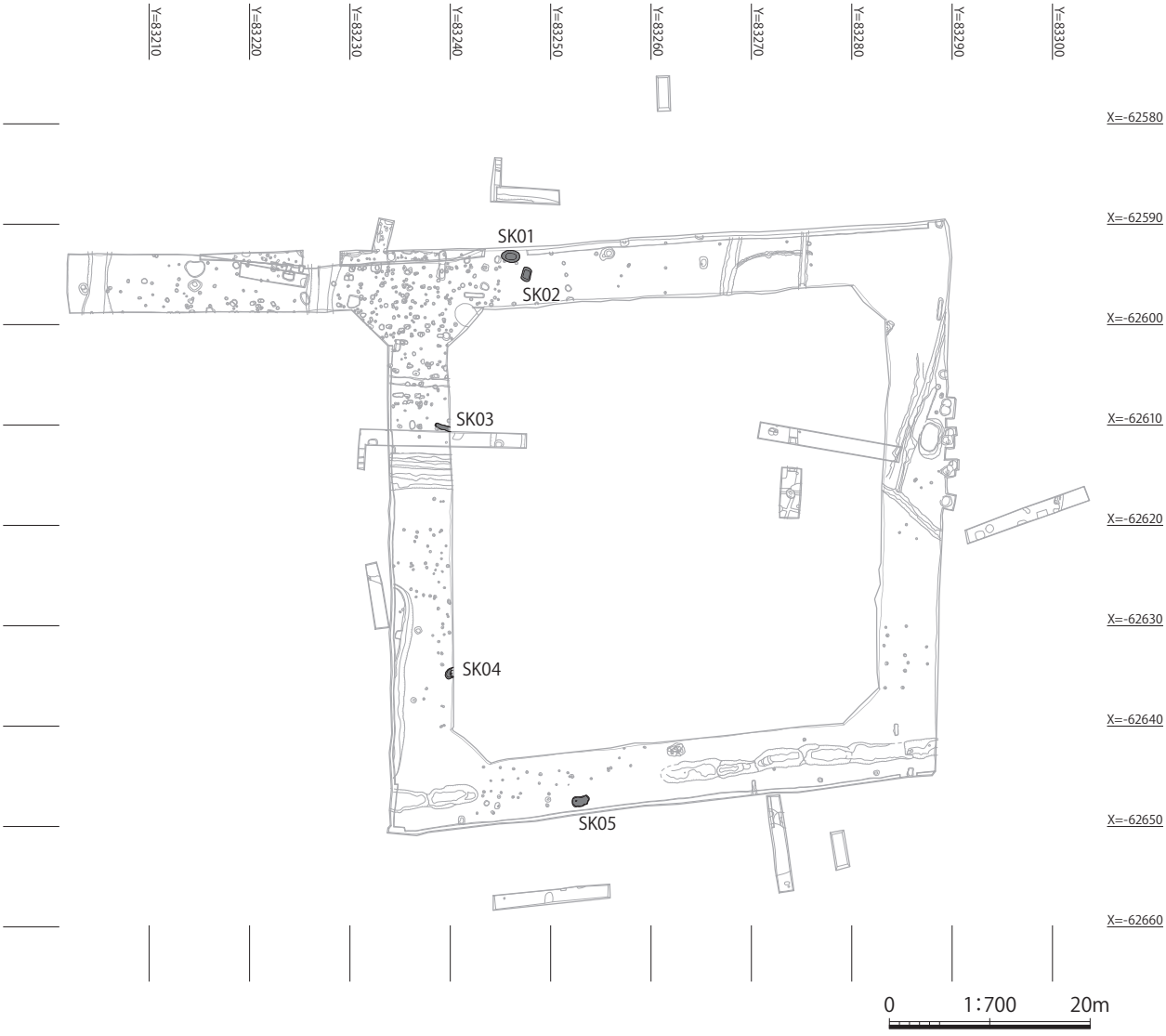
時期	建物 (SB)	溝 (SD)	土坑 (SK)	その他	出土遺物
弥生時代中期			SK01・02・03・04・05		弥生土器 蛤刃石斧
弥生時代後期					
古墳時代					円筒埴輪 須恵器子持壺
飛鳥時代					
奈良時代～平安時代初期 (8c ～ 8c 末)		SD01	SK06	SF01	須恵器
平安時代前期～後期 (9c ～ 12c 後半)					
鎌倉時代 (12c 末～ 14c 前半)	SB01・02・03・04・05・06	SD02・03	土坑群	柱穴群	中世陶磁器 中世土師器
室町時代～安土桃山時代 (14c 前半～ 16c)		SD04・05	土坑群	柱穴群	中世陶磁器 中世土師器
江戸時代 (17c ～ 19c 後半)	SB07	SD06	SK07・08	SF02、SA01 SX01	近世陶磁器 近世土師器

（2）弥生時代中期の様相（第 64 図）

外屋敷遺跡における弥生時代の遺構・遺物は概して希薄である。検出した弥生時代中期の土坑 SK01 ～ 05 は、今回調査した中では最も古い時期の遺構であり、本遺跡の上限を示している。当該期においてはわずかな遺構・遺物を検出したのみであるが、当遺跡形成の始点的位置を占める時期としての評価が可能である。

出土遺物は、弥生時代中期中葉～後葉以外のものは認められず、短期間に廃絶したことが考えられる。竪穴建物・掘立柱建物・加工段などの遺構は今回の調査では確認していないが、検出した土坑は点在していることから、付近に弥生時代中期の集落が営まれていたことを想定させるものである。

本遺跡で出土した弥生土器には甕・壺があり、弥生時代中期中葉～後葉 (松本Ⅲ -2 ～Ⅳ -1 様式) の時期に属する。鉢・高坏などは出土していない。器種別の出土割合は、甕が 7 割、壺が 3 割となっている。出土割合の高い甕に注目すると、口径 17 ～ 20㎝前後の中型品が最も多く、比較的大型のものでも口径 30㎝に満たない。文様は、口縁部の凹線文、頸部の指頭圧痕文帯、胴部の列点文を基本とする。弥生時代後期の遺構・遺物は認められず、途絶していた可能性が考えられる。



第 64 図　外屋敷遺跡　弥生時代中期の様相

（3）古墳時代の様相

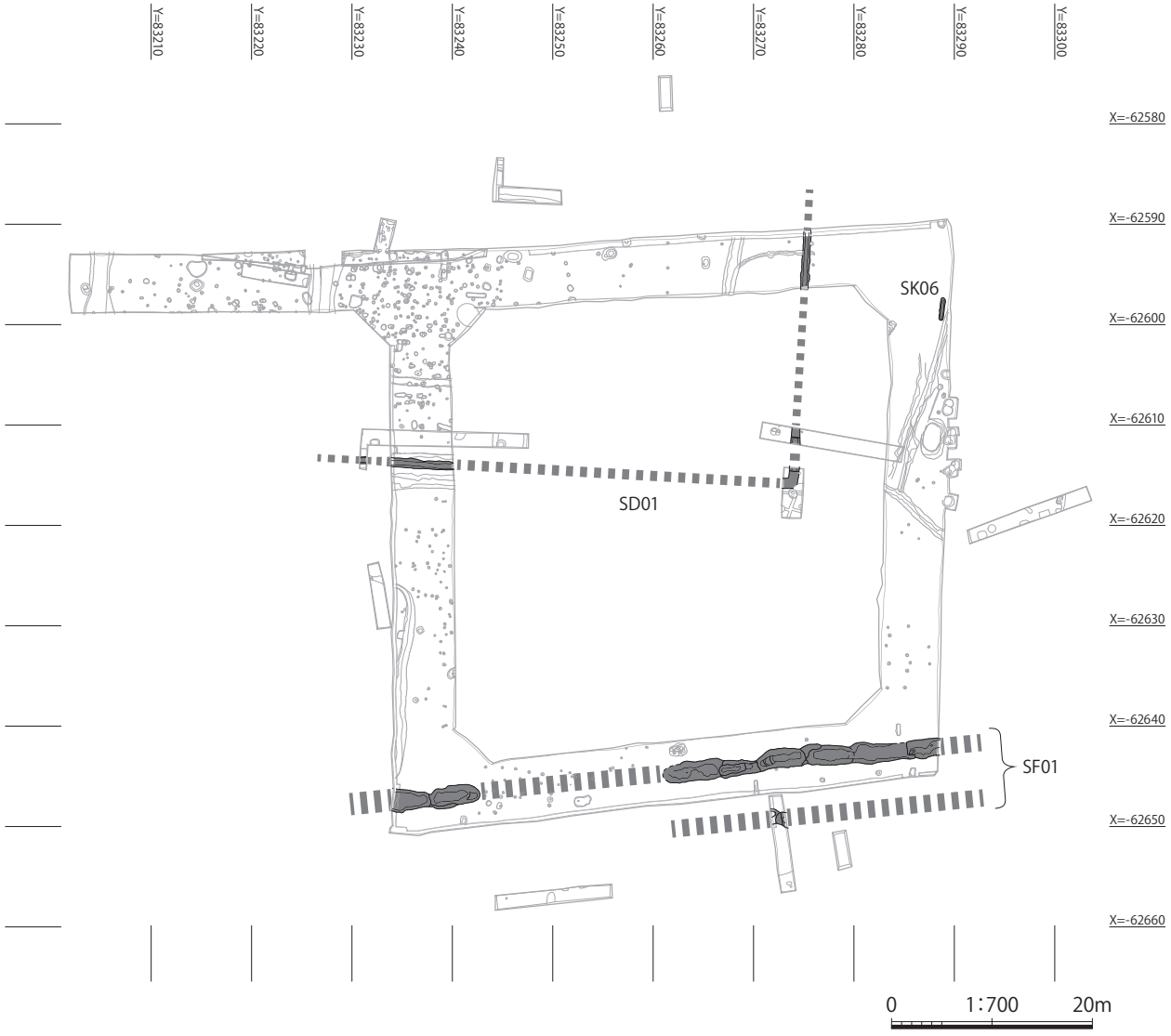
古墳時代に属する集落跡などの遺構は確認していないが、本遺跡は東淵寺古墳の西側に近接する位置にあたるため、特に古墳周辺の調査区東側では円筒埴輪 (62-1) や子持壺 (62-2) の小片が出土した。

東淵寺古墳は島根県教育委員会によって平成 23 ～ 26 年の 4 ヶ年に亘って調査が実施され、墳形形態や築造時期について詳細な検討がなされている。古墳の墳端、特に前方部については不明な点があり、また、今回の調査で当該期の集落は古墳の近くにはないことが分かったが、周辺のどの場所を居住域としていたのかという点が課題として残る。

（4）古代 (奈良時代～平安時代初期) の様相（第 65 図）

遺構・遺物がほとんど認められない古墳時代～飛鳥時代の空白期を挟み、奈良時代になると本遺跡において遺構・遺物が確認できるようになる。奈良時代～平安時代初期 (8 世紀代) に属する遺構として、区画溝 SD01、道路遺構 SF01、土壙 SK06 を検出している。

調査区北側～中央付近で検出した SD01 は、検出した範囲での規模は南北 25m、東西 45mで溝の



第 65 図　外屋敷遺跡　古代 (奈良時代～平安時代初期) の様相

掘方は箱堀状を呈し、幅 0.90 ～ 1.00m、深さ 0.50 ～ 0.60mを測る。遺構の性格は、官衙施設あるいは集落を取り囲む区画溝と考えられ、時期は出土した須恵器から 8 世紀代中頃～後半を想定している。SD01 の周辺では掘立柱建物などの遺構は確認していないが、遺構配置から居住域の南東限を区画し、その内側に当該期の官衙施設あるいは集落が営まれていたことを想定させるものである。

調査区南側で検出した SF01 は東西方向の道路で、両側に連続土坑状の掘方をもつ側溝を備えている。路面は後世の削平により残っておらず、波板状凹凸面は確認していない。出土遺物から、SF01 の時期は 8 世紀代中頃～後半を想定している。(区画溝 SD01 及び道路遺構 SF01 については本章第 2 節に詳述)

調査区北東側で検出した SK06 は、埋土から出土した 2 点の須恵器がほぼ完形で土壙北側で重なり合う状態で検出している。須恵器以外に人骨等は確認していないが、土壙の形状や遺物の出土状況から土壙墓の可能性が考えられる。SK06 の時期は、出土した須恵器から 8 世紀代前半～中頃を想定している。

(5) 中世 (鎌倉時代～安土桃山時代) の様相（第 66 図）

平安時代前期～後期にかけての遺構・遺物は存在せず、鎌倉時代になると再び本遺跡で集落が営まれるようになる。当該期は本遺跡で遺構が最も密に認められる時期であり、特に調査区北西側では柱穴や土坑などの遺構を多数検出している。

掘立柱建物跡は、調査区北西側で居住用建物と考えられる SB01 ～ 04、調査区東側で東淵寺に関わる施設と考えられる SB05・06 を検出した。個々の建物の年代について再度述べると、SB01 は柱穴の出土遺物から 12 世紀代後半～ 13 世紀代が想定され、当該期では最も古い建物に位置付けられる。SB02・03 は規格的に配置された同時期の建物の可能性が高く、柱穴の出土遺物から 13 ～ 14 世紀代を想定している。SB04 は桁行が等間隔ではない点や梁行がやや狭い点から SB02・03 とは異なる施設と思われ、SB01 とほぼ同一な建物の傾きを指向している点から、SB01・04 は規格的に配置された建物の可能性が高いものと考えられる。SB05 は桁行 3 間・梁行未検出で、柱間の距離は桁行 2.90 ～ 3.20m、主軸方位は N － 6° － W である。柱穴は円形を呈し、径 0.80 ～ 1.00m、深さ 0.50 ～ 0.60mを測る。SB06 は桁行 3 間・梁行未検出で、柱間の距離は桁行 3.00m、主軸方位は N － 0° － W である。柱穴は円形または楕円形を呈し、径 0.90 ～ 1.20m、深さ 0.50 ～ 0.60mを測る。いずれも柱穴の規模が大きく、一般集落の建物とは異なるものと考え、SB05・06 の検出位置が明治 8 年の切図 (第 68 図) の記載にある「東淵寺堂敷」の範囲にあたることから、庫裏などの東淵寺に関わる施設と理解している。建物の時期については、出土した中世土師器から 13 ～ 14 世紀代が想定される。SB05 から遺物は出土していないため建物の年代は不明となるが、SB06 と切り合い関係にあり、建物を構成する柱穴はいずれも径 1.00m前後を測る同一規模のもので埋土も似ていることから、あまり時期を隔てない時間幅での建て替えであったと推察される。

調査区北西側で検出した SD02 ～ 05 は、1 つの集落の区割りとなる区画溝の可能性が考えられる。13 ～ 14 世紀代には西側を SD03 と南側を SD02 が区画する範囲までを集落の居住域としていたが、

16 世紀代後半になるとさらに区画が拡張され、SD03 から 22m西側の SD04 と SD02 から 9m南側の SD05 まで集落の居住域が広がっていたものと想定される。なお、SD04 から 7m西側の地点には南北道路 (現道) があり、SD04 の南北方向の主軸と同一方向を示すことから、現道が 16 世紀代後半の区画溝の軸を引き継いでいる可能性が考えられる。

以上の検討から、本遺跡における中世の集落は、12 世紀代後半～ 14 世紀代にかけて概ね 3 × 2 間の掘立柱建物が順次営まれていたものと想定される。ただし、検出した SB01・02 や SB03・04 はいずれも部分的に重複関係にあることから一定の時期幅をもつことが考えられ、さらに復元できた建物以外にも多数の柱穴が存在する点から、本遺跡では 12 世紀代後半～ 14 世紀代だけではなく、その前後にも継続して建物が営まれていたものと捉えられる。また、これらの建物には総柱建物は存在しない点から特殊な用途を目的とした建物ではなく、一貫して居住用建物が営まれていた可能性が高いものと思われる。本遺跡の中世の集落構造は、13 ～ 16 世紀代後半の間に集落西限は SD03 から SD04 へ、南限は SD02 から SD05 へ区画の拡張があるものの、調査区北西側には一貫して居住用建物が存在し、調査区東側には東淵寺に関わる施設が計画的に配置されていたものと理解したい。

第 66 図　外屋敷遺跡　中世 (鎌倉時代～安土桃山時代) の様相

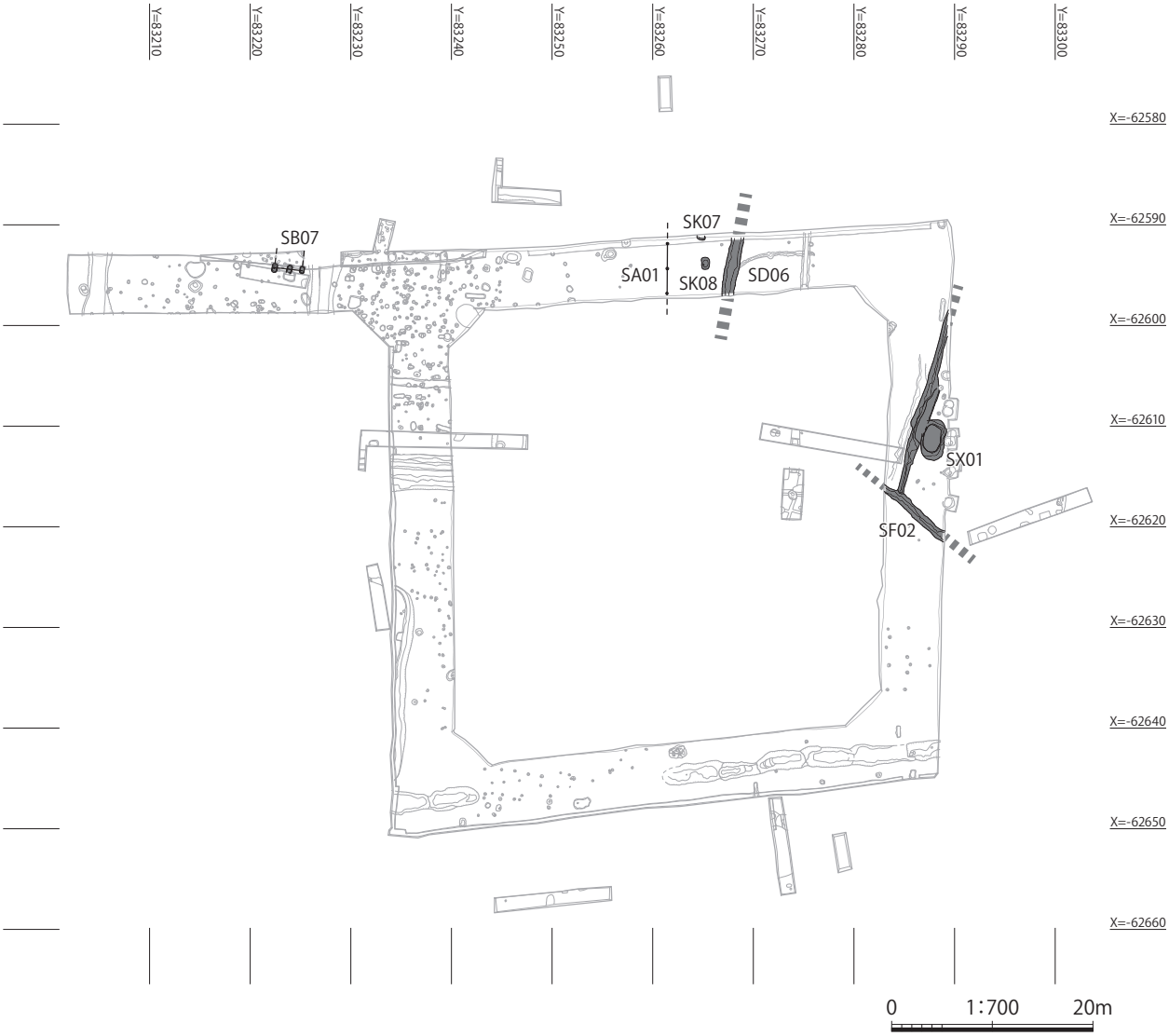
(6) 近世 (江戸時代) の様相（第 67 図）

江戸時代 (17 ～ 19 世紀代) に属する遺構として、掘立柱建物跡 SB07、溝 SD06、土坑 SK07・08、柵 SA01、道 SF02、その他の遺構 SX01 を検出している。

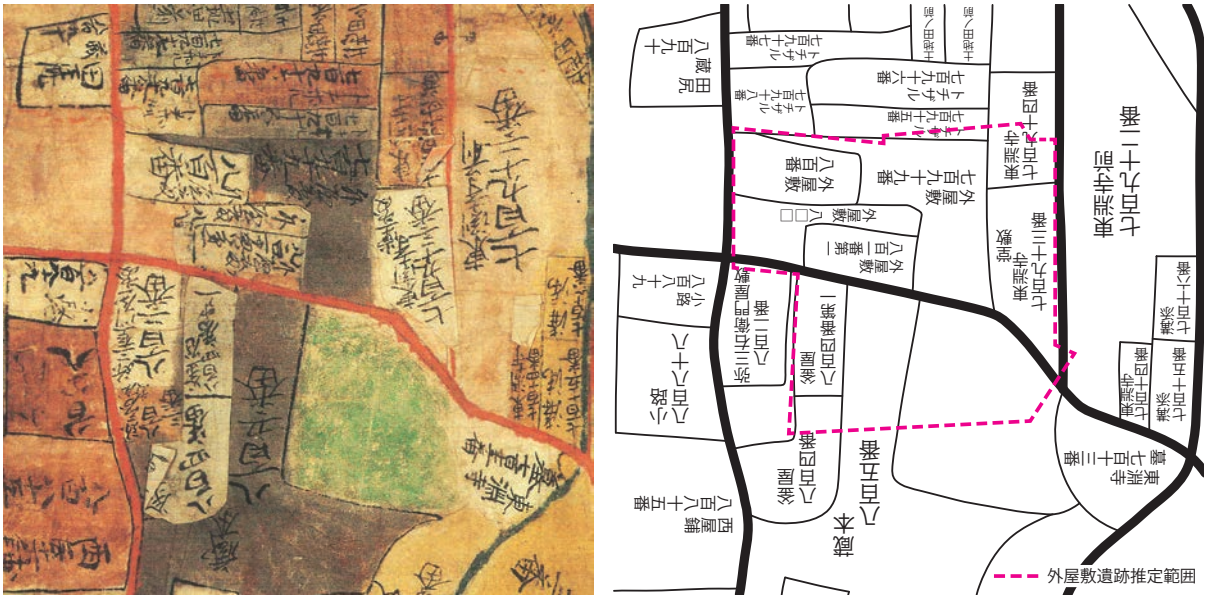
調査区北西側で検出した SB07 は、柱穴の掘方が小判形を呈し、柱間の距離 1.30 ～ 1.50mを測る。建物の全容は明らかではないが、住居としては規模が小さいため、倉庫など住居に付随する施設を想定している。

調査区北側で検出した SK07・08 は、隅丸方形を呈する 17 世紀代前半の土壙墓である。この西側を SA01 で区画し、屋敷地の縁辺部に柵を設けて、その外側を墓域としていた可能性が想定される。SD06 は、出土遺物から 19 世紀代を想定しており、屋敷地の東限を示す区画溝と考えられる。

調査区東側で検出した SF02 は、明治 8 年の切図 (第 68 図) の記載にある「東淵寺堂敷」の字境にあたることから、東淵寺堂敷西側の字境から北側の東淵寺へと続く里道の可能性が考えられる。SX01 は、東淵寺に関わる石仏に伴う遺構であり、近代～現代まで同位置に石仏が置かれていた状況を示すものである。



第 67 図　外屋敷遺跡　近世 (江戸時代) の様相



第 68 図　明治 8 年作成の旧大庭村切図 (外屋敷遺跡周辺を拡大)　※切図の上が北

第２節　外屋敷遺跡における官衙遺構と古代山陰道

外屋敷遺跡で検出した奈良時代～平安時代初期 (8 世紀代) にかけての遺構の年代やその変遷については第 1 節 -(4) で述べたとおりであるが、ここではその性格について言及するため再度遺構の性格や配置についてまとめ、若干の考察を試みたい。本遺跡の古代に属する遺構は、官衙遺構と考えられる区画溝 SD01 と道路遺構 SF01 である。

以下では、区画溝と道路遺構の２つの項目に分け、加えて現時点で推定されている正西道と周辺遺跡の配置から見た外屋敷遺跡の位置付けを検討したい。

(1) 区画溝 SD01（第 69 図）

SD01 は、南北溝を a・b 地点、南北溝と東西溝が連結する c 地点、東西溝を d・e 地点で検出している (第 69 図)。a ～ e 地点の 5 箇所で検出した SD01 は、いずれも掘方の形状が箱堀状を呈する同一の溝であり、これらは一連の遺構となる。検出した範囲での規模は、南北 (東辺)25m、東西 (南辺)45mを測る。主軸方位は、南北溝が N － 3° － E、東西溝が N － 93° － E を測り、南北溝と東西溝の連結部分は 90° の直角をなしている。溝埋土は黒褐色土を主体とし、a 地点では溝の掘り直しの痕跡を確認した。c 地点では溝埋土の上層部分で西側から東側へ地山と同じ茶褐色土が流れ込んでいる状況が確認でき、土塁の存在を想定させるものであった。豪族居館を連想させるものではあるが、溝より内側から大型の柱穴は確認できず、その詳細は今後の検討課題である。

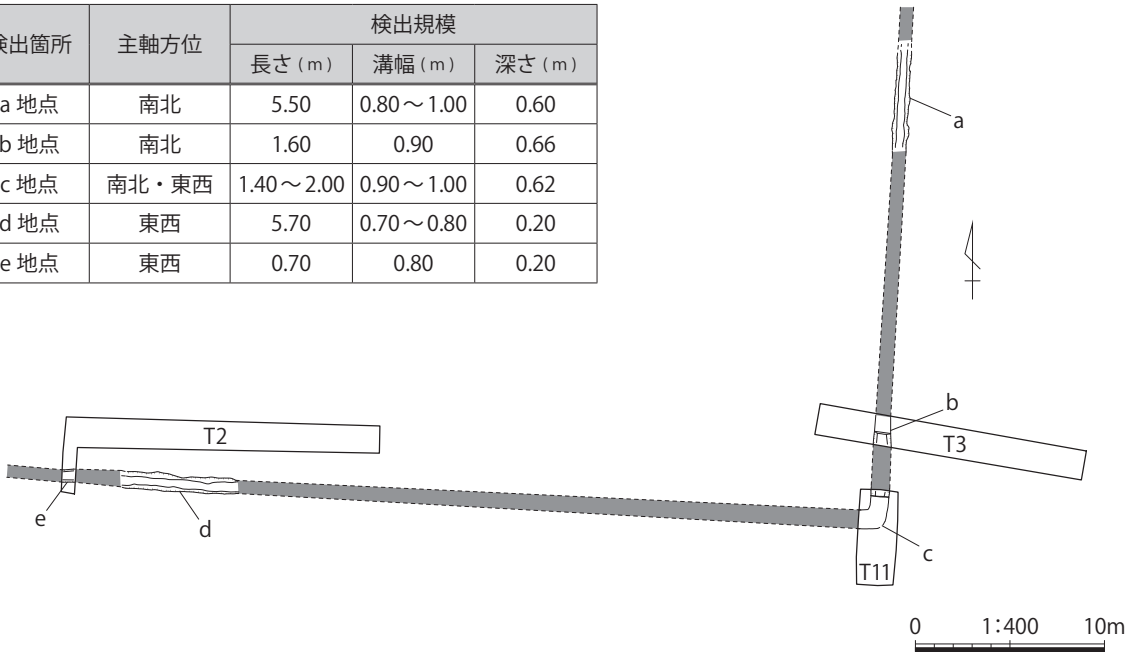
本遺跡周辺でこのような箱堀状の掘方をもつ区画溝の類例として、本遺跡から東へ 400mの下黒田遺跡で検出された SD04 が挙げられる。SD04 は、古代官衙遺構の区画用小溝に位置付けられており、本遺跡で検出した SD01 と掘方の形状が共通している。出土した高台付長頸壺から SD04 の時期は 8 世紀代後半の年代が与えられている。

SD01 の時期は出土した須恵器 (28-1) の年代から 8 世紀代中頃～後半を想定しているが、溝埋土か

ら出土しているため、溝の廃絶時期を示すものと捉えている。溝の性格は、官衙施設あるいは集落の敷地内部を分割したり、敷地外周に巡らして周辺区域と区別するための区画溝と評価でき、遺構配置から敷地の南東角付近の区画を示すものと考えられる。

表 4　区画溝 SD01 の規模

検出箇所	主軸方位	検出規模		
		長さ（m）	溝幅（m）	深さ（m）
a 地点	南北	5.50	0.80～1.00	0.60
b 地点	南北	1.60	0.90	0.66
c 地点	南北・東西	1.40～2.00	0.90～1.00	0.62
d 地点	東西	5.70	0.70～0.80	0.20
e 地点	東西	0.70	0.80	0.20



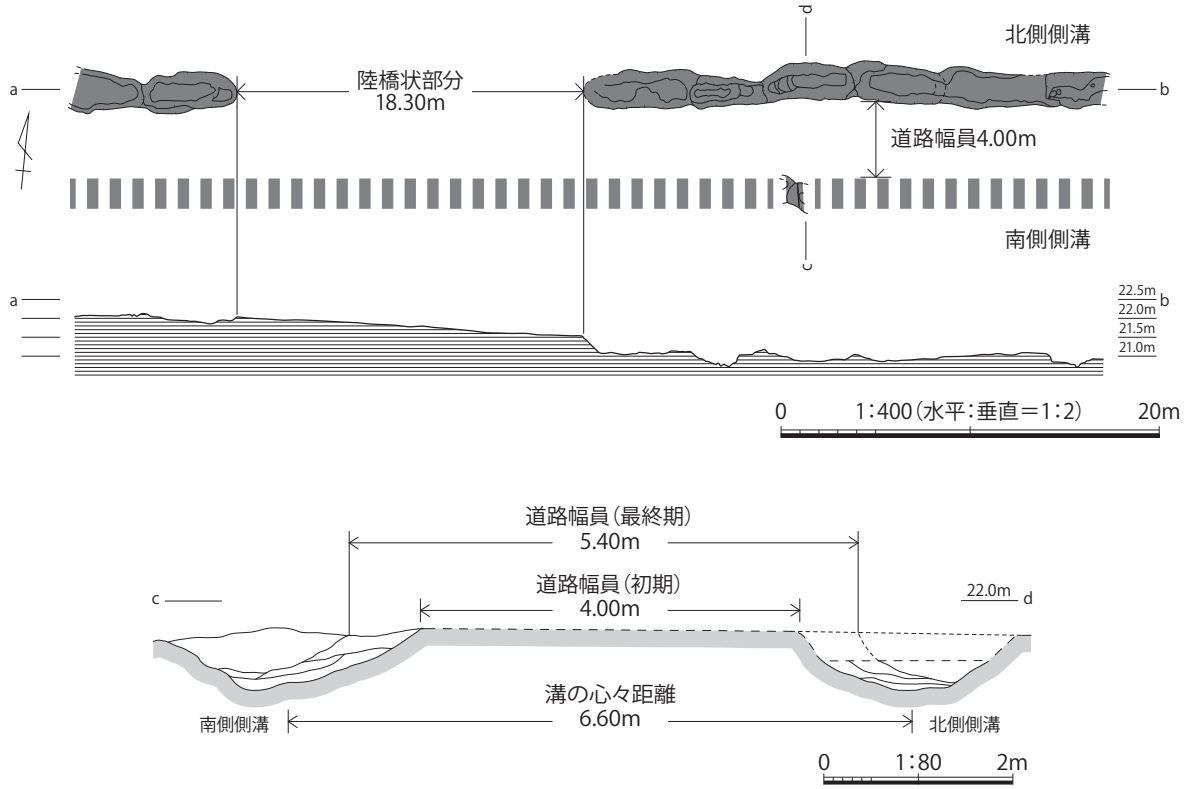
第 69 図　区画溝 SD01 配置図

（2）道路遺構 SF01（第 70 図）

SF01 は、先述した SD01 から南側へ 26m離れた地点で検出している。東西方向の道路で、両側に連続土坑状の掘方をもつ側溝を備えている。このような道路遺構の類例は、東京の東山道武蔵道（7 世紀末～ 8 世紀初頭）で見られ[(12)]、この遺跡では道路幅員 12mを測り、道路の両側に細い土坑を連ねた形状で側溝が検出されている。

SF01 の南北横断規模は、北側側溝の溝南肩から南側側溝の溝北肩までの道路幅員が 4.00m、溝の心々距離は 6.60mで、道路の主軸方位は N － 85° － E を測る。溝断面から、道路幅員は最終期に 5.40 mとなっていた可能性がある。北側側溝は、検出した範囲での規模は東西 54.80mを測り、18.30m に亘って陸橋状に途切れている部分がある。この途切れ部分は、官衙施設あるいは集落への出入り口部分を想定させるものだが、何が存在していたのかを今後解明すべき課題として挙げておきたい。

本遺跡で検出した SF01 は、正西道推定地から検出されたものではあるが、古代道の道路幅員は概ね 6.00 ～ 12.00mとなることから、SF01 を正西道とするには規模が小さく、現時点ではこれが正西道となる可能性は低いものと考えている。遺構の性格は、正西道を主要幹線路とした場合、今回検出した SF01 は正西道と並走する準幹線路となるものと評価したい。



第 70 図　道路遺構 SF01 配置図・断面図

（3）外屋敷遺跡 SF01 と下黒田遺跡 SD01・02 の主軸方位について（第 71 図）

ここではやや広域な視点から、外屋敷遺跡で検出した SF01 と下黒田遺跡で検出されている SD01・02 を比較し、同じ主軸方位を示す２つの遺構について、その関連性を検討してみたい。

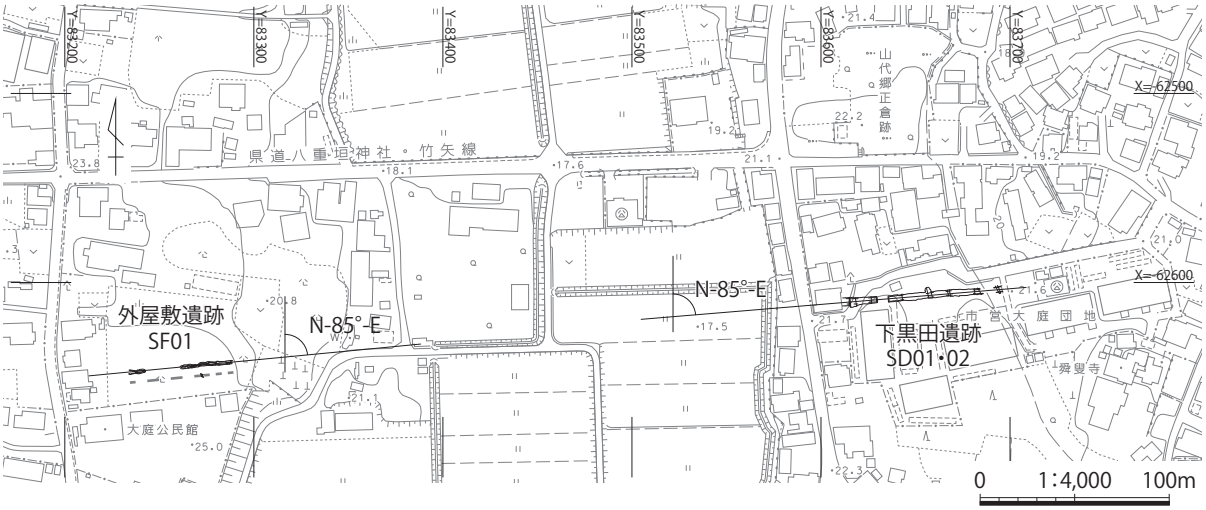
外屋敷遺跡 SF01 は先述したように、連続土坑状の掘方をもつ側溝を備えた道路遺構である。下黒田遺跡 SD01・02 は、検出した範囲での規模は長さ 60.30m、幅 3.00 ～ 3.60m、深さ 0.80 ～ 1.30 mを測り、逆台形状の掘方をもつ大溝である。調査時に部分的な断面調査しか実施されていないため[(13)]、溝の掘方が連続土坑状となるかは定かではない。この大溝は、山代郷正倉域の南限を区画する東西大溝とされ、山代郷正倉の南側から下黒田遺跡の東西方向の溝 (SD01・02) までの空間は、正倉に伴う作業空間と推測されている[(14)]。

これらの遺構の位置関係は、外屋敷遺跡 SF01 から東側へ 400mの地点に下黒田遺跡 SD01・02 が位置する。主軸方位は、外屋敷遺跡 SF01 と下黒田遺跡 SD01・02 はともに N － 85° － E となっている。ここで注目されるのは、道路遺構と大溝といった性格が異なるものではあるが、同じ主軸方位を示すことから規格的に配置された同時期の遺構の可能性が高いという点である。

また、外屋敷遺跡 SF01 と下黒田遺跡 SD01・02 は、同じ主軸方位を指向している点から正西道を意識した遺構配置の可能性も考えられる[(15)]。出雲市古志町に所在する古志本郷遺跡の事例[(16)]では、8 世紀前半と後半の２時期の遺構群があり、古い時期の遺構群は方位座標軸から 33°前後ずれているのに対し、新しい時期の遺構群は方位座標軸の向きとほぼ一致している[(17)]。遺跡の近くには古代山陰道 (県道多伎江南出雲線) が推定されており、この道路は方位座標軸から 33°前後のずれをもつこ

とから、古い時期の遺構群はこの山陰道を意識して配置されたものと考えられている。

外屋敷遺跡の場合、道路遺構 SF01 は方位座標軸から 85°ずれているのに対し、区画溝 SD01 は方位座標軸の向きとほぼ一致している[18]。SF01 は正西道を意識して並行に造られた可能性が考えられ、今回の調査では見つかっていないが、外屋敷遺跡にも古志本郷遺跡と同じように山陰道の方位を意識した遺構群と、方位座標軸の向きを意識した遺構群が存在するものと想定される。SF01 と SD01 の時期は出土遺物から概ね 8 世紀代中頃～後半を想定しており、古志本郷遺跡で想定された年代に比べてやや遅れるが、その推移は 8 世紀代中頃以降に山陰道を意識した遺構群から方位座標軸を意識した遺構群へ移行し、古志本郷遺跡で認められる変化と類似する可能性が考えられる。



第 71 図　外屋敷遺跡 SF01 と下黒田遺跡 SD01・02 との関係

(4) 古代山陰道 (正西道) と周辺遺跡の配置から見た外屋敷遺跡の位置付け（第 72 ～ 74 図）

島根県東部の古代山陰道の推定ルートは、勝部昭氏や中村太一氏が詳細な説を論じており (勝部 1993・中村 1996)、木本雅康氏が歴史地理学の見解からさらに詳細な検討を加えられている (木本 2011)。正西道は、『出雲国風土記』では松江市大草町に所在する出雲国府を発し、西へ向かって黒田・宍道・狭結（さよう）・多伎の駅家を経由して石見国へと繋がるとされている。

島根県東部での道路遺構の発掘調査事例は少なく、出雲国府周辺では国府から西へ約 4.3㎞の勝負谷・揩松・深田遺跡で道路側溝と考えられる遺構、国府から西へ約 6.0㎞の松本古墳群で切り通し状の道路遺構が見つかっており、これらは正西道に関わる遺構とされている (第 72 図)。また、近年の発掘調査では、出雲市斐川町に所在する杉沢遺跡Ｄ丘陵の尾根上で道路遺構が見つかっている。この遺跡では、道路の両側に側溝を備え、幅員約 9 ｍの路面に波板状凹凸面をもつ道路遺構が検出されており、奈良時代に築造された駅路である正西道の一部と考えられている[19]。

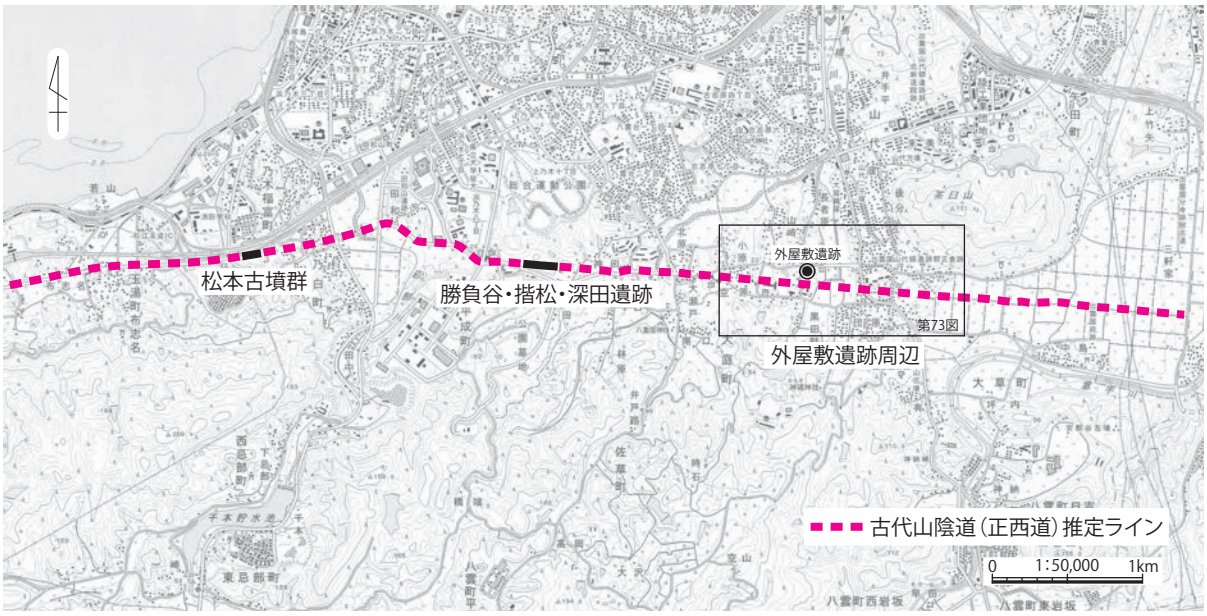
第 73 図に示した大庭町周辺の正西道については、勝部氏がルートを推定されている (以下、勝部案)。勝部案では、道Ａ～Ｄの 4 ルートが推定されており、道Ａが有力な候補と考えられている[20]。

道Ｂは、外屋敷遺跡の中央部を東西に横断するルートである。今回の調査で検出した SF01 は、道Ｂの推定ルートから南へ約 20 ｍ離れた地点に位置するが、正西道と並走する準幹線路となる可能性と、ここが正西道となる可能性が想定される。これまでの先行研究のなかで、正西道が推定されてい

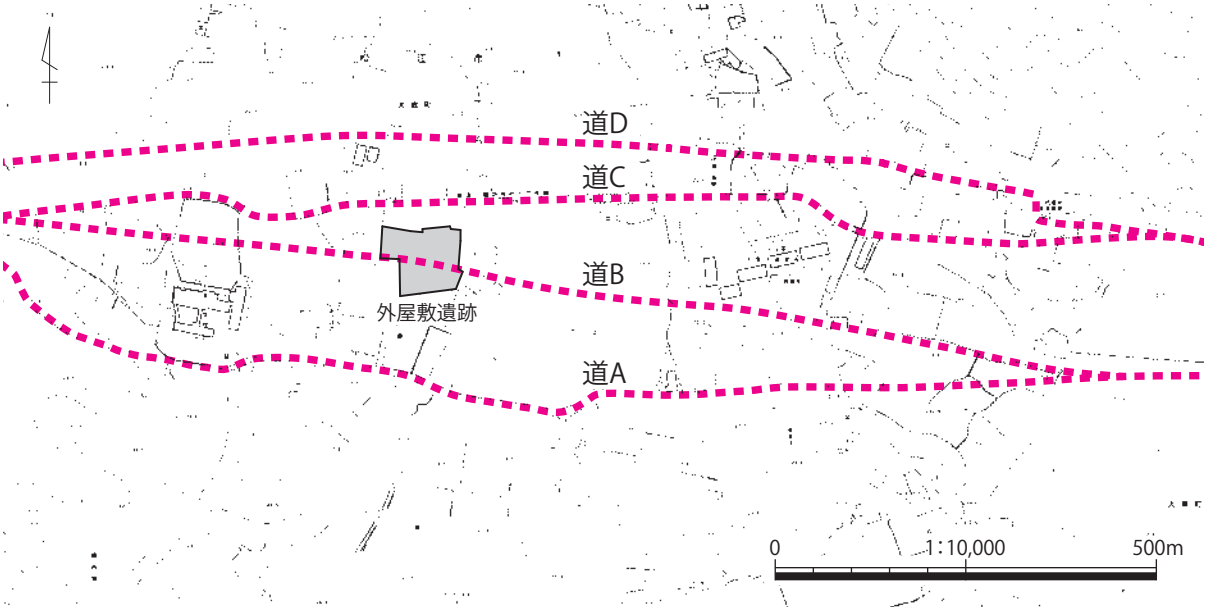
た地点において道路遺構を検出したことは重要となるが、一方で、古代道は直線を意識しているということを考えた場合、走行方向と規模（道路幅員）が問題となる。走行方向は低地部分で変わっている可能性も排除できず、規模も古代山陰道が見つかった魚見塚遺跡の事例[21]が示すように駅路でも道路幅員が９mとれない場合や、後世に削られていて幅が狭い時期の道路しか確認できない場合もある[22]。これらの課題については、今後さらに詳細な検証が必要となる。

道Ｃは、現在の幹線道路にあたる県道で、明治８年の切図にも記載が見られないことから、この時期以降の新しい道路と捉えられるため、現時点ではここに正西道が存在していた可能性は低いものと考えられる。

道Ｄは、山代郷正倉跡や山代郷南新造院（四王寺跡）につながるルートで、B21 遺跡や大庭原ノ前遺跡の調査が行われているが、現状で根拠となる遺構は見つかっていない。



第 72 図　松江市大草町～玉湯町周辺の古代山陰道（正西道）推定ルート

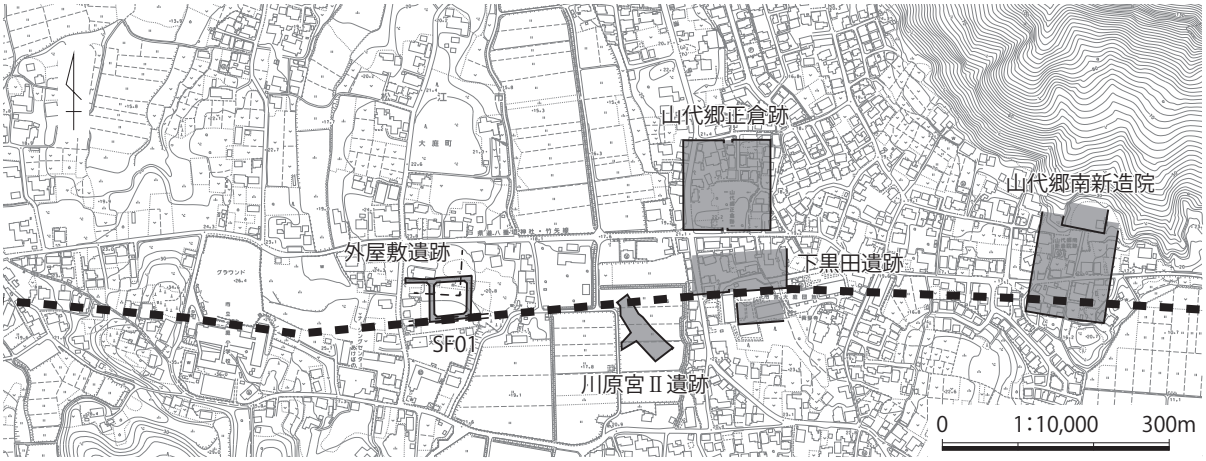


第 73 図　松江市大庭町周辺の古代山陰道（正西道）推定ルート（勝部案）

第 74 図に SF01 のルート案と周辺の官衙遺構を掲載した。これからすると SF01 の東側延長線上には、山代郷正倉跡の南辺を限る溝に推定される下黒田遺跡の SD01・02 がほぼ同一線上に位置することが分かる (詳細は第 71 図)。さらに東側には、山代郷南新造院が位置しており、ルート上に近い場所から、寺域の南辺を限る東西溝が検出されている [23]。この他、川原宮Ⅱ遺跡では 300 基に及ぶ粘土採掘坑が検出されているが、採掘坑の空白地部分が存在しており、この空白地を積極的に評価するのであれば、ここを SF01 の推定ルートとして評価することも可能である。

以上、SF01 については規模が小さいという点を除けば、ここが正西道となる可能性を想定しても何ら不思議ではない立地となっている。今後、SF01 の推定ルートについては、古代出雲の主要道路のひとつとして注目しておく必要があろう。

官衙の方位は正方位をとり、南を正面とするのが一般的であるが、官道や地形に制約されてそれ以外の方位をとる例があることも知られる [24]。今回の調査では官衙施設に関わる遺構として区画溝 SD01 以外で建物跡などは確認していないが、SF01 の北側側溝で検出した陸橋状に途切れる部分が官衙施設の出入り口にあたるものと想定し [25]、SF01 の北側に南を正面とした官衙施設が配置されていた可能性を考えている。



第 74 図　SF01 の復元案と周辺遺跡の位置

第 3 節　結語

今回の発掘調査によって明らかとなった事実もあるが、本報告を作成する中で様々な問題点や今後の課題とすべき点も見えてきた。これらを提示しておわりの言葉としたい。

弥生時代中期の集落が存在することは、周辺の大庭小原遺跡や砂口遺跡の例からも明らかとなっているが、その様相が分かる資料はごくわずかなものに限られている。今回の成果では、竪穴建物・掘立柱建物・加工段などの遺構は確認していないが、検出した土坑は付近に弥生時代の集落が営まれていたことを想定させるものであり、今後の資料の増加に期待したい。

古代 (8 世紀代) に属する遺構として区画溝 SD01 と道路遺構 SF01 を検出している。SD01 は、居住域の南東限を区画するものと考えられ、その内側に官衙施設あるいは集落が営まれていたことを想

定させるものであるが、今回の調査では当該期の建物や柱穴などの遺構は検出していないことから、これらの遺構確認が今後の課題となる。SF01 は、正西道と並走する準幹線路、そして規模が小さいという点を除けば、ここが正西道となる可能性が考えられるが、この評価については慎重な検討が必要である。今後の調査によって調査区範囲外で SF01 は直線的に延びるのか、あるいは途切れるのかという点、また、走行方向や規模についてはさらに検証が必要と思われる。

中世 (13 ～ 14 世紀代) に属する遺構として東淵寺に関わる建物に位置付けた SB05・06 があり、いずれも南北桁行は３間となるが東西梁行の規模は不明である。出土遺物から SB05・06 は 13 ～ 14 世紀代まで遡る可能性を指摘したが、規模や性格の確定が課題となる。なお、東淵寺については現段階で寺院などの建物配置が不確定のため、今後の調査が進展するのを待ちたい。

註

(12) 西国分寺地区遺跡調査会　1999 年 『日影山遺跡　東山道武蔵路』による。
(13) 下黒田遺跡 SD01・02 は、調査時に重要遺構と判断されたため部分的に掘り下げ、現地保存となっている。
(14) 松江市建設部建築課・松江市教育委員会　1988 年 『下黒田遺跡発掘調査報告書』による。
(15) 外屋敷遺跡 SF01 と下黒田遺跡 SD01・02 が同じ主軸方位 N － 85° － E を示すことについて、この主軸の傾きは何かを基準としていた、あるいは制約されていたのではないかと考えた。現段階で大庭町周辺に古代山陰道 (正西道) と確定できる道路遺構は見つかっていないが、可能性のひとつとして、ここでは古代山陰道を意識した遺構配置なのではないかという点を指摘しておく。
(16) 島根県教育委員会　2003 年 『古志本郷遺跡Ⅴ』による。古志本郷遺跡の報告では、神門郡家と出土遺構の評価 (第 10 章) の中で、神門郡家と推定される大形建物群が２時期に分かれ、８世紀前半に属するⅠ期遺構群が方位座標に 33° 前後斜交するのに対し、８世紀後半に建て替えられたⅡ期遺構群がほぼ方位座標軸に一致する点を指摘し、Ⅰ期建物群は古代山陰道の地割に制約された遺構配置であると考察されている。
(17) ここでの方位座標軸は、古志本郷遺跡 G 区の推定郡庁遺構の主軸方位 W － 33° － S を示す。方位座標軸は東西軸である。
(18) ここでの方位座標軸は、外屋敷遺跡 SF01 の主軸方位 N － 85° － E を示す。方位座標軸は南北軸である。
(19) 出雲市教育委員会　2016 年 『杉沢遺跡・杉沢Ⅱ遺跡・杉沢横穴墓群』による。
(20) 勝部氏は道 A を古代山陰道 (正西道) の有力な候補とした根拠について、まず、出雲国府付近の地図上に出雲国府の建物群の中心軸を南北に延ばしたラインと出雲国府の中央を中心軸とした東西に延ばしたラインを引っ張って、出雲国府を中心に１里単位を基準とした格子状のラインを地図に落とした。そこから、出雲国分寺・北新造院・南新造院・山代郷正倉などは計画的な配置であったことを想定されている。そして、これまでに推定されていた古代山陰道 (道 B) は、出雲国府の中央から延びる東西ラインの延長線上には合致しないことを指摘され、計画的な配置があったと考えるならばという前提で、道 A を古代山陰道と考えられている。また、文政 4(1821) 年に描かれた「出雲十郡絵図」と現代の地図を対比され、出雲国府から西の玉湯町へ向かう直線道路を古代山陰道の名残りではないかと推察されている。
(21) 松江市朝酌町に所在する魚見塚遺跡は、『出雲国風土記』の道度条に記された隠岐へも続く枉北道推定地にあたり、平成 28 年度の発掘調査で南北方向の古代道路が検出された。この古代道路は幅員 7.5mを測り、側溝を備えている。路面では波板状凹凸面を確認し、枉北道である可能性が高いとされている。
(22) 島根大学法文学部教授　大橋泰夫氏のご教示による。
(23) 松江市埋蔵文化財調査室からの情報提供による。入稿後に実施された山代大畑遺跡の調査成果であり、詳細な位置を入れることはできなかったが、宅地造成に伴う確認調査により幅 3.6mの東西溝が検出された。ただし、この溝の性格については、寺域を限る溝なのか、寺に先行して設けられていたものなのか評価が定まっていない。今後の調査報告で修正が加えられる可能性もあることをお断りしておく。
(24) 奈良文化財研究所　2003 年 『古代の官衙遺跡　Ⅰ遺構編　Ⅶ-5 建物造営方位』による。
(25) 外屋敷遺跡 SF01 の北側側溝で陸橋状に途切れる部分は東西 18.3mを測り、下黒田遺跡 SD01・02 の間で検出されている陸橋状遺構は東西 5.8mとなっている。外屋敷遺跡の遺構は、下黒田遺跡と比べて規模が大きいことが指摘できる。

参考文献

勝部　昭　1993 年 「正西道の検討」『出雲古代史研究 3』 出雲古代史研究会
木本雅康　2011 年 『古代官道の歴史地理』 同成社
島根県教育委員会　1997 年 『松本古墳群・大角山古墳群・すべりざこ古墳群』
島根県教育委員会　2003 年 『古志本郷遺跡Ⅴ　出雲国神門郡家関連遺跡の調査』
島根県教育委員会　2008 年 『九景川遺跡』
島根県教育委員会　2016 年 『柳堀遺跡・茶臼遺跡・川原宮Ⅱ遺跡』
島根県教育委員会　2016 年 『魚見塚古墳・東淵寺古墳発掘調査報告書－松江市東部における古墳の調査 (2) －』
中村太一　1996 年 「出雲国風土記の空間認識と道路」『日本古代国家と計画道路』 吉川弘文館
奈良文化財研究所　2013 年 『発掘調査のてびき　各種遺構調査編』 同成社
松江市教育委員会　1988 年 『下黒田遺跡発掘調査報告書』
松江市教育委員会・公益財団法人松江市スポーツ振興財団　2014 年 『柳堀遺跡・大庭原ノ前遺跡』

土器・陶磁器

遺物番号	グリッド	出土位置	種類	器種・部位	法量（cm）			調整・文様の特徴		色調	備考
					口径	底径	器高	調整・手法	胎土・焼成		
9-1	F2	T1	土師器	皿	8.2	5.8	1.5	外　回転ナデ、回転糸切痕 内　回転ナデ	胎土　密 焼成　良好	外　橙色 内　橙色	近世土師器
9-2	F2	T1	陶器	火入	32.5	4.8	7.7	内面口縁部付近～胴部下方にかけて緑釉を施釉	胎土　密 焼成　良好	外　緑色 内　褐色	布志名焼　19 世紀代
9-3	F2	T1	磁器	皿	(12.2)	(4.0)	3.7	内面に二重斜格子文、見込は蛇ノ目釉剥ぎ	胎土　密 焼成　良好	外　白色 内　白色	波佐見焼　18 世紀代前半～中
9-4	E5 ～ F5	T2	土師器	皿	—	7.3	1.7	外　回転ナデ、回転糸切痕 内　回転ナデ	胎土　密 焼成　良好	外　黄褐色 内　黄褐色	中世土師器　13 ～ 14 世紀代
16-1	E4	SB01	土師器	皿	(9.6)	—	(1.0)	外　回転ナデ 内　回転ナデ	胎土　密 焼成　普通	外　橙褐色 内　橙褐色	中世土師器　13 ～ 14 世紀代
16-2	E4	SB01	白磁	皿	(12.2)	—	(1.9)	内面に櫛描文を施す	胎土　密 焼成　良好	外　淡白色 内　淡白色	12 世紀代後半～ 13 世紀代
22-1	J4 ～ J5	SB06	土師器	皿	—	(4.0)	(1.5)	外　回転ナデ、回転糸切痕 内　回転ナデ	胎土　密 焼成　普通	外　橙褐色 内　橙褐色	中世土師器　13 ～ 14 世紀代
22-2	J4 ～ J5	SB06	土師器	皿	(8.4)	(6.9)	1.2	外　回転ナデ、回転糸切痕 内　回転ナデ	胎土　密 焼成　良好	外　黄褐色 内　黄褐色	中世土師器　13 ～ 14 世紀代
22-3	J4 ～ J5	SB06	土師器	皿	(9.5)	(8.2)	1.8	外　回転ナデ、回転糸切痕 内　回転ナデ	胎土　密 焼成　良好	外　黄褐色 内　黄褐色	中世土師器　13 ～ 14 世紀代
22-4	J4 ～ J5	SB06	土師器	皿	—	(7.8)	(1.6)	外　回転ナデ 内　回転ナデ	胎土　密 焼成　良好	外　黄褐色 内　黄褐色	中世土師器　13 ～ 14 世紀代
24-1	D3	SB07	陶器	擂鉢	—	—	(7.0)	外　鉄釉 内　鉄釉、擂目	胎土　密 焼成　普通	外　赤褐色 内　赤褐色	在地系陶器　19 世紀代
28-1	E5	SD01	須恵器	坏	—	(8.7)	(1.6)	外　回転ナデ 内　回転ナデ	胎土　密 焼成　良好	外　灰色 内　灰色	出雲国府第 4 型式 (8 世紀第 3 ～ 4 四半期)
30-1	E4	SD02	土師器	皿	(7.2)	(6.4)	1.2	外　回転ナデ 内　回転ナデ	胎土　密 焼成　良好	外　赤褐色 内　赤褐色	中世土師器　13 ～ 14 世紀代
32-1	D3	SD03	土師器	皿	(11.5)	—	(2.4)	外　回転ナデ 内　回転ナデ	胎土　密 焼成　普通	外　褐色 内　褐色	中世土師器　13 ～ 14 世紀代
32-2	D3	SD03	土師器	坏	(13.3)	—	(3.8)	外　回転ナデ 内　回転ナデ	胎土　密 焼成　普通	外　黄褐色 内　黄褐色	中世土師器　13 ～ 14 世紀代
34-1	B3	SD04	陶器	天目碗	(11.4)	—	(4.7)	内面～胴部下方にかけて鉄釉を施釉	胎土　密 焼成　良好	外　茶色 内　茶色	瀬戸・美濃焼　16 世紀代後半
36-1	E5	SD05	陶器	皿	—	(4.8)	(1.2)	外　露胎 内　透明釉	胎土　密 焼成　不良	外　茶褐色 内　淡白色	肥前陶器　1580 ～ 1594 年代
36-2	E5	SD05	陶器	壺・甕類	—	—	(4.4)	外　横方向のナデ 内　ナデ	胎土　密 焼成　良好	外　茶褐色 内　茶褐色	瓷器系陶器　16 世紀代後半
38-1	H3	SD06	陶器	碗か	(13.4)	(4.5)	8.8	内面～胴部下方にかけて緑釉を施釉	胎土　密 焼成　良好	外　緑色 内　緑色	布志名焼　19 世紀代
42-1	H8 ～ J8	SF01	須恵器	壺	—	(7.0)	(1.7)	外　回転ナデ、ヘラケズリ 内　回転ナデ	胎土　密 焼成　良好	外　灰白色 内　灰白色	出雲国府第 4 型式 (8 世紀第 3 ～ 4 四半期)
42-2	H8 ～ J8	SF01	須恵器	無高台坏	—	(7.3)	(1.6)	外　回転ナデ、回転糸切痕 内　回転ナデ	胎土　密 焼成　良好	外　灰白色 内　灰白色	出雲国府第 4 型式 (8 世紀第 3 ～ 4 四半期)
42-3	E8 ～ F8	SF01	須恵器	高台付坏	(12.9)	(9.3)	4.1	外　回転ナデ 内　回転ナデ	胎土　密 焼成　良好	外　灰色 内　灰色	出雲国府第 4 型式 (8 世紀第 3 ～ 4 四半期)
42-4	E8 ～ F8	SF01	須恵器	坏蓋	—	(16.5)	(2.8)	外　回転ナデ 内　回転ナデ	胎土　密 焼成　やや不良	外　灰白色 内　灰白色	出雲国府第 4 型式 (8 世紀第 3 ～ 4 四半期)
42-5	H8 ～ J8	SF01	須恵器	高台付皿	—	(14.0)	(2.3)	外　回転ナデ、回転糸切痕 内　回転ナデ	胎土　密 焼成　良好	外　暗灰色 内　暗灰色	出雲国府第 4 型式 (8 世紀第 3 ～ 4 四半期)
44-1	J4 ～ J6	SF02	磁器	丸形碗	—	(3.3)	(3.6)	外面に草花文の染付	胎土　密 焼成　良好	外　白色 内　白色	肥前磁器　1780 ～ 1860 年代
44-2	J4 ～ J6	SF02	磁器	無稜杉形碗	(9.0)	—	(3.7)	口縁部に二重圏線 外面に山水文の染付	胎土　密 焼成　良好	外　白色 内　白色	肥前磁器　1780 ～ 1860 年代
44-3	J4 ～ J6	SF02	磁器	半筒碗	—	(7.2)	(4.6)	外面に流水文の染付	胎土　密 焼成　良好	外　白色 内　白色	肥前磁器　1780 ～ 1860 年代
47-1	F3	SK01	弥生土器	甕 (口縁部)	(17.1)	—	(2.6)	内外面ともに風化	胎土　石英含む 焼成　良好	外　浅黄色 内　浅黄色	松本Ⅲ -2 様式 (弥生時代中期)
47-2	F3	SK01	弥生土器	甕 (口縁部)	(19.6)	—	(3.5)	外　指頭圧痕文帯 (頸部) 内　ナデ	胎土　石英含む 焼成　良好	外　淡黄色 内　淡黄色	松本Ⅲ -2 様式 (弥生時代中期)
47-3	F3	SK01	弥生土器	甕	(14.3)	—	(10.2)	外　縦方向のハケメ 内　縦方向のハケメ	胎土　石英含む 焼成　良好	外　褐色 内　褐色	松本Ⅲ -2 様式 (弥生時代中期)
50-1	E5	SK03	弥生土器	甕 (胴部)	—	—	(7.4)	外　縦方向のミガキ 内　ハケメ調整後、ミガキ	胎土　石英含む 焼成　良好	外　黒色 内　淡褐色	松本Ⅲ -2 ～Ⅳ -1 様式 (弥生時代中期)
50-2	E5	SK03	弥生土器	甕 (底部)	—	(5.4)	(3.1)	外　縦方向のミガキ 内　ナデ	胎土　石英含む 焼成　良好	外　橙褐色 内　橙褐色	松本Ⅲ -2 ～Ⅳ -1 様式 (弥生時代中期)
52-1	E7	SK04	弥生土器	甕	(21.1)	—	(6.9)	外　ナデ 内　ハケメ調整	胎土　石英含む 焼成　良好	外　黄褐色 内　黄褐色	松本Ⅲ -2 ～Ⅳ -1 様式 (弥生時代中期)
52-2	E7	SK04	弥生土器	甕 (底部)	—	(4.3)	(4.9)	外　縦方向のハケメ 内　縦方向のハケメ	胎土　石英含む 焼成　良好	外　橙褐色 内　橙褐色	松本Ⅲ -2 ～Ⅳ -1 様式 (弥生時代中期)
54-1	G8	SK05	弥生土器	甕	(17.7)	—	(5.7)	外　横方向のハケメ 内　縦方向のハケメ	胎土　石英含む 焼成　良好	外　浅黄色 内　浅黄色	松本Ⅲ -2 ～Ⅳ -1 様式 (弥生時代中期)
54-2	G8	SK05	弥生土器	甕 (底部)	—	(5.6)	(3.5)	外　縦方向のミガキ 内　横方向のミガキ	胎土　石英含む 焼成　良好	外　橙褐色 内　橙褐色	松本Ⅲ -2 ～Ⅳ -1 様式 (弥生時代中期)
54-3	G8	SK05	弥生土器	甕	(22.7)	—	(6.2)	外　指頭圧痕文帯 (頸部) 内　ナデ	胎土　石英含む 焼成　良好	外　淡黄色 内　淡黄色	松本Ⅲ -2 ～Ⅳ -1 様式 (弥生時代中期)
56-1	J3	SK06	須恵器	無高台坏	11.7	8.0	4.6	外　回転ナデ、回転糸切痕 内　回転ナデ	胎土　密 焼成　良好	外　灰色 内　灰色	出雲国府第 3 型式 (8 世紀第 2 四半期)
56-2	J3	SK06	須恵器	高台付坏	15.7	10.0	6.6	外　回転ナデ、回転糸切痕 内　回転ナデ	胎土　密 焼成　良好	外　淡灰色 内　淡灰色	出雲国府第 3 型式 (8 世紀第 2 四半期)
58-1	J3	SK08	陶器	溝縁皿	12.2	3.9	2.8	見込に 3 箇所の砂目痕	胎土　密 焼成　良好	外　淡白色 内　淡白色	肥前陶器　1610 ～ 1650 年代
60-1	J5	SX01	土師器	皿	(7.2)	(4.7)	1.7	外　回転ナデ、回転糸切痕 内　回転ナデ	胎土　密 焼成　良好	外　褐色 内　褐色	近世土師器
60-2	J5	SX01	土師器	皿	(7.9)	(5.4)	1.4	外　回転ナデ、回転糸切痕 内　回転ナデ	胎土　密 焼成　良好	外　橙褐色 内　橙褐色	近世土師器
60-3	J5	SX01	土師器	皿	—	4.9	(1.1)	外　回転ナデ、回転糸切痕 内　回転ナデ	胎土　密 焼成　良好	外　橙褐色 内　橙褐色	近世土師器
62-1	K5 ～ L5	T4	埴輪	円筒	—	—	(10.6)	外　タテハケ、ヨコハケ 内　ヨコハケ、ナナメハケ	胎土　砂粒含む 焼成　良好	外　橙褐色 内　橙褐色	東淵寺古墳関係
62-2	J4 ～ J6	SF01	須恵器	子持壺	—	—	(6.5)	外　平行タタキ 内　ナデ	胎土　砂粒含む 焼成　良好	外　灰色 内　灰色	東淵寺古墳関係

石製品

遺物番号	グリッド	出土位置	出土土層	種類	法量（cm）			重量（g）	備考
					最大長	最大幅	最大厚		
63-1	G8	—	地山面	蛤刃石斧	12.1	6.3	1.9	273.87	刃部～着柄部は研磨による作り出し (弥生時代中期)

写　真　図　版

1　茶臼山山頂から外屋敷遺跡を望む（北東から）

2　外屋敷遺跡近景（南東から）

図版2　トレンチ調査①(第1次調査)

1　T2　完掘後(東から)

2　T2　SD01東西溝　埋土断面(南西から)

3　T3　SD01南北溝　検出状況(南東から)

4　T3　SD01南北溝　埋土断面(北から)

1　T10　SF01南側側溝　検出状況(北から)

2　T10　SF01南側側溝　埋土断面(北西から)

図版4　トレンチ調査③(第4次調査)

1　T11　完掘後(南から)

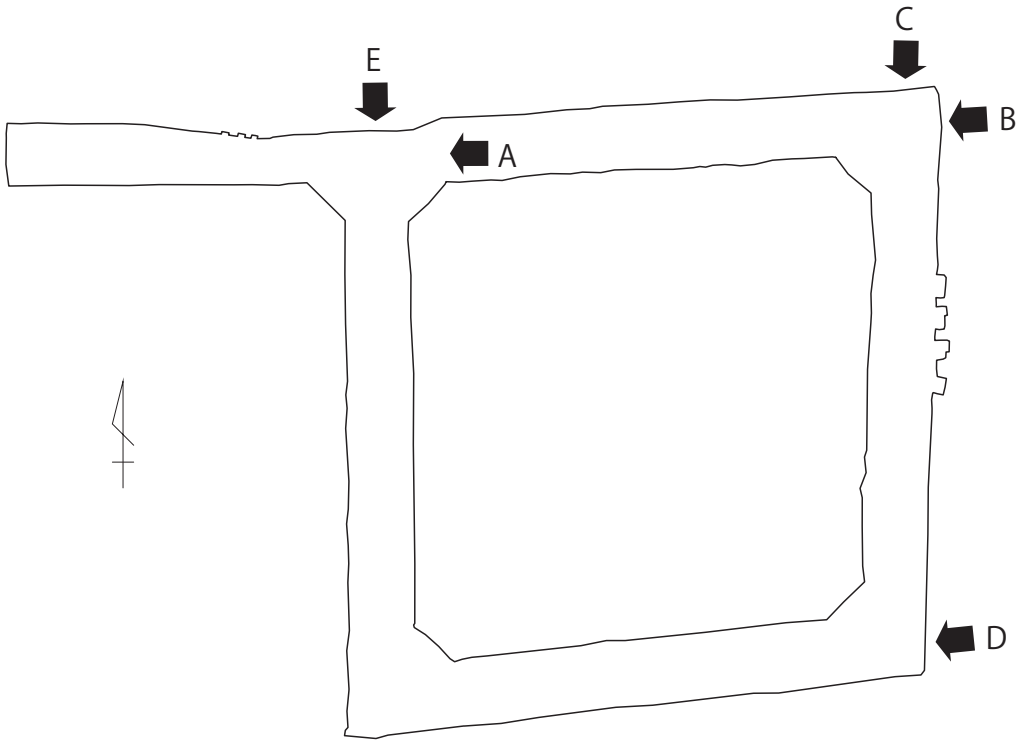
2　T11　SD01連結部分　検出状況(南西から)

1　T11　SD01連結部分　埋土断面(南から)

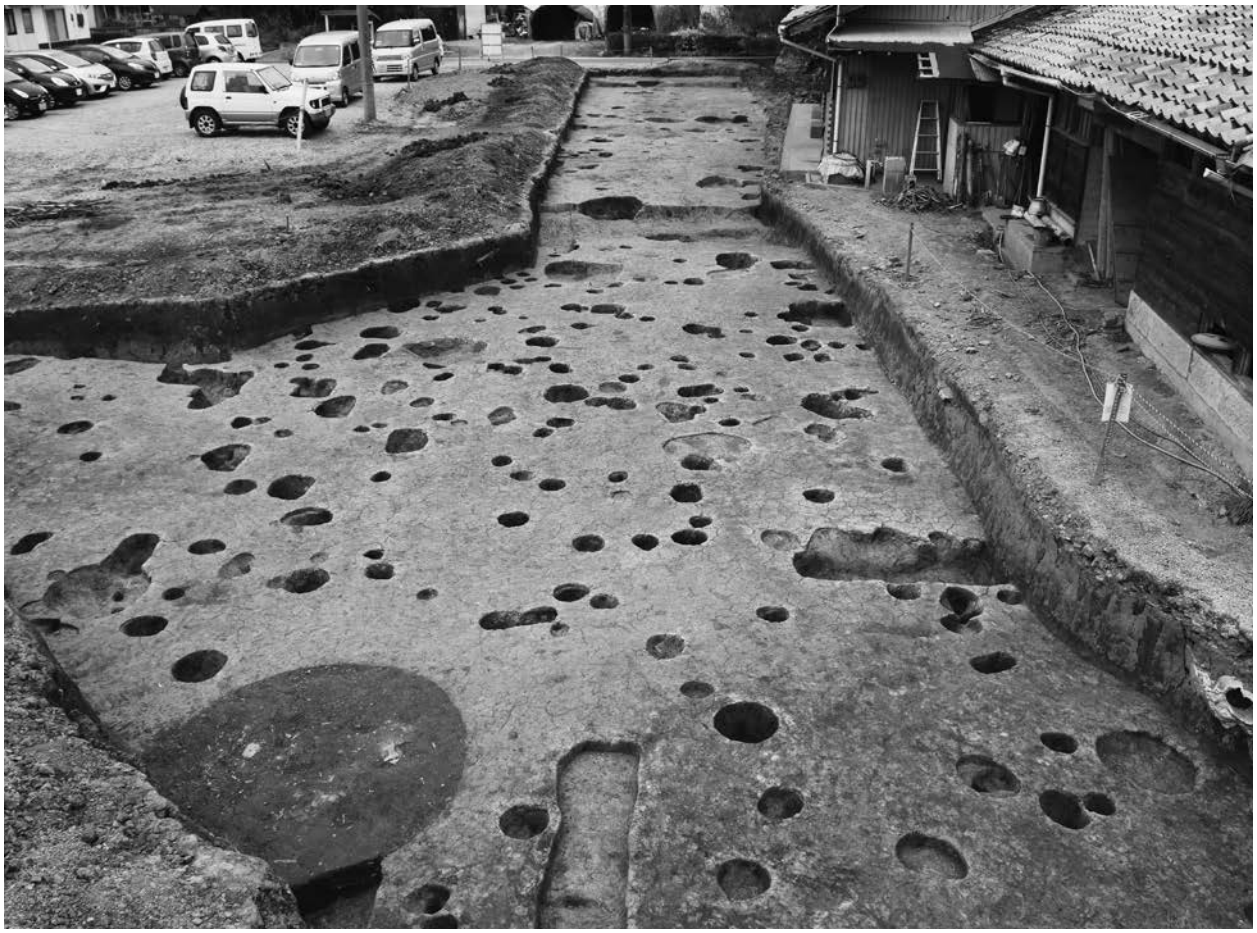
2　T13西側　完掘後(東から)

3　T13東側　完掘後(東から)

図版6　外屋敷遺跡の遺構①(第3次調査)



第3次調査　調査区完掘後全景写真　撮影方向A～E(図版6－1、図版7－1・2、図版8－1・2)



1　調査区北側西半B3～F3グリッド　完掘後全景(東から)　撮影方向A

1　調査区北側東半F3～J3グリッド　完掘後全景(東から)　撮影方向B

2　調査区東側J3～J8グリッド　完掘後全景(北から)　撮影方向C

図版8　外屋敷遺跡の遺構③(第3次調査)

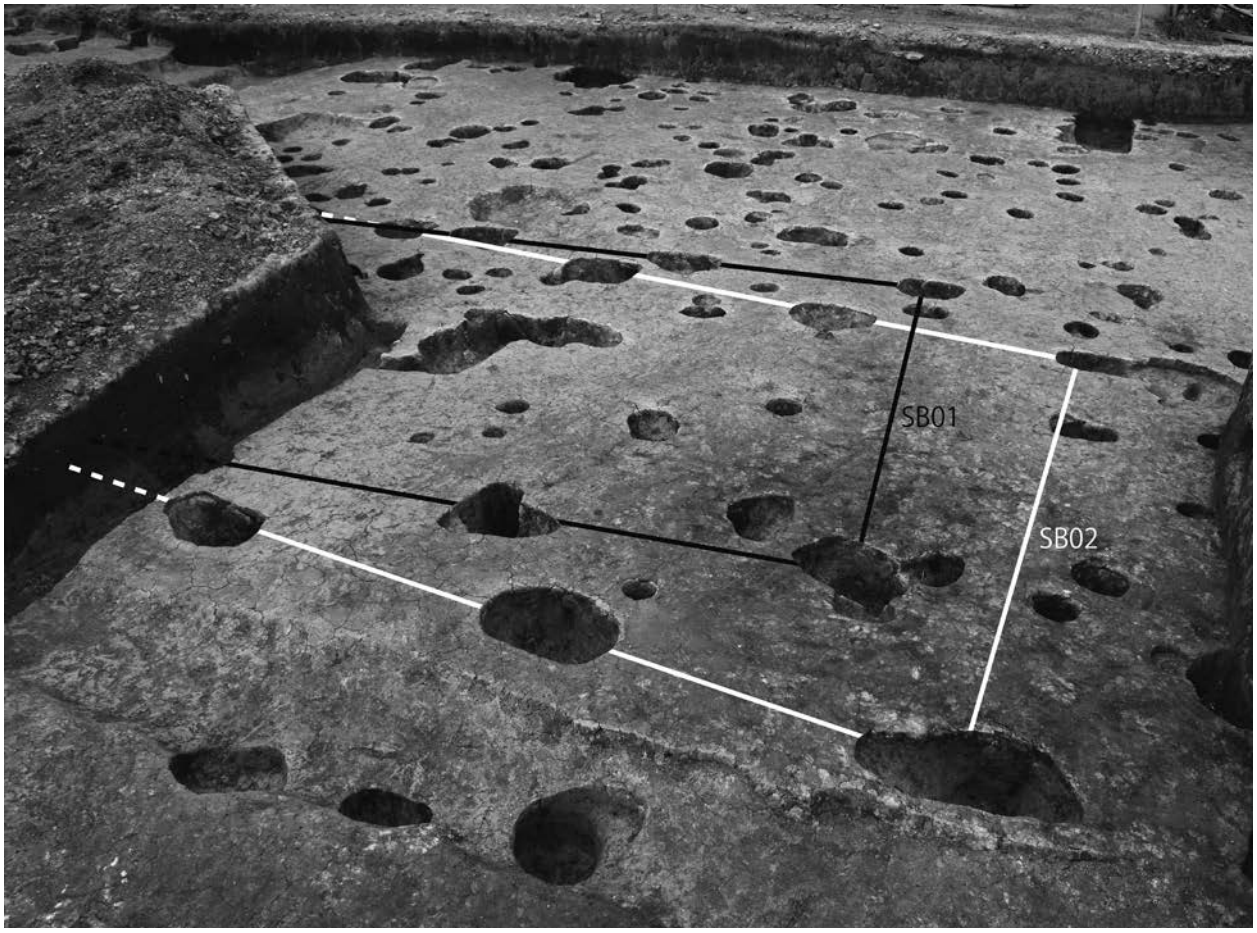
1　調査区南側E8～J8グリッド　完掘後全景(東から)　撮影方向D

2　調査区西側E3～E8グリッド　完掘後全景(北から)　撮影方向E

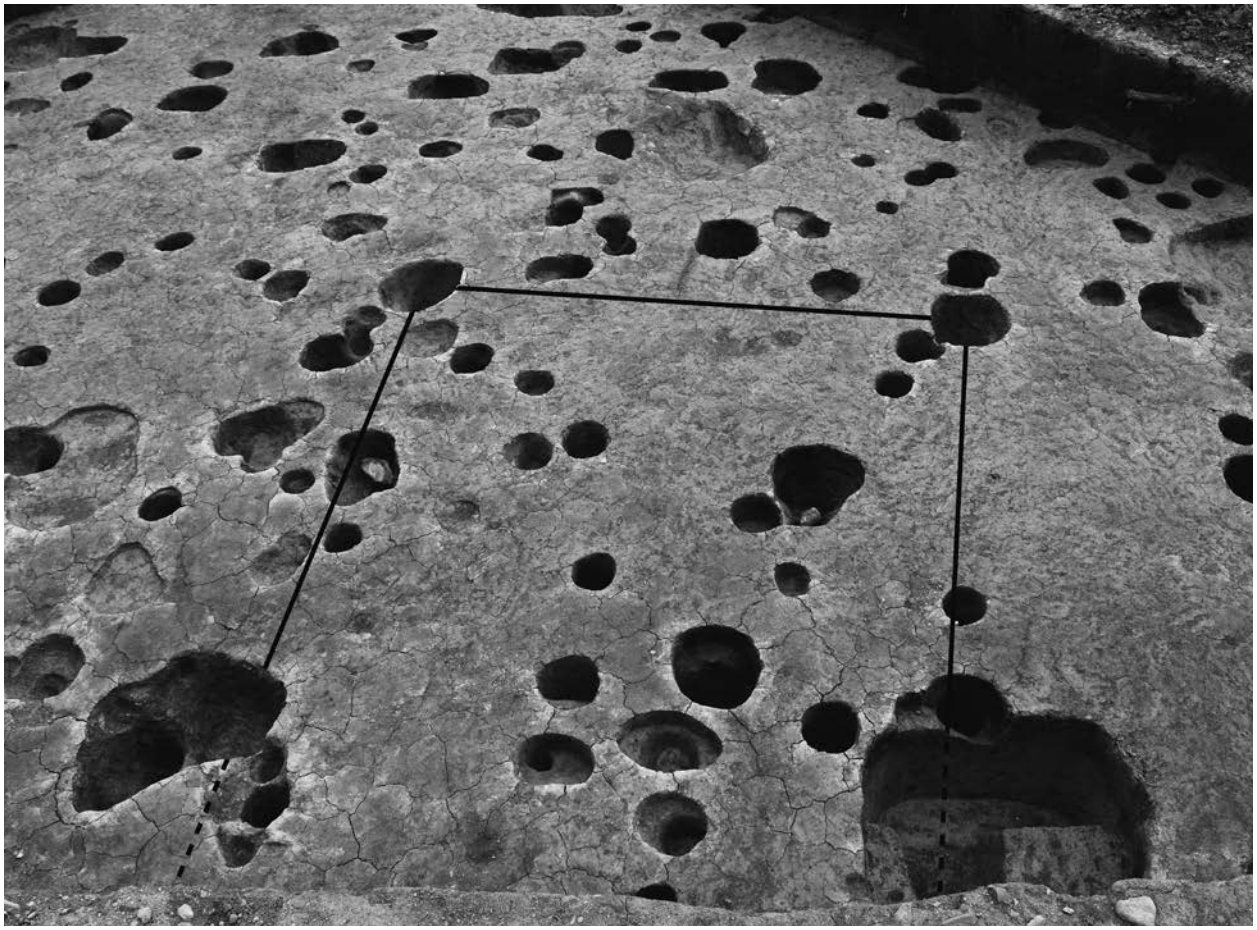
1　北壁(G3グリッド付近)土層堆積(南東から)

2　東壁(J4グリッド付近)土層堆積(北西から)

図版10　外屋敷遺跡の遺構⑤(第3次調査)



1　掘立柱建物跡SB01・SB02　完掘後(南東から)



2　掘立柱建物跡SB03　完掘後(北から)

1　掘立柱建物跡SB04　完掘後(東から)

2　SP05　断面(南から)

3　SP15　断面(南から)

4　SP18　断面(南から)

5　SP21　断面(南から)

図版12　外屋敷遺跡の遺構⑦(第3次調査)

1　掘立柱建物跡SB05・SB06　完掘後(南から)

2　SP24　断面(西から)

3　SP25・SP28　断面(西から)

4　SP26・SP29　断面(西から)

5　SP27・SP30　断面(西から)

1　SP31　断面(西から)

2　SB05・SB06と背後に東淵寺古墳(西から)

3　SB05・SB06　完掘後(南から)

4　掘立柱建物跡SB07　完掘後(南東から)

図版14　外屋敷遺跡の遺構⑨(第3次調査)

1　SD01南北溝　土層堆積状況(南から)

2　SD01南北溝　北壁埋土断面(南から)

3　SD01南北溝　a-b間埋土断面(南から)

4　SD01南北溝　完掘後(南東から)

1　SD01東西溝　完掘後(北東から)　※溝上部はSD05と重複

2　SD02　完掘後(北東から)

3　SD03　完掘後(南東から)

4　SD04　完掘後(南東から)

5　SD06とSK08　完掘後(南西から)

図版16　外屋敷遺跡の遺構⑪(第3次調査)

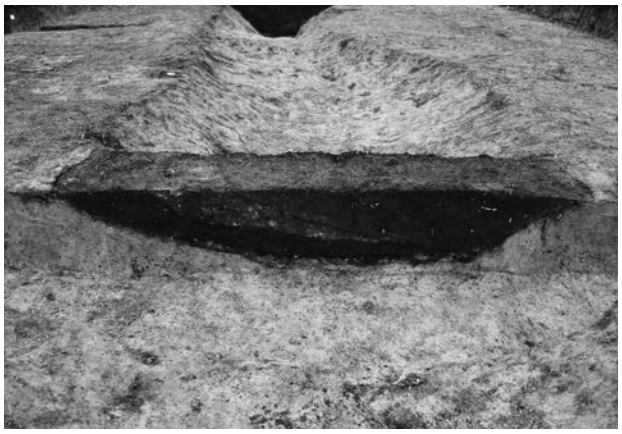
1　SF01北側側溝　検出状況(南東から)

2　SF01北側側溝(西)　完掘後(南西から)

1　SF01北側側溝(東)　完掘後(南西から)

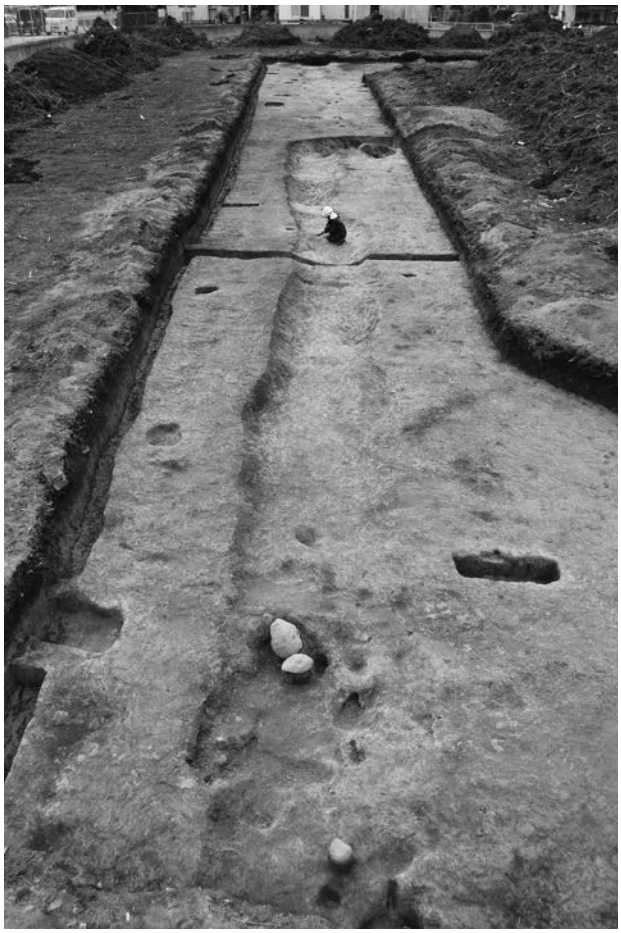
2　SF01北側側溝　土層堆積状況(東から)

3　SF01北側側溝　c-d間埋土断面(東から)



4　SF01北側側溝　e-f間埋土断面(東から)

図版18　外屋敷遺跡の遺構⑬(第3次調査)



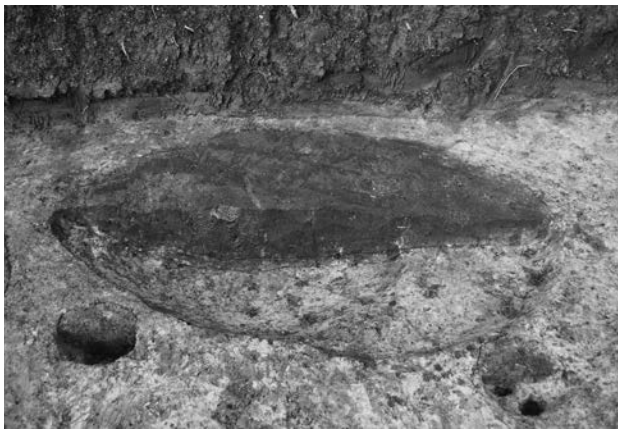
1　SF01北側側溝　完掘後(東から)

2　SF01と遠方に下黒田遺跡(西から)

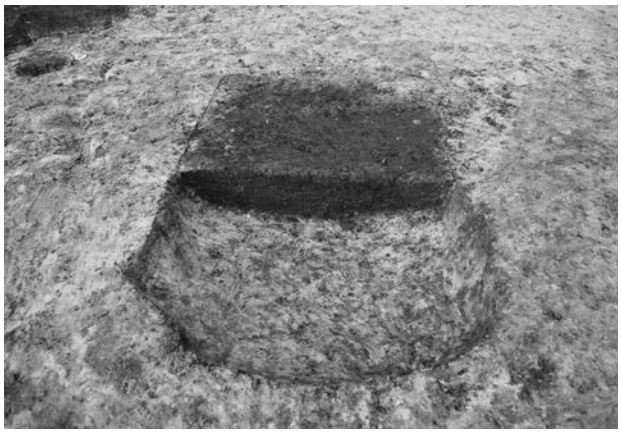
3　SF01北側側溝が途切れる間の陸橋状部分(南西から)

1　SF02　完掘後(北から)

2　SA01　完掘後(北から)



3　SK01　断面(南から)

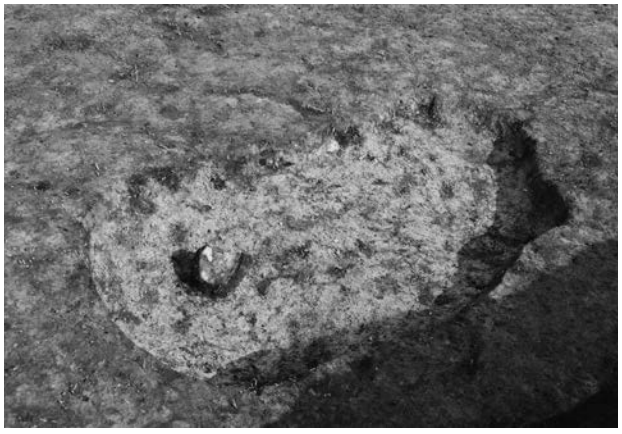


4　SK02　断面(南から)

5　SK03　断面(西から)

図版20　外屋敷遺跡の遺構⑮(第3次調査)

1　SK04　断面(西から)



2　SK05　完掘後(南から)

3　SK05　遺物出土状況(第54図-1)

4　地山面直上出土の蛤刃石斧(第63図-1)

5　SK06　完掘後(北西から)

6　SK06　遺物出土状況(第56図-1)

7　SK08　完掘後(南東から)

8　SK08　遺物出土状況(第58図-1)

1　SX01　完掘後(北西から)

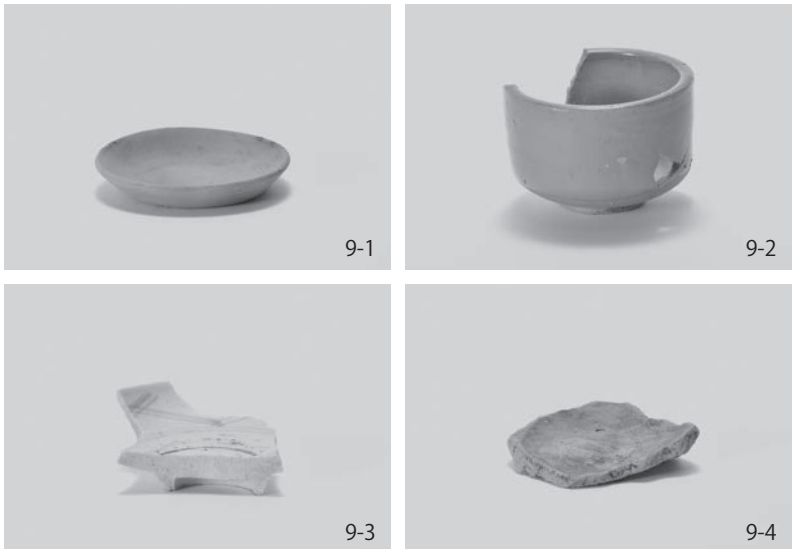
2　調査区南東角周辺の柱穴群(北東から)

3　調査区西側南半周辺の柱穴群(北西から)

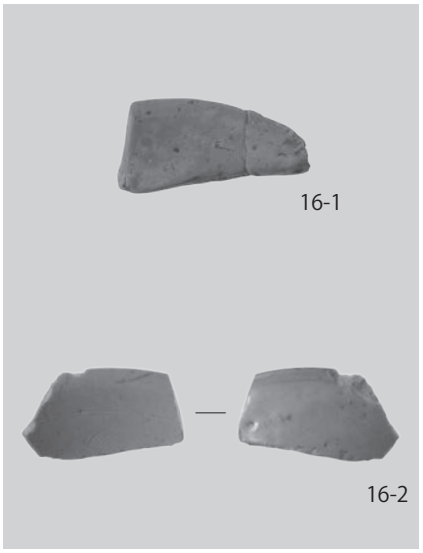
4　東淵寺古墳近景(西から)

5　第3次調査参加者

図版22　出土遺物①

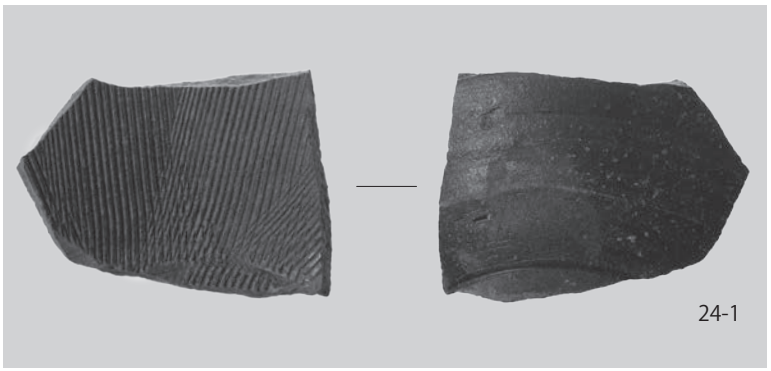


トレンチ調査出土遺物

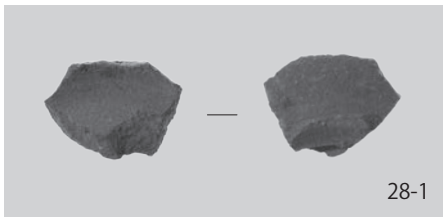


SB01出土遺物

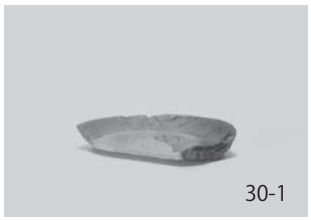
SB06出土遺物



SB07出土遺物

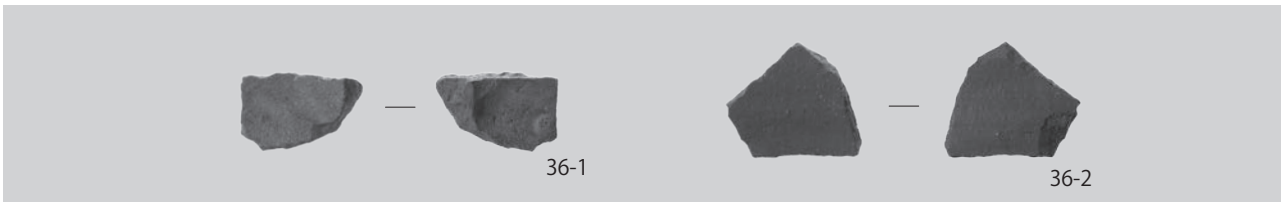


SD01出土遺物

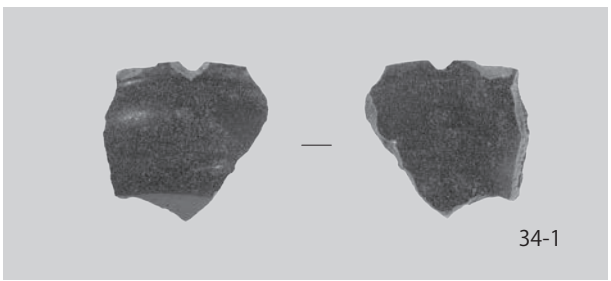


SD02出土遺物

SD03出土遺物

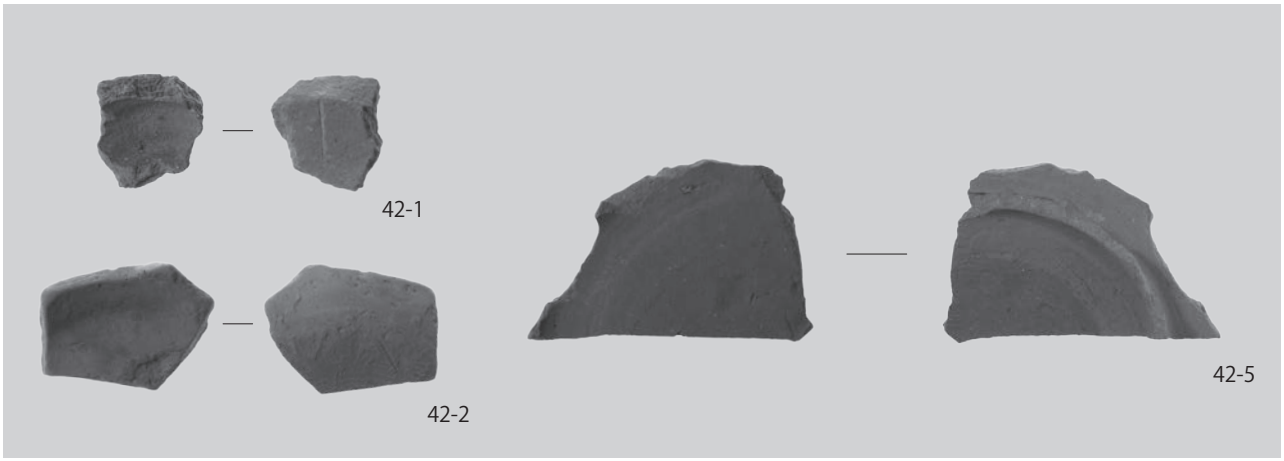


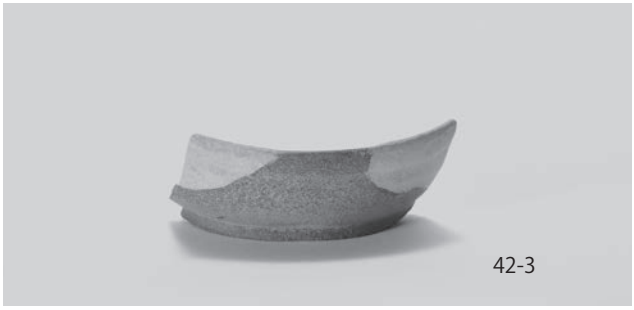
SD05出土遺物



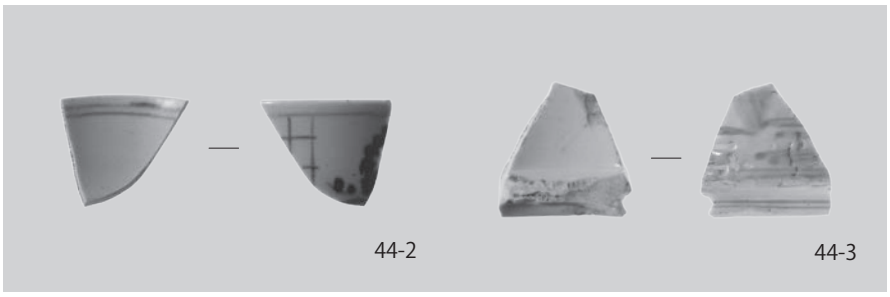
SD04出土遺物

SD06出土遺物



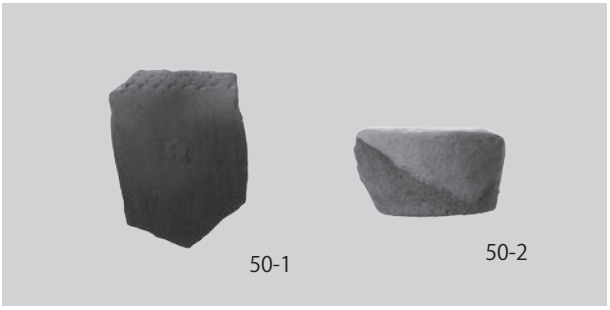


SF01 北側側溝出土遺物



SF02 出土遺物

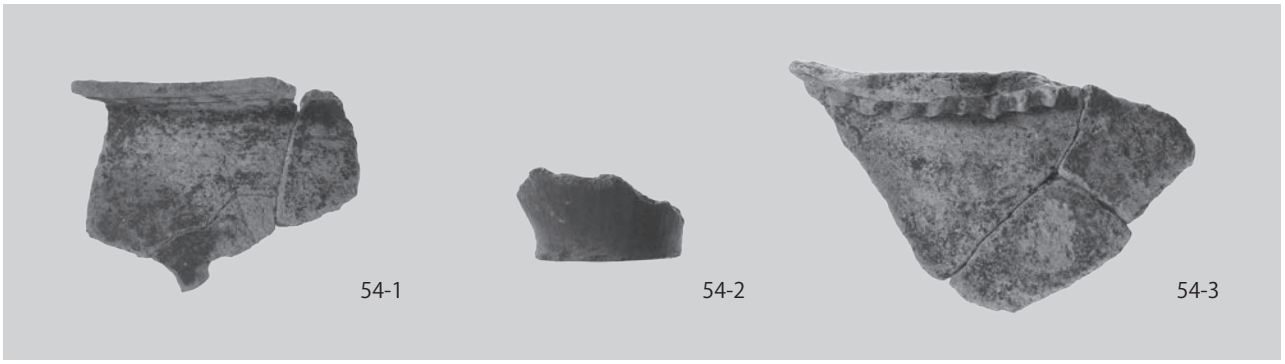
SK01 出土遺物



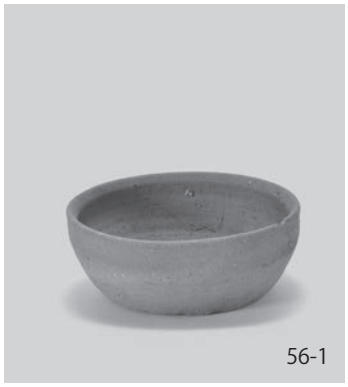
SK03 出土遺物

SK04 出土遺物

図版24　出土遺物③



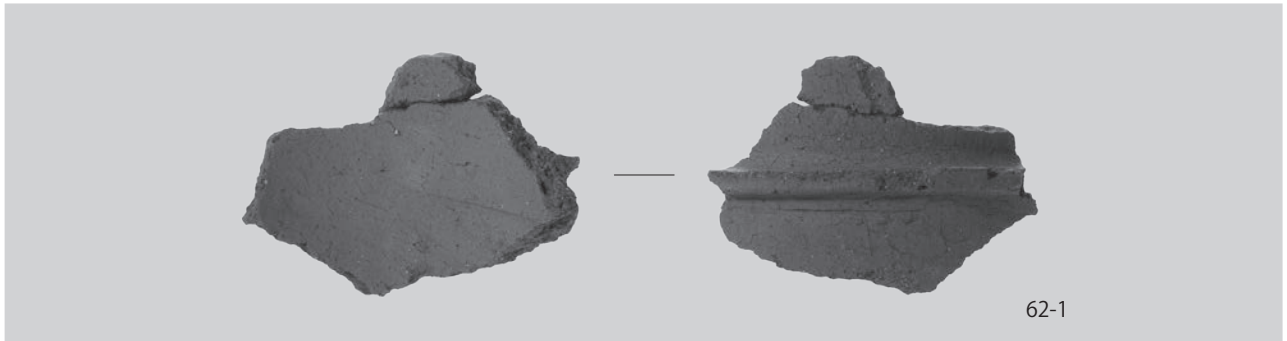
SK05出土遺物

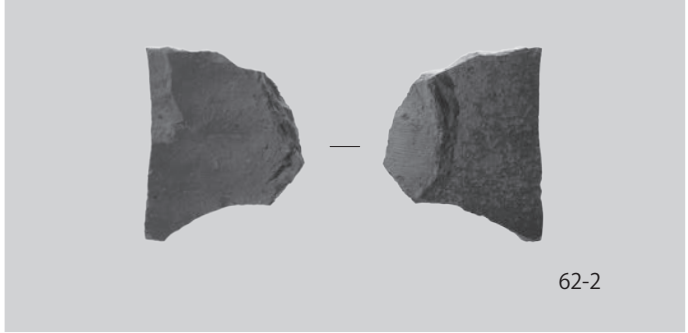


SK06出土遺物

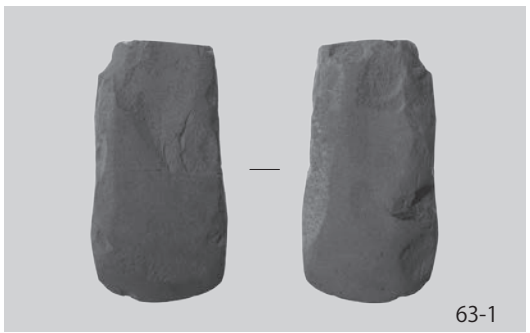
SK08出土遺物

SX01出土遺物





東淵寺古墳関係遺物



遺構外出土遺物

報告書抄録

ふりがな	そとやしきいせき
書名	外屋敷遺跡
副書名	大庭センターハイツ宅地造成工事に伴う発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	松江市文化財調査報告書
シリーズ番号	第 177 集
編著者名	小山泰生
編集機関	松江市教育委員会 （松江市歴史まちづくり部　まちづくり文化財課　埋蔵文化財調査室） 〒 690-8540　島根県松江市末次町 86 番地　　TEL：0852-55-5284
所在地	公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団 （埋蔵文化財課） 〒 690-0401　島根県松江市島根町加賀 1263-1　　TEL：0852-85-9210
発行年月日	2016 年 9 月

所収遺跡名	所在地	コード		北緯 東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号				
外屋敷遺跡（そとやしきいせき）	島根県松江市（しまねけんまつえし） 大庭町字外屋敷（おおばちょうあざそとやしき） 800 番地外（ばんちほか）	32201	D-1153	35° 25′ 55″ 133° 05′ 01″	20151214 ～ 20160325	1,431㎡	宅地造成工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
外屋敷遺跡	集落跡	弥生時代 ～ 近世	掘立柱建物 区画溝 道路遺構 土坑 墓壙 柱穴	弥生土器 土師器 須恵器 中世陶磁器 中世土師器 近世陶磁器 近世土師器	奈良時代 (8 世紀代) の区画溝・道路遺構・墓壙を検出し、当該期の景観を知る上で貴重な資料を得た。 中世 (12 世紀末～ 16 世紀代) の掘立柱建物跡の他、これまで近世の文献でしか知られていなかった東淵寺に関わる建物跡の柱穴を検出した。

松江市文化財調査報告書　第 177 集

大庭センターハイツ宅地造成工事に伴う発掘調査報告書

外屋敷遺跡

平成 28(2016) 年 9 月

編集・発行　島 根 県 松 江 市 教 育 委 員 会
公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団

印　　刷　有限会社　黒　潮　社